
女神と戦士と旅人と journey of norn

馬耳東風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神と戦士と旅人と j o u r n e y o f n o r n

【コード】

N5190Z

【作者名】

馬耳東風

【あらすじ】

勇士司令部の女戦士・ノルンに下された新たな任務。突如現れた謎の暗黒星雲の調査に向かう彼女は、前人未到の宙域、超銀河の旅に出る。

戦士として、旅人として、運命の女神の名を持つ者として、新たな出会いと戦いの幕が明ける。

勇士司令部

M78星雲。遠い昔に太陽を失いながら、光が絶えない神秘の世界。その中心に位置するウルトラの星。ここに建設されているプラズマスパークタワーは、この銀河の太陽となり、あらゆる惑星に光を降り注ぐ。故に、宇宙の民はこの星を「光の国」と呼んだ。

光の国の住人は太古の昔、プラズマスパークのエネルギーの直撃を受け、超人の姿へ変貌を遂げている。それは、本来の生命の進化とは違うものだった。失われた太陽の自らの手で再現する行為に対して、神が進んだ科学力への奢りと慢心に対して放った罰である。彼らは考えた。人々は、永遠の光と引き換えに、超絶な力と生命を得たのだと。それは自然の摂理、宇宙のサイクルから大きく逸脱する存在で、生命体と言うには、あまりに過酷な存在意義であった。彼らは、その存在理由を求め、この力を他の生命の営みを守ることで、再び世界の一部になろうと結論付けていく。宇宙には、彼らのような超人のほか、怪獣という超生命体が存在した。彼らは自然サイクルから外れ、相いれない価値観で弱い生命を脅かすことが多々起こりえる。その調停のために、この力を行使しようというのだ。あくまで、その星の人々が望む範囲の中で。

そんな理想を掲げ、彼らが組織したのが宇宙警備隊や銀十字軍、宇宙科学技術局と言った組織であり、それらが体系づけられ、訓練を受けた者たちは広大な宇宙へ散らばり、その存在の意味をなすために旅を続けている。

そんな彼らの故郷である、光の国。その名の通り、あらゆるものが眩い光を放ち、たんぱく質で構成されるような普通の人間の目ではその姿を見るところか、視力を奪われかねないほどの光がすべてに溢れている。そんな街にそびえ立つ、全長は想定できないほどの建築物である光の神殿の一室では、二人のウルトラマンが向き合っていた。一人は、頭部に巨大な角を備えた、宇宙警備隊大隊長のウ

ルトラの父。もう一人は、胸にスターシンボルが輝く、宇宙警備隊長のゾフィーだ。宇宙警備隊は、限らない星に戦士を送り込んで、混沌の調停を行う戦士を派遣する部隊である。ゾフィーはその指揮官として辣腕をふるっていた。ウルトラの父もまた最高司令官の立場にはあるが、名誉職的なもので、あくまでゾフィーらの顧問の立場であり、普段は光の国の行政に携わっている。そんな二人が他の誰も同席させずに、二人だけで話し合うこと自体異例のことであった。それだけ、彼らの会話の内容が重要な案件であることが、この状況だけでも十分に窺い知れる。

「ゾフィー、報告は聞いたが、やはり緊急を要するか」

「発見から間もないことですが、あまり放つてはおけません。突然発見された暗黒星雲と言うのは異常事態です。早急に手を打つ必要があります。アナザースペースからの攻撃で、この星の防衛網のせい弱さが露呈しています。監視の意味も込めて、何か策を講じる必要もあります。この星の安全も考慮に入れなければなりません」

「派遣先の様子が全く分からないというのが非常に危険なことであるのは、セブンやゼロの一件でも明らかだ。ましてや、今回発見されたエリアは、ボイドと思われる地域だ。そうになると、今度はどれだけ広大な未知の宙域を担当するのかもわからない」

深刻な様子で話しこむ二人の下に、もう一人のウルトラマンが姿を現した。元・宇宙科学技術局のヒカリである。数少ないスターシンボルの受勲者で、しかも彼は科学者としてその栄誉を手に入れたことでも、その優秀さがよくわかる。現在は宇宙警備隊に籍を置くほど戦闘力が高いのだが、高い教養は今でも重宝され、科学技術局の仕事も並行して行うことが多い。ヒカリは、ゾフィーの横に立ち、一礼すると話を始めた。

「お待たせしました。私が回収した物質の分析が終了したのでお知らせいたします。この物質にはディファレーター因子にきわめて近いものが含まれていることが判明しました」

「では、そこには我々のような存在がいるというのか」

「そこまでは断言できません」

彼らが言うディファレーター因子というのは、プラズマスパークに含まれる未知の宇宙線で、彼らを超人に変え、生物を怪獣に変えさえもする恐ろしいものである。彼らはウルトラマンになることはできたが、線量のバランスによってはどんな姿になっていたか想像もつかないのだ。

「この因子は、微妙なバランスによって変化が起こります。それに似ているというだけで、性質が同じともいいかねます。また、気になる点がもう一つ。この宇宙にはどうも未知の物質、ダークエネルギーと思われるものがあるようです。別に毒になるものではないと思いますが、このような物質が存在するとすると、任務に支障をきたす可能性もあります。未知の危険が漂う地帯と言えます」

「そうなるよ、やはり複数体制であたらせねばならないな」

大隊長であるウルトラの父はぽつりと漏らした。しかし、人員を割くと簡単に言っても、今の光の国で宇宙警備隊の人員の派遣地を整理するのは非常に困難なことである。短期間に光の国への直接攻撃を続けざまに受け、その修復や警備体制の見直し、宇宙の治安維持の本丸が攻め込まれたことでよからぬことを考える勢力が活動を活発化させているためだ。本陣である光の国の防衛と、各地への治安維持のための派遣は非常に組織の体力を消耗し、新たな宙域への人員配置など、非常に困難なことであった。

しかし、あげられた報告では、新たに発見された暗黒のガス雲が漂う宙域の近くでは、異常な数の怪獣が発生しているという報告があり、この区域が非常に危険なバランスの中にあることは明白だった。戦闘にならなくとも、調査や監視をするものが必要である。

「大隊長。勇士司令部を使いますか」

「確かに、これだけ危険度の高い任務を単独で当たらせるとなると、最も適任なのは、あの部署しかあるまい」

彼らの話に上っている勇士司令部とは、宇宙警備隊の一つの部署だ。一般隊員と違うのは、その戦闘力である。訓練生時代からの優

秀なもの候補となり、さらに実戦で功績をあげたものが配属され、戦闘力の高さは、一般隊員の三人単位に換算されるほどであると言われている。また、様々な環境や政治体制、文明の発達度に適応する高い教養も要求され、単独で行動する上での判断力も重視される。言ってみれば、単独で危険な任務をこなし、どんな星でも適応して事件を解決する能力を持つエリート部隊だ。

今回のように、安全があまり保障されない未開の宇宙というのも、勇士司令部が適任と言える土地だ。しかし、国防に不安があるこの星の現状では、勇士司令部の構成員も貴重な戦力で、簡単には動員できない事情がある。

「今回の任務では、一番適正があるのはあそこで間違いないだろう。しかし、これだけ国防に隙があると、彼らもまた安全保障上の重要な一員だ。長期任務にあたるものはいらるだろうか。ネオスはオリオン座系の宙域にむかわせているから無理だろう」

「では、現在は休養中、非番のものを当たらせてはどうでしょう。非番の者は防衛網の構想に入っていません」

「それはいいが、この難しく危険度の高い任務を任せられる者がいるのか」

「大隊長。ノルンがいます」

ゾフィーの推薦に、父もヒカリも動揺を隠せなかった。一つの任務に就かせる人員の推薦や任命の場に就いたことは、彼らのキャリアからいえば少なくない経験であるし、むしろ見慣れた光景と言える。しかし、彼らが動揺を隠せないのは理由があった。なぜなら、ゾフィーが推薦したノルンは、彼の娘に他ならないからであった。

「ノルンであれば、この任務には不足はないでしょう」

「ゾフィー、お前の推薦通り、ノルンであれば勇士司令部の中で今は任務に就いておらず、戦闘力や知力から言っても申し分はないであろう。だが、任務の性格上、もっと慎重に考える余地はある。それに、お前はこの危険な任務だからこそ、敢えて自分の娘を送り込んで、私情は任務に一切はさまない姿勢を見せようとしているので

はないか。そうすることで、他の隊員たちに余計な考えをさせないように、無理をしているのではないだろうな」

「大隊長、私を、いえ、我々親子を見くびらないでいただきたい。あくまで、我々は隊長と隊員の関係、これはこの職に二人同時に就いている限り変わりません。それは、ノルンがこの仕事を選んだときに誓ったことです。私は隊長として、最もふさわしい者を選んだ、ただそれだけです。そのことは、大隊長が一番理解しているはずですよ」

「それを言われると痛いな。反論はできん。わかった。では、勇士司令部のノルンに新たな任務を与える。この任務は、私も立ち会って任命をする。ヒカリ、ノルンを探して、光の神殿に来るように伝えよ」

「わかりました」

ヒカリは部屋を出て、ノルンを召集すべく行動を開始した。ゾフィーは壁が透けて見える窓に立ち、光にあふれる街を眺めていた。何を考えているのかは、その顔から察することはできなかったが、隣にウルトラの父がすつと並び立ち、ゾフィーに静かに語りかけた。「すまん、ゾフィー。私としても、ノルンが今使える状態にあることは知っていた。だが、父であるお前を目の前にするとそれを言い出せなかった。お前に苦しい発言をさせて悪かった」

「やめてください。私は、隊長として人員を指名しただけです。本当です。ただ、肉親を戦場に、自分の命令で送り込むつらさは、大隊長と同じです。私もその現場を見ていました。だからこそ、私も同様の状況になったときは、大隊長と同じ行動をしようと思いを決めていましたのです。それが、今訪れたに過ぎません」

「お前とノルン、本当に強い親子だな。私は息子にそこまで厳しくなれなかった。お前を始めたする隊員を、すぐに救援に行かせてしまったからな。私は甘いのだろう」

親子の悩みを共有する彼らは、力なく笑っしかなかった。

ノルン、再び

広大な空間が広がる建造物。どこに天井があるのか分からない程高くそびえたつこの建物の中で二人の巨人が対峙している。一人は深紅の体の巨人で、腹部に自身の出自を現す紋様が浮かんでいる。もう一人は、銀色の体に赤のライン、そして赤いラインに沿って、新しく後から生まれたと思える違うカーブを描く青のラインを備えた頭一つ背の低い巨人、ノルンが向き合っている。

ノルンは、宇宙警備隊の中でも珍しい女性隊員である。それだけでなく、宇宙警備隊でトップクラスの實力を持つ勇士司令部に所属するという変わり種であった。もともと、その変わり種は、宇宙警備隊長であるゾフィーの娘という由緒あるエリート血統でもあるのだが。

訓練を首席で終え、最初の大きな任務がバット星人によるウルトラの星の侵攻事件だった。長い間、直接攻撃を受けてこなかったウルトラの星は、電撃作戦を展開された上に防衛網を突破され、バット星人の部隊がウルトラの星の寸前まで迫っていたのだ。この戦いで多大な功績をあげ、星を守った戦士は、まず一人がエースであった。多彩な光線技と破壊力を誇る彼は、前線を一気に押し上げ星の防衛ラインを立て直した。彼はこの後、正体不明の異次元人・ヤプールの侵略を担当することになる。

そして、前線のその先にいる戦場で功績をあげたのがノルンだった。首席卒業という勲章はあったがほとんど実戦経験のない女性隊員と言うことで、敵の執拗なマークにあったのだが、それを苦にするどころか返り討ちに、何体もの怪獣を相手にしても負けることがなかった。この戦いで功績と戦闘力、訓練時代に発揮された知性を買われ、最も過酷で榮譽あるエリート部隊勇士司令部に配属されたのである。そして、多くの宙域で活躍を繰り返し、直近では惑星グリーゼで大規模侵略を食い止める活躍をしたのだった。この任

務でどういう体験したのかは多くを語らないが、人格や能力、肉体に変化を遂げた彼女は、以前より一層注目されていた。

ノルンは、グリーゼの任務の後、休暇を与えられていた。休息や余暇に時間を費やすことももちろん行っただが、次の任務に備えた準備も怠っていない。この日も、格闘術の鍛錬のために、訓練所の施設を借りて、実戦形式の組み手を行っていたのだ。

じつと向かい合う赤い戦士とノルン。体からにじみ出る闘志と緊張感、殺気は、まさに戦場のそれである。ジワリジワリ間合いを詰め合う二人の目は、互いの隙を探り合い、限界まで間合いを詰めた二人は、膠着を保てなくなり、ついに体がぶつかり合う。拳が交差するが、互いに防御技も繰り出し決定打を与えない。蹴りを見舞うが、堅い防御が衝撃を和らげる。力強く素早い攻撃を互いに繰り返して、二人は戦い続けた。やがて、互いの拳が激突し、衝撃が二人の体を引き離す。ノルンはこの力を利用し、体に素早く捻りを加えながら飛翔し、両足にエネルギーを込めて赤い戦士に蹴りを繰り返した。赤い戦士は両腕で防御を固め、ノルンの攻撃を正面から受け止める。ノルンは、相手の足が激突した後も、両足を高速で動かして、機関銃のように蹴りを降り注いだ。次第に防御の腕を押され始め、赤い巨人は危険な状態にあっという間に陥っていく。その時、

「それまでっ」

という鋭い声が間に入り、二人は瞬間的に相手から離れ、緊張を解いた。すでに、そこには程良い張り詰めた空気と和やかな空気が生まれている。

「さすがだ、ノルン。もう簡単には勝てなくなった。むしろ、油断するとこっちが危なくなる」

「いえ、これはあくまで訓練です。実戦と訓練は違いますので、こういう緊張感あふれる訓練が必要なのですが、相手がなかなかいないのです。訓練生を使うわけにはいきませんし、任務中に当たっている隊員を捕まえるのは論外です。貴重なお時間を私の訓練に付き合っていたら、ありがとうございます。マスターアストラ。」

そして、マスターレオ」

マスターの称号付きで呼ばれた二人の赤い巨人は、レオとアストラだった。彼らは故郷をなくし、難民に一時なっていたが、今はキングという後見人とその強さを買われ、宇宙警備隊の任務と同時に、格闘の技術を訓練生に伝えている。だが、彼らの戦闘レベルは非常に高く、本格的に腕を磨くためには、実戦を積んだ上で、着任後も長い期間訓練を受けなければその神髄をつかむことはできないといわれている。その格闘術のいわゆる免許皆伝の域まで達した者の一人がノルンであった。レオはノルンに近寄ると肩に手を置き、一回り小さい彼女を頼もしげに見つめて語りかける。

「なかなかこの域まで宇宙拳法の真髄に近づく者はいない。メビウスは最低限のことしか教えられなかったし、ゼロは免許皆伝だが精神面に幾分不安が残る。まあ、お前の場合は、体格面や体力面でどうしても小柄な分ハンデがあるが、どうも前回の任務で、妙な型を身につけたようだな」

「はい。ある剣士に教えられたのは、無理に攻めるのではなく強固な守りを固めて相手の崩れるのを待つこと。そして、旅の途中で出会った方に、闘気で戦うのではなく、すべての者を慈しみ包み込む愛によって成り立つ心で、悪意や敵愾心を解いていく型を身につけることができました」

「なるほど、確かにアストラの攻撃は、力ではお前を上回ってもすべて受け流され、それによって戦う力が削ぎ落とされていた。どういう体験かを聞いても、教えんだろうな」

「私だけの大切な体験にしたいので」

「まあ、そういうこともあるだろう。それに、前回の任務から帰ってから、肉体もそうだが、お前の性格も変わった。ギスギスしたというか、冷徹な雰囲気が消えて、温かさや柔らかな光を放っている」

「そうでしょうか。私には実感できませんが、滞在任務によって得られるその星の人間の影響や、積み重ねた経験値がそうさせるのかもしれません」

「言葉遣いなどを聞くと、女らしくなったぞ。おっと、それを言うてはいけなかったな。すまん、取り消す」

「いくらマスターでも言っただけでほしくない言葉があります。でも、わかっていただけたのなら、それで構いません」

三人で、実戦練習の結果や雑談などをしていたところに、深紅の戦士が部屋に入ってきた。この部屋では、様々な空間設定ができるので、部屋の入り口は見えないが、戦士がスイッチを入れると、光で覆われた空間に戻った。

「楽しそうなところをすまないが、そろそろこの部屋を空けてほしいな。訓練生の授業が入っているんだ」

「すみません、タロウ教官」

宇宙警備隊訓練生の教官であるタロウは、ノルンより少し上の世代である。そのため、ノルンにとってタロウは、訓練生時代の目標や憧れであり、さらに宇宙警備隊大隊長の父、銀十字軍の母をもつ彼のことをとても他人事とは思えない親近感と、尊敬の思いを抱いていた。

「もう十分訓練はできました。すぐに部屋はお返しします」

「ノルン、お前はどこまで強くなりたいんだ。勇士司令部が強さを最低条件にされるのはわかるが、頭も一流でないとダメなところだ。知識の方も訓練しておくんだぞ」

「はい、教官。では速やかに退室します」

「いや、お前に辞令が下った。すぐに光の神殿に迎え。そこで、大隊長と隊長の二人から、任務が伝えられる。すぐに向かえ」

「隊長も同席……、そうですか。わかりました、ただちに出頭します。マスターレオ、マスターアストラ、ありがとうございます。教官、失礼します」

礼儀正しくノルンは挨拶をすませると、足早に神殿へ向かっていった。確かに血筋に裏打ちされる能力と人間性に、三人は彼女を認める他はない。

「単独任務が多い勇士司令部じゃなければ、あいつもウルトラ兄弟

に認められてもいいんだが。レオ、ノルンに今度は何を教えたんだ」
「実戦型の組み手と、奥義を伝えた。そして、それを飲み込んでしまったよ」

「素質と完成度ならゼロで間違いない。それは確かだ。精神面の安定度と神髓への到達度ならば、ノルンの方が高いはず。あれで、もう少し可愛げがあると、愛嬌が出て完璧なんだが」

「そういうのが、あいつが一番怒る言葉だ。女ということを押しつれたり、蔑んだり、型にはめようとする、誰でもかまわず噛みつきに行く。多分、俺達にでも殴りかかるだろうな」

「母がいない分、女性と言う者の姿に、神経質になっているのかもしれないな」

両親が健在なタロウにとっては、ノルンの抱えるコンプレックスはまるで理解しきれないものであるし、両親ともこの世にいないレオ兄弟にとっても、すべてを共感できるものでもなかった。

ノルンは光の神殿にたどり着くと、最上階に向かい、大隊長達がいる部屋に入って行った。二人とも部屋の奥からノルンを見渡す場所におり、ノルンは二人に形式を守った挨拶をする。

「勇士司令部ノルン。召集に応じ、出頭しました」
「わかった。こっちへ」

ゾフィーとノルンは、一瞬だけ目があつたが、お互いにすぐに目をそらし、上司と部下という態度を保つ。あくまで、職務上の立場を貫く二人の間で、ウルトラの父は自ら話すことで息苦しい空気を打ち破ることにした。

「勇士司令部構成員ノルン。君に新たな任務を課すことになった」
「承知しました。それは、宇宙警備隊の任務ですか、それとも特務任務ですか」

「後者だ。人員を割けないという事情もあるが、それ相応の力を持つものでないと危険が大きいからだ」

「了解いたしました。その任務の内容は」

「その点は、隊長から説明してもらおう。ゾフィー」

父と娘である彼らは、今は上司と部下という関係に徹し、誰の目にもそうとしか思えない態度で向き合っていた。仕事には情は一片たりとも持ち込まない、彼ら親子の不変の鉄則であり、プライドであった。しかし、会話が続くにつれ、その会話形式が変化し始める。「恒点観測員からの報告で、これまで銀河がないと思われていたボイドに、暗黒星雲が突如現れた」

「暗黒星雲が突然できるというのも、妙な話ですね。誰かが意図的に隠していたか、発生させたか」

「推測の域を出ない以上、結論は出せない。だが、この暗黒星雲の中には、どうも銀河が存在するらしい。ガスを突き抜ける観測機を突入させ、1000機使つてようやく一機がそれを観測した」

「それはすごいと言っておきます。でも、それでは勇士司令部の者を引っ張りだすまでもないでしょう。まだ、観測員の仕事じゃありませんか」

「勇士司令部を使うのには理由がある。暗黒星雲がある宙域に怪獣が突如として大量発生したこと。こうなると、中の銀河に怪獣も潜んでいる可能性もあり得るが、どれだけの戦闘力があるか分からない」

「向こうにいる敵がどれほどの数か、戦闘力がわからないとは、勇士司令部らしい派遣先ですね。骨のあるのもいそいですし」

「威勢がいいな。もう一つは、観測不可能で未知の宙域である以上、生半可な戦士では対応できないからだ。放っておくのも一つの手だが、そうするとそこがベリアルのような人物の巣窟になる恐れがある。先手を打つためだ」

「実はこっちが後手かも知れませんが、了解しました」

ノルンの受け答えは、部下が上官に対して言う口調にしてはやや強気すぎるくらいがあるのだが、それでいて、親子だということを感じさせない一種の壁、ルールのようなものも確かに存在する不思議

議な空気が漂っている。らしい受け答えだと、大隊長は心で思いながら、自らノルンに対して、正式な命令を与える。

「勇士司令部ノルンに命令する。ボイド地帯に現れた暗黒星雲、並びにその内部にあると思われる宙域の捜査にあたれ。もし、介入が必要な事態があれば、適時対応せよ。ただし、歴史に介入するような深い関与は除く」

「了解しました」

「では、私は他の案件があるので、先に失礼する」

大隊長はそう言い残すと、部屋を後にした。そこに残ったのはゾフィーとノルンの二人だけである。二人きりになると、鉄の様に硬くつまた勝った二人の間の空気は、幾分和らぎ、温もりを取り戻す。

「ノルン、大丈夫か、今度の任務は」

「大丈夫なんて最初から言いきれぬ任務なんてないでしょ、お父さん。いえ、隊長」

「今でも、お前が勇士司令部、いや、私と同じ職務である宇宙警備隊と言うのがしっくりこない。娘を戦場に放り込むということもな」

「それは言わない約束。特別扱いしたら、隊長としての信頼もなくなる。私は簡単には死なないし、死ぬ気もない。だから、そこいらの男には負けないほど鍛えてきたし、強くなった。勇士司令部の看板を汚すことはない」

「無事に帰ってこい。そして、私に報告書を渡せ。これは個人的な命令だ」

「わかったから。いえ、わかりました」

「危険な任務だから、ヒカリの所に行つて装備を受け取れ。備えをしておくにはし過ぎることはない」

「それでは行ってまいります、隊長。……、お父さん」

ノルンはそう言い残し、部屋を出て行った。ゾフィーは、部屋にたった一人残り、ノルンが最後に残した言葉を噛みしめていた。

「お父さんか。私が隊長と言う地位になれば、セブン達のように親子らしく振る舞えるのだがな。私達は、互いに不器用すぎるな。」

どちらかが死ぬ以外で、早く父親と娘の関係に戻りたいものだ」

ノルンは、ゾフィーに言われたとおり、ヒカリの元を訪れていた。科学技術局と言う知識層であるヒカリは、ノルンのために装備の開発と支給を担当することになっている。まず、ヒカリはノルンに一つの指輪を渡した。

「これは、お前の変身アイテムになるのは今までと変わりない。だが、より低出力でも変身を可能にしている。ダークエネルギーが変身に影響を与えることになったとしても、これなら今までより少ない時間のチャージで変身できる。ただし、ビームなどの武器には使えない」

「武器に使えないというのが気にいらぬ。未知の土地に行くのに、丸腰で潜入するのは、さすがに怖いし」

「もちろん、それに対応する物がある。それが、このライブブレスレットだ」

そういうと、ヒカリは一つのブレスレットを取り出した。金を基調とした美しい外見で、ノルンがそれをはめれば一層映えるだろうと思えるほど、美しい輝きを持っている。

「ブレスレットなら持つてるけど」

「それは武装ブレスレットだ。これは、武器には全く使えないが、潜入先で必要なキットが仕込まれている。たとえば、さっき話した武器だが、ブレスレットにシャインブラスターが内蔵されている。

威力は強いから護身用から強襲用の武器にまで用途は広いが、連射はできないからな」

「武器があれば、機能はともかく心強いわね。他にはどんな能力があるの」

「これは、その星の服装に合わせる機能がある。お前は、どうも溶け込むという行為が苦手らしいからな」

「余計なお世話。溶け込むといえ、お金が必要でしょ。それはな

んとかならないの」

「宇宙警備隊が通貨を偽装するわけにはいかんだろう。それは自分で調達しろ」

「はいはい、わかりました。その鉱石は何なの」

「これは特殊装備だ。セブンの持っているカプセル怪獣やボール怪獣、あるいはレイオニクスのバトルナイザーの機能を応用したものだ。ここに怪獣を収納できるんだが、もう一つ別の機能があって、普通の生物もディフレーター因子で我々に近い能力を持つことができる。ただし、その生物の同意がないと、変異はもちろん、収納すら不可能だが」

「魅力的だけど、そんな都合のいい生き物がいるかしら。だけど、このブレスレットはかなり使えそう。ありがとうございます」

最後だけかしまったノルンは、さっそく右腕に新しいブレスレットを装着する。やはり、美しさと力強さが備わっているノルンが装着すると、輝きが違って見えてしまう。

「ノルン、できればお前のその青いブレスレット、コスモブレスも調べてみたいんだが。お前、そのブレスレットの入手経路を報告書で上の方にあげていないだろ」

「これはだめ。私の宝物だから」

「私の宝物なんてセリフを言うような柄でもないだろう。どうしても気になってな。この宇宙の鉱石や製法にも見られない構造だ、興味がある」

「その内に」

荒っぽい任務が多い部署にいるため、ヒカリのような理系畑の人間に対しては、ノルンは本来持っているぎっくばらなところが丸出しになる。上下関係をあまり気にしなくていいからだ。ノルンは未練がましいヒカリの視線を適当にあしらって、部屋を後にした。装備も受け取ったし、後は旅立っただけだ。任務による旅立ちは何度も経験があるが、やはりいつも不思議な思いが内心にある。いつ帰るかわからない、もう帰ってこられないかもしれない、そう思うと

自分の目に故郷を焼き付けておこうと、いつもより念入りにあたりを見つめてしまうのだ。旅立ちを繰り返す度に記憶してきたことで、完全に頭の中に風景が刻み込まれているはずなのだが、どうしても習慣を繰り返してしまう癖があるのだ。

「次はいつ帰れるんだろう」

ふとそんな言葉をもらしながら、発着地点となるエアポートまで行くと、そこには先客がいて、ノルン同様に出発を控えているようだ。その後ろ姿に見覚えがあったノルンは、少しばかりいたずら心を出して、気配を消して近づき、その人物の後頭部を軽く叩いた。

「痛っ。誰だ、こんなことをするのは……。あ、ノルン先輩」

「隙が多すぎ。もし戦場なら、もう死んでるよ、メビウス」

悪戯の相手はメビウスだった。宇宙警備隊の訓練所の中で、メビウスはノルンの少し下の世代になり、後輩ということになる。メビウスにとっては、ノルンは首席卒業と言うまぶしい存在であり、憧れの念も抱いており、ノルンにしても昔から素質の片鱗を見せていたメビウスは、非常に気になる後輩であった。

「光の国でも隙を見せるなって言うなんて、相変わらず厳しいですね、先輩は」

「勇士司令部は、隙を見せるとあっさり死ぬ様な任務ばかりだから。あなたもこれから長期任務に出るの」

「はい。マゼラン星雲の監視です。ベリアル事件以来、惑星間弾道弾が配置されたりと、きな臭い雰囲気があちこちに漂っていて、あの一带も過剰な防衛反応を見せているので、微妙なバランスになっています。それで、監視をしておくのに越したことはないだろうということと、関係ない星に被害を及ぼさないようにと言う適時介入の命令が下ったんですが、適時と言うのが頭を悩ませます」

「それは、あたしも一緒よ。要は、その星の選択や歴史に関わることには介入するなっていう大前提があるわけだけど、それを逸脱する事態っていうその判断がね。まあ、無関係な人が理由もなく苦しんだり悲しんだりするような事態が生じたら、その時は手を出そう

かなってという判断はしているけど、こればかりは経験を重ねないとね」

「本当に難しい問題です」

「でも、だいぶ前にあなたは地球という星で、他人の星で生きること、その星の人々を理解することを学んだんだから、それを生かせばいい。あたしは、つい最近だから。一つの星に長期間滞在して、色々な経験を積んだのは。それまでの、戦闘行為だけの経験より、ずっと実りがあつたわ」

「たしかに、そのせいなのか、先輩も雰囲気が変わりましたね。言葉づかいも違いますし、冷徹さが和らいで、なんとというか優しさが表面に出ていると言うか。何だか女性らしく……」

「メビウス、今あなた、最後に何か言いかけなかつたかしら」

「……。いえ、気のせいです」

「ならいいけど」

メビウスは危うく、言うてはいけないことを言うところだった。

ノルンは、女性とすることを押しつけられるのを非常に嫌う。蔑視する表現はもちろん、女らしい、女っぽい、そういう褒め言葉ですら嫌う。男の中でもまれ、それを上回る功績を上げるためには、男性に負けない人並み以上の努力やつらい鍛錬があつただろうし、顔も知らない母親に対する憧れともコンプレックスともつかない複雑な感情を抱き続け、その結果、異常なほどに女性らしさという型にはめようとする言葉には過敏に反応する。場合によっては鉄拳も辞さない程で、訓練生時代や宇宙警備隊の中ではもちろんのこと、猛者揃いの勇士司令部でもその拳の犠牲になつた者は多く、能力は高いが揉め事の多い超エリートと言う複雑なキャリアをもつ。彼女が女性でありながら「ウルトラウーマン」ではなく「ウルトラマン」を自称し、周りからも呼称されるのも、彼女の意地と、それが引き起こした武勇伝のせいである。

しかし、メビウスの指摘通り、ノルンの人間性に変化が見られたのは事実である。ノルンが以前のグリーゼの任務から帰って以来、

皆から言われることであつた。冷たさが消え、温かさがにじみ出て、言葉遣いにまで表れていると。ノルン自身にそんな自覚はないのだが、様々な経験を重ねるうちに、知らず知らずのうちに人間性を変えらるほどの学習をした結果なのだろう。

「それ、みんなに言われるんだけど、あたしには自覚がないの」

「すごく印象が変わつて、素敵だと思いますよ」

「長期滞在をすると、あなたのお世辞みたいな言葉も言えるようになるのね。そんな変化は予期も自覚もしていなかったけど」

「お世辞じゃないです。ところで、ノルン先輩の派遣先はどこですか」

「最近発生したらしい、暗黒星雲。ボイドに暗黒星雲がいきなり登場するはずはないんだけどね。それだけ、怪しいってこと」

「危険な任務になりそうですね」

「勇士司令部に安全な任務なんてないわよ。さあ、お互いにもう出発しましょう。メビウス、あなたは今や頼れるエースなんだから、そこを自覚しなさいね」

「わかつています。ウルトラ兄弟にまで列せられる名誉をもらつている以上、それに恥じない活躍をしないといけないですから。でも、先輩の実力なら、ウルトラ兄弟入りは絶対なのになあ」

「いやよ。兄さん兄さんなんて呼び合う汗臭いところに入るなんてそれに、あたしは、実の父親を兄さんと呼ぶ複雑な状況になるのよ。ゼロなら、あの性格だから親父とか、兄貴とか、呼び捨ても平気だろうけどね。あなたにだけ言うけど、あたしにとっては隊長と呼ぶのだって、本当はしっくりこないし」

「そうですよね……」

ノルンが普段は誰にも言わない複雑な親子関係のことを口にできるのも、メビウスを可愛がつている証しである。この後輩は、人の悩みや悲しみを包み込み、その感情を共有する優しさによるものだ。「そういうことだから、ウルトラ兄弟入りは却下ね。さあ、出発しましょう」

二人は同時に飛び立ち、光の国の外に出た。途中まで並びながら飛び、それからそれぞれの任務先に向かって別れることになった。

「それじゃあ、メビウス。お互いにまた無事な姿で、あの故郷で出会うことを約束しましょう」

「はい、先輩。お気をつけて」

メビウスの姿が視界から消えるのを見届けると、ノルンも亜光速にまで加速し、指令を受けたポイントまで急行する。周りの星が光の線となり、様々な色と太さの絵を見ているようだ。指示されているかつてのボイド宙域は光の国からはそれなりの距離がある。亜光速でもまだ時間がかかるため、ワームホールを形成するトゥインクルウエイを発動し一気に距離を詰めていく。やがて、彼女の視界に光の向こうに黒い点が見え始めてきた。発見されたという暗黒星雲だろう。ノルンは制動をかけ通常空間の飛行に戻る。

眼前に広がる暗黒星雲は、本当に突然現れ発見されたとは思えないほど巨大である。小さい暗黒星雲などないのだが、これだけの規模の物が観測されなかったなど考えられないことであった。

「これがボイドに現れた暗黒星雲ね。でも、こんなものが突然出現するなんて驚きだね。宇宙には不思議なことがまだまだたくさんあるってことね」

これから危険な任務に挑む者とは思えない余裕ある口調で、ノルンは目の前に広がる暗黒空間を見つめている。その彼女に周りに、宇宙警備隊の隊員が集まってきた。怪獣が頻出しているというから、その警戒に当たっている隊員だろう。

「警戒中の隊員ね」

「はい、ノルンさん。隊長よりウルトラサインであなたの任務は聞いています。我々が、暗黒星雲への突入の援護をいたします」

「ありがとう。そうしてもらえると助かるわ。でも、このガスの向こうに本当に銀河があるの」

「常識からすればあり得ないことですが、観測結果がそう示しています。並行世界と接触したりと、もうこの宇宙では何が起ころうとも

おかしくありませんから、このガスの向こうに銀河があっても、驚くことではないでしょう」

「あなたとは気が合うわね。私も同じことを考えていたから。とにかく、このガスの厚さは相当のものでしょね。私の命、あなた達に預けるわ」

「責任を持つて任務を全うします。我々全員が、ガスの一か所に光線を照射し突破口を空けます。その中にできた道に飛び込んでください。ですが、我々の光線にも限界があります。おそらく途中で道は終わります」

「それ以降は、私の光線でガスを振り払いながら道を作っていくしかないってことね」

「申し訳ありませんがそういうことです。もっと人員を割ければ、安全に向こう側に送り届けられるのですが、ギリギリの人数しか揃えることができません。それに、向こう側からではウルトラサインは届きません」

「それで十分。それにこれは片道切符。帰りの便は、自力で探さなければいけないわけだから、安全なんて端からないわ。向こうに届けてくれれば十分よ」

「わかりました。では、これより行動に移ります」

警備隊員は円形の陣をとって距離をとり、息を合わせながら、同じタイミングでそれぞれの最も威力の高い光線をガスに向かって放射した。熱線がガス雲を焼き、そこにトンネルができていく。熱線の有効射程距離一杯までこのトンネルを作り、これがノルンを一定距離まで安全に運ぶ通路になる。そして、警備隊員たちの能力の限界まで光線の放射が続き、トンネルが完成する。ノルンが受けられる支援はここまでだ。

「ありがとう。ここから先が私の任務よ。あなた達も気をつけて任務にあたって」

「了解。お気を付けて」

ノルンは警備隊員に見守られながら、彼らが作ってくれたトンネ

ルに飛び込んで行った。光線の照り返しで、暗黒のガス雲の中に光の道ができる。ノルンは、隊員たちのエネルギーが切れる前に距離を稼ぐべく、全速力で飛び立つ。そして、彼らの射程距離限界の地点まで達すると、今度は自身のタキオンストリームを発射し、自力でトンネルを作っていく。トンネルの幅は一気に小さくなり、ノルンの体一つぎりぎり通れる幅だ。

「すごい密度ね。ギリギリで向こう側に着くといけど……」

ノルンの危惧するのは、光の射さない空間でのエネルギー切れである。そこでエネルギーが切れれば、それはすなわち死である。複雑な肉体の機構を持つM78星雲人の死は、救命措置をとらない場合は、完全な消滅を意味する。例え、自力で救命措置を取ったとしても、暗黒のガスの中では救助されるは不可能だ。何が何でも、ここを突破しなければならぬ危機感がある。

エネルギーが減り始め危険域に達し、胸のカラータイマーが点滅を始める。それと同時に、ガスの密度が急速に薄くなっていくのをノルンは感じ取った。いける、そう確信したノルンは一気にスパークをかけ、光線の熱量をあげてガス雲を突き抜ける事に成功する。

ガス雲の向こう側に到達したノルンは、そのまま宇宙空間に身動き一つせず、漂っている。残り少ないエネルギーを浪費しないために、体の活動を刻限まで低下させているのだ。彼女は、じつと宇宙空間の無重力に身をゆだねながら、ある物質を探していた。それは、エーテルである。

エーテル。地球では、アインシュタインの特殊相対性理論によって存在を否定された物質である。宇宙は真空ではなく、エーテルという物質が存在し、光などを伝える物質として仮定されたものであるが、M78星雲の人類がエーテルと呼ぶものは、それとは全く違うものであった。エーテル自体、非常に微量な物質で、しかもかなり不安定な性質を持っていて、すぐに他の物質に干渉されて、姿を変えてしまうため、観測が難しいものだ。

しかし、78星雲人はエーテルを自身の体に取り入れコントロール

ルすることで、他の物質に変化しやすいエーテルを利用して、あらゆる宇宙線を彼らの故郷に降り注ぐプラズマスパークと同質のものに変換する技術を身につけることができた。これにより、あらゆる環境で活動するためのエネルギーの供給源であるタイマー手術と、このエーテルコントロールによって、ウルトラマンはあらゆる星で活動を可能にする。カラータイマーからのエネルギー供給は有限であるが、エーテルコントロールさえ身につければ、エネルギー源はエーテルさえ存在すれば無限である。そのため、極寒と灼熱の空間が点在する真空の宇宙空間では彼らの能力は絶大なものになり、濃厚な大気中でエーテルが存在しない惑星では活動時間が非常に短くなる。エーテルの性質の違う並行宇宙に行けば、エネルギー源の問題はさらに致命的になる。

ノルンは微動だにせず、五感だけを研ぎ澄ましエーテルを探した。やがて、微量のエーテルがノルンの体に引き寄せられ一体化していく。それと同時に、ノルンの体に降り注ぐ宇宙線はプラズマスパークエネルギーとなって体を満たしていき、カラータイマーは青に変わった。それを確認して、ようやくノルンは活動を再開し、体を伸ばす。

「エーテルくらいはあると思っただけど、なかったら赴任早々遭難だったわ。それにしても、どれだけ広い銀河なの。これまで観測されなかったなんてありえない」

ノルンの目の前に広がる銀河はあまりに広大だった。以前赴任したグリーゼも未知の銀河にあり、そこは広さを感じたが、それとは比べ物にならない広さで、複数の銀河が一緒になったかと思えない広さと星の数であった。

「太陽の数も多いということは、生物の存在するところや、知的生命体が文明を築いている星もあるはず。これは、ただの調査で終わらない。どんな奴が潜んでいるかもわからないし、危険のにおいが充満する、勇士司令部にぴったりの場所ね。……、いいわね、燃えてくるわ」

くぐった修羅場の数のせいか、ノルンには過酷な場所に待ち受ける任務に臆するより、むしろこのような状況になると、血が騒ぐ性質になってしまっていた。決して、トラブルを歓迎しているわけではないし、できれば避けたいのが本心だ。だが、無意識の内に冒険できるスリルがあった方が、任務に対する真剣度も変わってくるのである。ノルンは、堅物に思われがちだが、実のところは血の気が多い性格であるようだ。

ノルンは、一先ずは最初に訪れるべき星を探し始める。手がかりも何もない以上、文明や生物がいる星は、しらみつぶしにあたるしかない。そこで、一番近い太陽系にある一つの星に目星をつけた。「あの星の位置や公転速度なら、必ず生命はいるはず。おそらくは、かなり暑い星だろうけど、日の光がいっぱい降り注ぐならそっちの方がいい。さあ、いきましよう」

ノルンは、目を付けた最初の星へ飛行を始める。運命の女神の名を持つ彼女の新たな戦いと旅が始まった。

熱砂の戦士

見渡すばかりの砂の大地。太陽に光が砂にあたり、砂を熱し、光を反射させてぎらぎらさせて目を直撃する。気温は摂氏50度近くになるこの砂漠を移動する、謎の一団であった。日中の砂漠の移動は非常に危険である。極度の暑さが体の水分を奪い、常に脱水症状の危険が伴う。そして、遠のく意識は思考能力を奪い、目印もない場所での移動は、永久に砂漠をさまよわせることになる。

しかし、移動を続ける一団は、それらのセオリーをことごとく無視していた。肌を露出させて熱にさらし、一切の休息もとらずに歩行を続ける。さらにもっとも異様なのは、重い武装をしているのである。重い荷物は砂漠でさらに体力を消耗させる。にも関わらず、彼らは全身を鉄器で武装し、槍や剣、盾などを手にして無言の行軍を続けている。誰ひとりしゃべる者はいない。無言のまま移動を続ける一団は、死の行軍と言うより、死者の行軍と言ってよい。

彼らは、ひたすら歩き続ける。方角を見失うこともなく、ひたすら歩き続ける。すると、彼らの行く道の上に、行く手を妨げるかのように一つの人影が立ちはだかった。人影は、大勢の軍に向かって、たった一人で歩み寄り、その行軍の邪魔をする。

その姿は、短い髪形で色は深紅と言っているほどの赤さが特徴的だった。手や足の露出度の高い衣装を身につけ、その表情は不敵な笑みを浮かべている。

「性懲りもなくまた来たね、あんた達。引き返すんなら今の内よ」その声は女のものだった。勝気な言葉と好戦的な表情は、警告の内容とは裏腹に、戦う意思が浮かび、今にも飛びかかろうとしている。指の骨をボキボキと鳴らし、臨戦態勢は整っている有様だ。

しかし、警告を無視して、兵たちは歩みを止めようとしなかった。これが彼らの返答のようだ。警告を無視したと受け取った女は、その拳を彼らに向かって打ち出した。

「砂漠をも焼きつくす炎で、吹き飛びな」

その拳から紅蓮の炎が上がり、拳の形となって兵の一団に激突した。その言葉通り、彼らは炎に包まれて後方に吹きとばされた。普通であれば、これで殲滅完了である。だが、彼らの異様さは、普通を凌駕する。

異形の兵士は、炎の中で立ちあがり、鎧などが引火した状態で女に殺到していく。手には剣を抜き離し、槍を突き出して、一对多数の戦いとは思えない程の危機迫るものである。

「ちっ、あれで済むわけないよね。毎度のことだけど、しっこい連中よ」

彼女は、両腕両足に炎を纏わせて、素手で戦いを挑む。兵が振りかざした剣を腕で受け止めながらもその炎で剣を焼き、真っ赤になったそれを具に槍とへし折っていく。体につきたてられる槍は、一瞬で燃え落ち、炎の打撃は盾を貫く。まさに一騎当千の強さであるが、やはりすべての兵士を確実に仕留められるわけではない。戦いは一部の兵に任せ、残りの兵は女の背にある砂丘を超えていく。

「思ったより、取り逃しが多い。アープ、行ったよ」

女は砂丘の向こう側にいる、アープという名の誰かに声を張り上げた。丘の向こうにも、赤い髪の女同様、たった一人で兵たちの進行を待ちうける者がいた。こちらは銀髪の少し長めの髪を持ち、白くゆったりとした砂漠の民の衣装を着ている。

「アータル、取り逃しが多いわよ。本当に後先考えずに突っ走るんだから」

どうやら、赤い髪の女は、アータルと言う名らしい。そして、このアープと言う女性は、彼女が食い止めきれなかった兵をここで足止めさせる役割のようだ。砂丘を勢いよく駆け降りてくる兵士たちをじつと認めながら、その距離を測っている。兵達との距離が一定の距離まで詰められて初めて、彼女は動き出す。

指を砂に突き刺し、そこに念を送り込む。すると、砂が細かく動き出し、彼女が指を抜いた瞬間、砂の下の岩盤を砕いて、水が勢い

よく噴き出した。砂漠から生まれた水が噴き出す様を見て、さすがの兵士達も足が鈍った。それだけ、砂漠で水が噴き出すことなど、あり得ないことなのだ。

アープはさらにその水に手をかざすと、敵に向かっていきよく払った。水は空中で凍結していき、兵士たちの足元は氷に包まれた。体験したことのない氷の足場に、彼らはことごとく足を取られていく。さらなる追撃で、彼女は再び水に手をつけ、今度は氷を鋭い槍のように変えて発射していく。飛び道具も作れる彼女は、近接でも遠距離でも能力を発揮できるのだ。

だが、後方の兵士は、前方にいる者を盾にして前進を始めた。砂漠で水は無限ではない。やがて、水の勢いが衰え始める。それならばと、アープはさらに接近戦を挑む。砂漠で最も水分を含むもの、それは人体である。彼女は、兵士の肌が露出しているところを握り、その体を凍結させていく。こうなれば、完全に相手の動きを封じられるが、一度に一人しか相手にできないため、相手をするのができない多数が彼女の横を通り過ぎていく。

「ワルフ、予想以上の進軍です。何とか食い止めてください」
アープのさらに後方で待ち構えるワルフ。短い髪を刈り上げ、筋肉質な肉体を誇る男性の後ろには、大きな門があり、それを超えた所には500人程が暮らす村があった。つまり、彼は村の最終防衛ラインである。

「後は任せろ、アープ。俺の起こす嵐で、この村には絶対に踏み込ませはしねえよ」

ワルフは、アータルとアープの二人の防衛ラインを突破してきた兵士に向かって手を突き出し、気合とともにトップを巻き起こした。風速30メートルはあろうかという暴風は砂嵐をおこし、敵の足を完全に止める。

「これで、終わりじゃねえぞ」

ワルフはその場で回し蹴りを行った。空を斬ったその蹴りの軌道から竜巻が起こり、嵐となって、敵を巻き上げていく。だいた半数は

減ったが、それでもほふく前進をしながら風をやり過ごし、ワルフとその後方にある村に向かってしぶとく前進を進める。

三人の超能力戦士と、退くことを知らない人間離れた兵士の戦い。まさに、超人同士の砂漠の戦いを高いところからじつと見下ろす人影があつた。ノルンである。

ノルンは青くゆつたりした一枚布の薄い生地のを体に巻きつけて羽織り、頭には黒いターバンを巻いて首や口元を隠している。これらの服装は、光から支給された品戦闘用のブレスレット、ライブレスレットで召喚した服装である。

ノルンの擬態は、それほどレベルが高いものではない。異星人と交流がある者や一定以上の特殊能力を持つものが見れば、すぐにノルンの正体は判明してしまう程度のものだ。それはノルンの能力不足や奢りではない。危険な任務が多いため、高い擬態能力で正体を隠す隠密性が、擬態能力を削って戦闘力のある程度維持するか、二者択一の結果だ。正体を隠すほど擬態の精度を高めれば、あまりにも人間に近づきすぎると本来の能力がオミットされる。ノルンはそれを嫌っている。正体はばれてもいいし、それはその後の立ち回り次第と考えているし、危険な任務地ではむしろ本来の能力をできる限り残したいという発想からだ。

だが、ノルンの発想はやはり変わり種で、少々無頓着すぎるきらいがあるため、少しでもその星に溶け込めるようにとの配慮で、ライブレスレットが支給された経緯があつた。

しかし、砂丘にたたずむノルンの姿は小柄で、腰近くまである黒い髪を持つ美しい女性にしか見え、普通の人間であれば見とれることはあつても、正体が異星人であるなど夢に思わないだろう。

そんなノルンの目には、砂漠の戦士たちの戦いが移っている。だが、その顔は無表情だ。なぜなら、その星の歴史に介入する事はできないからだ。あくまで、「その星の人々の裁量では裁ききれない異常事態」に助け船を出すのであつて、悲しいことだがその星の民の戦争には介入はできない。戦争もその星の歴史の一部だからだ。

「悪いけど、私には何もできないから」

どこか無常観が漂う口調でつぶやきながら、ノルンはその場を去ることにする。この星に何か異常事態が起こっていないか、調べることは山ほどあるだろう。踵を返して歩き始めようとした時、彼女の目に捉えられたものがあつた。

戦いが展開される正門とは逆の裏門に向かって、砂漠の一部が隆起しながら近寄っているのだ。ノルンの目でなければ、それを捉えることはできなかつただろう。隆起はゆっくりと裏門に近づき、あと少しのところまで止まつた。ノルンは興味をひかれて様子を見守っていたが、その意味にすぐに気がついた。

「正面ばかりに気を取られるから。戦闘慣れしていないのね」

ノルンのその予想はすぐに当たつた。砂地の中から多数の兵士が現れ、裏門を守っていたわずかな兵士を払いのけ、門を破り始めた。正面から攻めている大群は囷、裏から攻めてきた少数精鋭部隊が本隊なのだ。

「もう、知らないわよ」

ノルンの目は言葉とは裏腹に冷たさはなく、悲しみがあふれ始めている。だが、自分に与えられた使命と力は、一つ間違えれば偽善と暴力につながる。それを無視することは、優しさでも何でもない。ただの独善だ。ノルンは、それを教えられてきたし、何度も目の当たりにしてきた。やはり、自分が出る幕ではないと思おうと努めた。だが、村の中にいるのは非戦闘員である女性や老人、そして子供である。それを見た瞬間、ノルンは苦渋の表情を浮かべながら砂丘を降りて行つた。その足は村に向かつている。

門を破られ、多数の兵がなだれ込む。正門に配置している男性群が来るには時間がかかり過ぎる。中に残っていた非戦闘員である女性や子供、老人はたちまち追いたてられ、一か所に追い込まれて行く。体力の少ない老人や子供は格好の獲物となり、兵達は執拗に追いまわす。母親からはぐれた子供が足を取られて転んでしまう。だが、兵士には人間の心がないのか、躊躇なく剣を振りかざし、子供

の命を奪おうとした。

その瞬間、剣をかざした兵の頭に衝撃と鈍い音が走り、彼は体をぐらつかせて倒れこみ失神した。彼の兜には大きな凹みができ、そばには拳ほどの石が転がっていた。後ろからの攻撃だと気がついた一団は、一斉に後ろを振り向いたが、そこには誰もいない。その瞬間、彼らの頭を誰かが蹴りつけながら飛び越えていく。そして、その人物は子供の前に降り立ち、子供を抱き上げて母親も途へ連れていった。その人物は子供にやさしい表情を見せ、その顔を見上げた子供は安心したかのように泣きやんだ。

「あなたの未来という運命を守るのも、私の役目だよな」

それはノルンだった。彼女は子供をあやすように話しかけると、すっかり安心した子供はノルンに微笑みかけてきた。そして、その子の母親が駆け寄ると子供を手渡し、

「決して、この子の手を離していきませんよ」

と、語りかけた。母親は、言葉にならない声で礼を述べているが、ノルンは彼女を後ろに下げ、皆と一緒にいるように諭した。

そこに、ノルンの隙をついた兵士が剣を振りかざして背中に切りつけてきた。村人たちは、その後起こることを想像し目をそむけたが、予想した通りにはならなかった。

ノルンの左腕に装着された青いブレスレット・コスモブレスが光輝いたかと思うと、連結した二本の槍、ツインランサーモードに変わり、兵士を体ごと弾き飛ばした。ノルンは穏やかな光を放つ武器を取りながら、強い意志のこもった眼で話しかけた。

「コスモス、あなたもこの人たちを助けるのが私の使命だと言うのですね。私もそう信じます」

自分の背丈以上もある槍を手にしたノルンは、兵士たちに向き直った。彼女の眼は、先ほどまでとは打って変わり、それは戦士のものに変わっている。

「さあ、あんた達。非戦闘員に手をかけるなんて、随分と非道な真似をするわね。いいわ、私が全員まとめて相手をしてあげる。歯食

いしばつてかかってきな」

完全にノルンは戦闘モードである。かかってこいと言いなから、自分で兵士達に突っ込んでいく。だが、兵士たちは数を頼みにしてノルンに殺到する。どう考えても不利な状況であるが、ノルンの動きは濁流を受け流すように、華麗に柔らかな動きで兵士の殺気と勢いを殺していく。そして、相手の武器を弾き飛ばし、ツインランサーで叩き折っていく。凶暴と言っている兵士達が、ノルン一人にきりぎり舞いさせられる状況に、村人たちは啞然とした表情で見つめるしかなかった。

だが、ノルンによって武器を破壊されたにも関わらず、兵士達の闘志は衰えることなく、寧ろ、闘志を爆発させて、素手で殴りかかってくる。まるで、何かにとり憑かれているようだ。攻撃を受け流し続けるノルンは、それに妙な感覚を覚え始めた。

「何だか、生身の人間を相手にしている気がしない。通常の人間の身体能力を超えている……」

見た目は明らかに普通の人間だし、ノルンの目もそれを告げている。だが、発揮してくる能力は、変身してはいないとはいえ、十分に常人を超えるレベルのノルンと互角に近い戦いを見せる。攻撃は受け流し続けるが、相手を沈黙させる事ができない。

手に余り始めたノルンの背後を突いて、数名の兵士が飛びかかってきた。身を守るためにやむを得ず、ノルンは槍を振るい薙ぎ払った。その時、驚くべきことが起こった。

人間である相手を傷つけないように、わずかにかする程度の攻撃だったにも関わらず、彼らの鎧が粉碎したのだ。ノルンのコスモブレスは、相手を傷つけることはない。誰かを守り、救うために力を発揮する護り刀であるゆえに、物理的な切れ味はない。心で斬るものだ。

だが、今はわずかにかすただけで、兵士の鎧を打ち砕いた。それが意味するのは、本当に討つべきはこの鎧、それを着る兵士の命を奪ってはならないということである。

「討つべき相手は、鎧と言つことね。何だか妙だけど、やってみる価値はあるわ」

ノルンは目標が定まり、戦法を変えた。槍を自分の体を中心に円を描く軌道で振り始める。その円に囲まれることで、自分の間合いを作り踏み込ませないためでもあるし、わずかな動きで近寄つてきた相手の鎧などの武具を破壊するためである。

動かないノルンにしびれを切らし、兵達がノルンに駆け込んでいく。ノルンはわずかに槍の間合いを前方にずらした。ただ、それだけの動きだった。しかし、槍がかすめた鎧や兜、腕当てや足当てが砕け散り、中に入っている生身の兵士の体が露わになる。鎧をはがされた兵士は、目が虚ろでしばらくふらふらした後、一回転して倒れこみ、口から泡を吹いて失神した。ただ、鎧を脱がされただけでこの有様だ。

「ふうん。討つべきは鎧、とは思っていたけど、まさか操られていただけなんてね。まあいい。ターゲットが絞れるなら、やりやすいしね」

標的を絞り込んだノルンは、華麗な動きで体を自由に操り、槍を手足のようにな動かして、瞬く間に鉄製の武具を破壊し、兵士を完全に丸腰にした。彼は、糸の切れた操り人形のようにぐつたりと力が抜け、脱力して地面にへたり込んでいる。完全に気絶はしていないが、気力はなく、ぼーっとしており、自分の身に何が起こったか、全くわかっていないようだ。瞬く間に乗リンは、兵士を丸裸にして、完璧に沈黙させた。

ノルンは武器をしまい、村人達の方に歩み寄つていった。小柄な彼女が、自分より大きな槍を振り回し、凶暴化した兵士達を、鎧を砕きながら制圧したことを彼らは信じられず、啞然とした目でノルンを見つめている。圧倒的な強さに、村人の心にわずかだが恐怖が芽生えた。何かを要求されるのか、さらなる暴力を振るわれるのか。兵士達の横暴にさらされてきた彼らにとって、それは当たり前前の反応だった。

だが、彼女が近づいてくると、ノルンによって助けられた子供は、再び顔いっぱいになり笑みを浮かべた。恐れなどない、心から信頼しているからこそ見せられる、豊かな表情だった。ノルンは、それに気がつき、自ら膝をついて子供の視線にあわせて話しかけた。

「もう大丈夫。泣かなくていいし、笑っていられるよ。ありがとう、私がすべきことを気がつかせてくれて」

子供に話しかけるノルンの顔にも、笑みが自然と浮かび上がってくる。それは、作られたものではない、慈愛に満ちた心からあふれ出る笑顔にほかならない。子供の笑顔を確認すると、ノルンの表情は今度は引き締まったものとなり、村人の顔を見回している。そして、彼らに、

「この村の長をつとめる人物は、ここにいるの」

と、尋ねた。最初は戸惑い、ざわざわとしたささやき声がわき上がったが、命の恩人の言葉は無視できない。群衆の中から、日に焼けた顔に白い豊かな髭を蓄えた老人が手を挙げながら立ち上がり、自ら名乗り出た。

「私がこの村の長、長老です」

彼の毅然とした名乗り、ノルンも礼儀正しく、敬意をもって受け答えをする。

「初めまして。私はノルン。旅をしている途中、この惨状を見かね、差し出がましい行為ではありますが、介入させていただきました」

「いえ、命を助けて頂き、なんとお礼を申したいのやら……」

恩人に対する感謝の意をどう伝えるべきかわからない村長に、ノルンは気を使わなくていいと言う表情で手を差し出しながら、なんとノルンの方から要望を願い出た。

「礼には及びません。ただ、よろしければ簡単なお願いがあるのですが」

「あなたは恩人です。我々にできることでしたら何でもいたします。食料や水も提供できますが」

「ふふ、そういうのはいらないわよ。まず、この村に大きな蔵や納

屋はあるの」

「は、はあ。食料を保存する建物はございますが」

「そう。なら、その建物を空にして。次にお願ひするのは、綱をできるだけ多く。まずは、これだけ揃えてくれるかしら」

ノルンの意外な注文に、村人全員が啞然とした表情で聞いている。だが、ノルンはその表情が見えないのか、それとも理解していないのか、全くお構いなしにしゃべり続ける。

「それらを準備したら、女性や子供は安全な場所に行くか、軽作業を。男性は少し力仕事をしてもらうわ」

突然の来客であり、命の恩人となったノルンの指示に従い、最初は戸惑っていた村人もときばきと動き始める。ノルンは、図々しいのか、リーダーシップがあるのか微妙なところであるが、完全に場を仕切っており、村の中に浸透してしまった。

そして、なぜか彼女の周りには、自然と子供が集まっている。どいう訳かは知らないが、ノルンは昔の硬派な性格の頃から子供によくつかれていた。彼女の奥底に眠っていた深い愛情と優しさに子供は安心感を抱いたわけだが、それ以上にノルンは子供にだけは心を開き、慈愛の想いを注いできた。

優しくとても強い存在のノルンは、瞬く間に子供達の憧れの存在になってしまった。

「あなた達、どうしたの。私、何か珍しいものでも持っているかしら。……、ちよつとごめん、私、いく所があるから。だからまた後で話しましょ」

ノルンは、残念がる子供達に手を振りながら、村の正門に向かって走り出した。恩人を放っておくわけには行かず、長老もノルンの後を追う。

正門の前には、村の男が、門を突破されないようにびっしりとそこを固めている。だが、これだけの人数がいて、後方がお粗末な警備なのはいただけない。戦い慣れしていないのだから、弱い者を守るには致命的だ。ノルンは、まあ仕方ないかと言う思いで、

ため息をつきながら、殺気立っている集団に足を踏み入れた。

見知らぬ女が突然現れ、ノルンの姿を見たものは、警戒の色を濃くする。だが、彼女はそれにはお構いなしにどンドン門に近づく。

そこに、一人の男がノルンの肩に手を置き、前進を止める。部外者に対しては、当然の行為である。

「おい、お前は誰だ。村の者じゃないな」

「悪いけど、名乗っている場合じゃないわ。門の外は、それほど余裕はなさそうだし」

戦闘モードに入りかけているノルンは、先程までの礼儀正しさや優しさから、ストイックな状態に入っているため、男のいうことに、いちいちかまっていられない状況にある。そこに、兵士は余計な一言を言う過ち、いや、不運に見回れた。

「外がやばいだと。そんなことはわかっている。だから、村の奥に行っている。ここが女なんかがうるつく場所じゃない」

余りに不用意な言葉は、ノルンの過激な一面を噴出させてしまった。ノルンは、細い腕を伸ばし、男の喉元を掴むと、その小さな体からは信じられない力で、片手一本で男の体を持ち上げる。彼女の顔は、目にぎらぎらした光が宿り、無表情な顔が一層恐ろしさを際立たせている。

「あんた、今、なんて言った。女なんか、だと。ふざけるな。戦いになれば、力がある者は、力のない者のために戦うのは当然だ。女だから弱いというのか。その言葉、取り消せ。女の価値を決めつけるなよ」

ノルンの剣幕に、男は声を失い、必死に顔を頷かせる。それを見たノルンは、手をすぐに離し、

「わかってくれれば、それでいいわ。気をつけてよ」

と、何事もなかったように、再び門に向かって近づいていった。もはや、誰も彼女の道を妨げるものはいない。そこへ、一部始終を遠くから見ていた村長が追いつき、ノルンに対して非礼があったことを察し、詫びをいれている。

「ノルンさん、いや、ノルン様。この者に失礼があつたなら、私が代わりにわびます。……。お前、ノルン様に何をしたのだ」

「女のくせに、と言ったら、急に首を絞めてきて……」

「馬鹿者。あの方は、村の裏手にいた我々を襲つた一団を、たった一人で片づけてくださった、命の恩人だ。このバカたれが。ノルン様、まことに申し訳ありません」

長老は、地面に頭をこすりつけて、必死にノルンに詫びを入れている。それを見たノルンは、しょうがないという表情を向け、「もういいですよ。発言を撤回して、謝罪したのだから、怒っていません。あんた、次やったら拳が入るから、気をつけてね。それでは村長、行つて参ります」

と、言い、門に手をかけ、押し始めた。それを見た村長は、顔が青ざめ、思わずノルンの行為を止めにはいる。

「ノルン様、一体何をされるおつもりですか」

「外に出るのですけど、何か」

「お待ちください。外の兵は、先程とは数が違います。我らの戦士もおりますので、あなたの手を煩わせることもございません」

「その戦士が頼りないからですよ。正直、このまま行くと、敵がここにだれだれ込みます。その前に、片を付けます」

「片を、つけると……」

「はい。楽勝ですので、ご心配なく。では」

ノルンの発言と自信に、村長をはじめとする男達は、呆然とした面持ちで、門をこじ開け、外に出て行くノルンを見守るしかなかった。

ノルンは外に出ると、自らの特殊能力で嵐を起こし、敵の進軍を食い止めようとするワルフに近づいていく。彼の力は、なかなか大したものだとノルンは認めているが、いかんせん戦略がなさすぎる。ここまで強い嵐を起こせるのなら、もつと前線で広大な範囲に嵐を遠慮なく起こせば、敵の前進をもっと阻める。なのに、村を背にしていては、力をセーブせざるを得ない。力があるので最後の要を任

せられているのだろうが、思慮の浅さは要に向いていない。

ノルンはすつとワルフの隣に立った。彼はすぐには気がつかなかったが、青い服をなびかせながら、平然と戦場に立つ小さな女に、ぎよつとしている。

「お、おい。お前、誰だ」

「私はノルン。旅人よ」

「あぶねえぞ、引っ込んでいろ」

「そうかしら。危なっかしいのはあなた達の方よ。戦術も何もない、力任せの戦い。その力を無駄にしている。そう断言できる」

突然戦場に現われ、戦術の講釈をたれるノルンに、ワルフは怒るところか、唾然として見つめている。言葉を失っているワルフに対し、ノルンは相変わらずのマイペースを貫き続ける。

「あなたが突破されると村人はあっさり全滅するわよ。あなた達のためじゃなく、後ろで震えている人たちのために手を貸してあげる」

「手を貸すだと。お前、一体何者なんだ」

「だから、ノルンだって。少し、普通じゃないだけ」

ノルンは一歩前に踏み出し、右手の薬指にはめた指輪を胸にかざした。指輪の鉱石から光が放射される。光は、ただ放射されるだけでなく、軌道が完全にコントロールされ、ノルンの前後上下左右に光のサークルが生まれ、そこに光の国の文字が刻印されていき、魔法陣の様なものを形成する。計六つの魔法陣は、ノルンの体に向かって集合し、光に包まれたノルンは、銀色の体に赤と青のラインが美しく流れる光の戦士へと姿を変えた。

目の前で、一人の女性が見た事もない人のような存在に姿を変えた事に、ワルフは驚きを通り越して、呆然とし、風の力を思わず消してしまった。

「本当に、一体何なんだ、あんたは」

「少し変わった旅人。ウルトラマンノルン、その名で通っているわ」

「ウルトラマン、ノルン……」

「さあ、しっかり見ておきなさい。本当の敵を教えてあげる」

やや自信過剰とも思える言葉だが、その口調に驕りは全く感じられない。歴戦の経験から滲み出る確信と頼もしさすら感じさせ、ノルンは低い姿勢で、韋駄天の如き速さで、兵士団に向かっていった。

つごめく悪意

まさに目にも止まらぬ速さだった。華麗に、流れるような挙動でノルンは立ち回り、手刀や嘗底を撃ち込み、切れ味のある蹴りを見舞っていくが、決して傷つけるための攻撃ではない。相手の悪意を流し去り、本当に討つべきもの、謎の鎧だけを粉碎し、中の人間は全く傷つけることはしない。ノルンが身につけた、新たな戦闘スタイルである。

超人レベルまで能力を飛躍的に向上させたノルンに、鎧で身体能力を向上させただけの人間が叶うわけがなく、ノルンが兵士の群の中を風のように駆け抜けた時には、すべての鎧が崩れ去り、兵士達は全身の力が抜け、その場に倒れ込んだ。

「まずは、第一群は終了。次に行くわよ。急がないと……」

圧倒的な力の差を見せつけながら、ノルンは余裕を感じなかった。この星にきてからずっと感じていた違和感があるためだ。それは、いつになく体が重いと感じ、エネルギー源たる太陽の光が照らしつけるのに、ノルンの体に向にエネルギーが貯まらないのだ。大気圏内故に、エーテルが不足、もしくは存在しないにしても、余りに供給が少なく、力を消費する一方の状況に、ノルンは焦りを感じ始めた。

「セーブして三分、全力を出すと、一分も保たない。本当に瞬殺で行かないと」

危機的な状況に、過激な性分が顔を出し、殺意がないのに、瞬殺という物騒な言葉を口走るほど、ノルンは神経質になっている。余裕がない以上、もたもたしているわけには行かない。砂漠を駆け抜け、次の戦場に向かう。しばらく走ると、アープの姿が見えてきた。彼女は、砂漠ではあまり優位に立てない水の属性でありながら、冷静な判断で数少ない水を有効活用している。

水を固体である氷から、気体である水蒸気まで変幻自在に状態を

変え、自分に有利なフィールドを作り上げる。そして、一対一の状況に変え、不利な属性であることを感じさせない。

「やっぱり、彼女が一番冷静ね。村の近くなら、水も自由に使えるのに。でも、なかなかやるわ」

アープの戦いに感心したノルンは、同性ということと、力押しではなく、自分の持つ能力をしつかり把握した戦法に共感し、気に入ったようだ。後ろをとられたアープの背中を守り、レイピアの力で鎧を切り裂き、敵を無力化する。

突然現れたノルンにアープは戸惑いを見せたが、その行動と佇まいに、瞬時にノルンの人間性を把握し、敵ではないことを見抜いた。「ありがとうございます。おかげで命拾いしました。正式な挨拶はできませんが、お名前をお聞かせ願えますか。私はアープと言います」

「ノルンよ。それにしても堅苦しいわね。でも、その礼儀正しさはいいわ。何だか、貴女のことを気に入ったみたい。だから、助太刀するわ」

「ありがとうございます。でも、私の力では相性が悪くて……」

やはり、アープは力押しが無謀な戦い方ではない。属性と相手の力量をわかった上で、うまく立ち回っている。どこか、自分に通じるものがあると感じたノルンは、ますます彼女を気に入った。

「貴方、その吐息を凍らせることができるでしょ。それで、相手の鎧を一気に冷やして。後は、私が一撃で片づける」

「……わかりました」

アープは、会ったばかりのノルンを完全に信頼し、その指示に従う。

砂漠の熱気を吸い込むと、瞬く間に凍てつく冷気に変えて、兵士の鎧に吹き付ける。急速な冷却に、鉄器はもろくなる。そこをノルンはレイピアとわずかな接触で鎧を崩し、残りをアープに任せ、丘を越えていく。彼女なら、自分の戦い方をみて、意味を理解すると信頼しているからだ。さらに、エネルギー残量が残り少なくなり、

さらにもう一人の戦士がもつとも危なっかしいため、余裕がなくなっていることもある。

さらに丘を超えたところでは、アータルが相変わらず、自分の能力を全開にして戦っているが、呆れるほど戦略がない。力に任せて炎を起こし、相手を殴っていく。属性から行けば、一番相性がいいはずなのに……。

残り時間がないノルンは、アータルの背後に立つと、後頭部を殴りつけた。倒れ込んだアータルは、何が起こったのかわからずうろたえたが、自分を殴りつけたノルンを見つけると、完全に「火」がついた。能力通り、すぐ熱くなりやすい性格のようだ。

「あんた、不意打ちなんて卑怯な事をしてくれるわね。……、随分妙な姿だけど、あいつらの仲間なら容赦しないよ」

「黙りなさい。あなた、自分の能力をわかっているの。このまま戦えば、この兵士を焼き殺すことになるわよ」

「こいつらが攻めてきて、犠牲になった人もいる。構わないわよ」
「じゃあ、その仕返しに敵を討つ、つまり命を奪う意味をわかっているの。それがなければ、あなたもその『敵』以下ね。本当の敵は他にいるのに」

「どういう事……」

「やり方は呆れたけど、お膳立てはしてくれたからありがたいわ。すぐにけりをつけるから、その意味を教えてください」

ノルンは、レイピアを連結させてツインランサーに戻すと、回転を加えて兵士の一団に投げつけた。槍は、鎧だけを砕き、人間の体を弾き飛ばしていく。熱で鎧が脆くなっている事もあるが、コスモブレスの力がはっきりと表れている。すべてが終わると、そこには砕けた鎧の破片が散らばっていた。だが、そこにあっただのは鎧の鉄の部分だけではない。

砕けた鎧の破片がもぞもぞと動き始めたのだ。厳密に言うと、鎧と一体になっていた何かである。それらは、鎧の破片からはがれおちると、あちこちから集まり始め、まるで水銀の様に不定形な形で

あたりを転がりまわり出す。どうやら、鎧に代わって新たにとりつく物を探しているようだ。ノルンによってすべて鎧が破壊されたため、目当てのものが見つからず、右往左往している。

見た事もない光景、そして生き物の様なものを目の当たりにし、あつけに取られている。理解の範疇を超えた物の事をノルンに訊こうとしたが、ノルンはその質問を受け付ける前に、M87光弾を撃ち込み、不思議な液体金属を蒸発させた。そして、エネルギーを使い果たしたノルンは、再び人間体に戻ったが、体力の激し過ぎる消耗は、肉体に色濃く残り、膝と手を地面につけ、激しく息を切らせている。

「ちよつと、あんた大丈夫なの。姿も変わったみたいだけど……」

「少し疲れただけよ。姿が変わったことに関しては気にしないで。今は、この姿の方が楽だし、話しやすいでしょ」

「気にするなつて言われても、姿が変われば、普通は気にするよ」
自分の体を気遣うアータルの姿を見てノルンは、彼女は熱くなりやすく、少年ばいやんちゃんな所はあるが、根はやさしいのだと察することができた。そう思うと、少しだけノルンも強硬な態度を解くことができる。

「さつきの姿が本当の姿なんだけど、デリケート過ぎて環境に好き嫌いがあるのよ」

「体が弱い」

「それとは少し違う様な気はするけど、そうとも言えるかも。ま、あなたに判断は任せるわ。それで、あなたが訊きたいのは、私の事じゃなく、あの生き物の事でしょ」

「あれって生き物なの」

「そうよ。金属に近い構造を持つ生き物、金属生命体よ。色々な奴らがいるけど、ちよつとユニークな奴らね」

「何だか、意味がよくわからないけど……」

「後で、面白い物を見せながら説明してあげるわ。それよりも、あの人たちを運ぶのを手伝って」

ノルンは、倒れている兵士の男達を指さしていった。彼らは相変わらず砂漠に横たわり、気を失っている。だが、敵を運べと言うノルンの注文を、アータルはすぐには了承できない。

「なんでよ。あいつらは敵だよ。砂漠に晒しとけばいいでしょ」

「まさか、あなたはそうやって処刑、いえ、私刑にしてきたの」

「それはしてないよ。あんたみたいに倒せなくて、追い払うのが精いっぱいだったから。でも、彼らに殺された人はいらる。その人たちのことを考えたら、助ける気になれない」

「動けない彼らを見て、何とも思わないの。それは、あなたの心から人の心がなくなっている証よ。その力を得た代償にね」

「この力の事を知っているの」

「意味は知らない。でも、どんなものかはわかる。そんな事よりも傷ついて動けない人間を置いていく事が、あなたにはできるの。彼らの傷のほとんどはあなたの攻撃による火傷よ。嫌なら、私一人でやる。人じゃない者に触れさせたくないから」

ノルンの最後の言葉は、強烈なものだった。超人の力を持つアータルに対して、人ではないものと言うことほど、皮肉できつい言葉はないからだ。その言葉に対し、アータルは怒るのではなく、自分の感情や発言が、いつの間にか人から離れて、力に溺れ始めている事に気がつき始めた。自分が傷つけたものを砂漠に放置し、死に至らしめる。それが、村を救う者としてやっていい事なのかどうかを悟る事が出来た。そして、それだけの事を考え受け入れる人間性を彼女は持っていた。

「あんた、言いたいことははっきり言ってくれね。でも、白黒きつちりつけるその性格、嫌いじゃないよ」

「素直じゃない所、私に似ていて、何だか鏡を見ている様よ」

「私は、あんたみたいに綺麗じゃないよ。名前を切っていないかったね。何て言うの」

「ノルンよ。あなたは」

「アータル。わかったよ、そこにいる連中を運ぶよ。あれぐらいな

ら、それほど時間をかけずに村まで運べる」

「じゃあ、始めましょう。村に攻め込んだ兵士は全部、制圧したから」

「信じられない……」

ノルンの底知れない力に、アータルは先程までの噛みつく様な態度はなりを潜め、絶句して自分の隣にいる、黄金の瞳をした小柄な女性の姿を見つめていた。

アータルとアープ、ワルフの手を借り、敗北し、昏倒している兵士を村に運び込んだ上で、最初に村人に頼んでおいたロープで縛りあげると、ノルンは全員を倉庫に放り込んだ。

「とりあえずはこれでいい。しばらく頭を冷やして、落ち着いてもらったら、分別のある人間に尋問する。それじゃあ、あなた達に敵の事を詳しく教えてあげるから、広場に来て。そうそう、金属は外しておいて」

ノルンのテキパキとした指示に三人とも異論どころか、意見その物を言う暇もなく、ただ黙って従うしかない。勝気なアータルですら、反論できずにいる。ノルンに先導され、村の広場に行く、そこで長老が彼女たちを待っていた。ノルンの元に駆け寄り、仰々しく頭を下げて、敬意を表している。

「ノルン様。指示通り、金属を外した上で鎧の破片を集め、その上に薪を積んでおきました」

「ありがとうございます。後、頼んでおいた、薪の下の溝は」

「もちろん、抜かりなく」

「助かったわ。ところで、そんなにペコペコしなくていいわよ。やりづらいし」

「いえいえ。あなたに救われた命は、一つではありません。今の私は、神よりあなたを信じていると言っても、過言ではありません」

神以上の敬意を持たれては、ノルンであっても照れ臭いらしく、

苦笑いを浮かべながら長老に自分の注文に応えてくれた事に新た得て礼を言うと、彼も立ち会いの上で村を襲った本当の兵士の実体の説明を始める事にする。

「それでは、これからあなた達に本当の敵の事について、話すわ。まずアータル、この薪に火をつけて」

ノルンの指示に、アータルは素直に従う。すでにノルンに気持ちで負けているのか、反論する気もないようだ。アータルの能力で、積み上げられた薪に勢いよく火が上がる。火にさらされた鎧の破片が、次第にぐつぐつと泡立ち始めるのを、アープとワルフが驚いた表情を見せ、互いにの顔を見合わせている。

「鉄が泡立って沸騰するなんて、初めて見た」

「俺もだ。ノルンさん、こいつは一体……」

二人の問いかけに、ノルンは二人の視線に立ち、炎で熱せられる鉄を指さしながら、わかりやすく解説して見せた。

「アータルには、さっき話したんだけど、これは生き物よ。金属生命体と言って、鉄の様な体を持ちながら、あちこちに移動出来る色々な形に変わる、そういう代物よ」

「では、この鎧、金属生命体を、あの兵士達の軍団は着用してたと言うことですか」

「それは少し違うわ、アープ。金属生命体も生き物だから、色々な種類がいる。今、目の前にいるのは、自分達だけでは形を作れないから、鉄にくっついてようやく安定できる。わかりやすく言えば、柱がなければ、どんなに材料があっても家は作れないように、彼らも、固い鉄がないと形を作れない。だから、鉄器に喰らいついていたのよ」

「じゃあ、その鎧を着ていた兵士はまさか……」

「やっぱり、あなたが一番冷静で頭が切れるわね。そう、この鎧にくらいついた金属生命体の影響で、攻撃的になって、体も強靱になつていた。それだけの事よ。どこまで戦闘意欲があつたのかは知らないけれど、すべてが彼らの意思とは言えないはず。それを確認す

るために拘束して、倉庫に放り込んであるのよ。さあ、熱に耐えかねて、逃げ出してきたわ」

ノルンの言う通り、炎にあぶられてたまりかねずによりから離れた金属生命体は、ドロドロと薪の下に落ちて行き、そこに掘られた溝を伝って外に流れ出し、その先にある穴に流れ落ちていった。全員分の鎧を火にかけたため、次から次へと液体は炎から逃れ、穴にたまっていく。

「さすがに気持ちわりいなあ。だが、こんなものに操られたら、そりゃ正気じゃいられないな」

「そのとおり。正気なんてない。それが自分の意思でああなるならともかく、この生き物に強要されたとしたら、彼らの本当の意思を聞く必要があると思うけど」

「まったくだな。頭が下がる思いだよ、ノルンさん」

「まずは落ち着いてみる事よ。そうすれば、戦い方も変わってくる。一番馬力のあるあなたが先陣で相手の勢いを止める。その次に、一番戦闘向きの能力があるアータルが迎え撃つ。冷静で、水に能力を依存するアープは、村の守りを固め、いざという時には的確な指示を出す。そうすれば、今日みたいなヤバい状況には、めったにならないわ」

「恐れ入るよ。お、これで最後みたいだな、この薄気味悪い生き物は」

ワルフが穴に目をやると、最後の一滴が穴にこぼれ落ちた。中では、かなりのゆるうの液体が生き物らしく動き回り、波打っている。何匹いると言うより、銀色の水たまりそのものが、グロテスクな生き物に見え、初めて見るアータル達三人は、顔をしかめながら奇妙な生き物を見る事を余儀なくされる。逆に、未知の生き物に出会う事に慣れきっているノルンは、気に留める事もなくいつものもの調子で解説を続ける。

「この生き物は、この星にいる生き物じゃない。偶然か、誰かの意思かはわからないけれど、この周辺に紛れ込み、鉄を多く持つ所に

潜んで、鎧にとりついた。わからないのは、兵士が暴れ回ったのが本当に操られただけなのか、それとも、元からあつた闘争心を掻き立てられたかね。或は、深層心理にある何らかの欲望……。理由はどうであれ、こんな物騒な物を放っておくわけにはいかない。あなた達にも、捕虜たちにも受け入れ難いものよ」

ノルンは立ち上がると、ライブブレスレットに手を添え、シャインブラスターを召還した。ノルンの左手に握られた銃は、銀色の輝きを持ち、ノルンの装着品らしく美しい装飾品のような外観を持っている。ノルンは、自分が望むわけではないのに、外観の美しい装飾品を渡される事が多い。そして、それが似合ってしまったため、余計に他の者より外観に力が入った装飾品を面白がってまわそうとする者もあらわれる。

その例にもれず、レプリカやインテリアにした方がいい様なシャインブラスターを左手に持ち、穴でうごめく銀色の生き物に、エーテル封入された銃から光波ね熱線を発射した。空気の壁が辺りにいた者に当たり、その衝撃を思い知らせることになる。穴の中で白い煙が上がリ、それが晴れた時、あの気味の悪い生き物は跡かたもなく蒸発しているのが見えた。ノルンは銃をブレスレットに収納し、離れた所で様子を見守っていた村長に、すべてが終わった事を告げる。

「村長、すべての処理が済みました。まあ、今の所ですけど。捕虜は、意識がしっかりするのは日が暮れた頃でしょう。それまでは、みなさん問題なく過ごせますよ」

「ありがとうございます。もしよければ、私の家でお休みになって下さい。食事も用意しますので。我々全員のお礼です」

「お気遣いありがとうございます。ですが、貴重な食料をいただくわけにはいきません。気持ちだけで結構です」

「いえいえ、それでは、命の恩人に対する礼儀にそむきます。何とか、我々にできる事を」

「そうですね。……、うーん、でしたら、一つだけお願いできます

か」

「なんなりと」

「おいしい水を……。そうそう、酒と言うものを頂ければ」

村にオレンジ色の夕日が射し、人々の動きも忙しくなってくる。

夜になれば、星と月の明かり以外の光は亡くなり、真っ暗になる。

日暮れ前にできることを終わらせようと、自然と人の動きも慌ただしくなる。ノルンは、何もしないでいるのも気後れし、何か作業を手伝おうとするが、恩人であり客人の彼女にそんな事はさせられないと、断られてしまう。かといって、忙しく働いている人々の間で伝っているのも居心地が悪く感じるだけの神経はあるため、仕方なく農作業の様子を見に行った。

水が確保できるため、主食になる麦が栽培でき、刈り入れのシーズンのため美しい黄金色の穂が風に揺れている。夕日に照らされ、さらに輝きを増す光景は、ノルンの心を打つのに十分の美しさを持つていた。

「本当にきれい。ここが、命の糧を育む場ね……」

食物を摂取する必要のない種族のノルンにとっては、農業や耕作地を見る機会がない。人間にとっては当たり前前の光景も、彼女にとっては一生の思い出になる価値がある。目の前に広がる交易に見とれたノルンは、その場に座り、しばらく眺めてみることにした。

たくさんの人々が、麦の借り入れを行っている。肩に担いでいる稲穂が、揺れる度にきらきらと金に輝く。それを繰り返す人々は、汗を流し疲れも浮かんでいるが、生き生きとした顔をしている。麦畑の向こうには樹木が植えられ、そこではオリーブやブドウの実がなっている。子供や老人がそこを担当し、各々が持ち運べるだけの身をかごに入れて、村へ運び込んでいく。

ノルンの目に映るのは、重労働ではなく、明日の命を繋ぐための糧を生み出す営みである。こんな体験ができると知ってから、ノル

ンは旅をするという事に以前とは違う生き甲斐すら感じるようになっていた。そして、そこで経験した事が自分を成長させ、人と交わることで新しい世界が広がっていく事に、以前よりずっと敏感に感じる事ができる様になっていく自分を見つけることを嬉しいと感じるようになってる。

飽きもせず、ずっと農作業を眺めていたノルンは、後ろをひ血が通りかかった事に気がつかなかった。

「そんなに百姓仕事が楽しいかい、ノルンさん」

「あ、ワルフ。いたんだ」

「あんたほどの戦士が気がつかないなんて、よっぽど熱中しているんだな」

「うん、ちょっとね。感動した」

どこか変わっているノルンの反応に、ワルフは思わず嘖き出したが、決して馬鹿にしているわけではなかった。どちらかと言えば、普段自分達が何気なく生活の一部として行っている行為を、旅の途中に立ち寄った女性が感動しながら眺めているのを思うと、どこか照れ臭い思いが強い。微笑むワルフを後ろで、女の笑い声が聞こえ、ノルンは後ろを振り向き、挨拶をする。

「ごめんなさい、気がつかなくて。その、この場合どんな言葉が、……、あ、お疲れ様です」

「ありがとう、ノルンさん。ワルフ、ノルンさんと話があるなら、先に帰ってるよ」

「おお。すぐに俺も帰るよ」

ワルフは、農具と収穫物を背中に担ぎながら村へ歩いていった。

ワルフは、ノルンの隣にしゃがみこみ、同じように畑を眺め始める。

「いいの、あの人は奥さんじゃないの」

「いいさ、遠慮しなくて。あんたは村の恩人だ。やきもち焼く対象じゃない」

「そういつつもりはないけど……」

「気は使わなくていい。それに、まだあいつはカミさんじゃないし。」

いや、できないからな」

「それは、あなたが戦士だから」

「大体、そんな所か」

三人の中でいちばん延長のワルフは、戦いにおいては思慮が浅い部分があるが、こうして会話する分には、人生経験が長い分、一番落ち着いて話ができる相手だと、ノルンはそんな印象を持った。彼からなら、色々な事を聞きだせるかもしれないと思い、しばらく話を続けて見ることにし、知りたい事を質問していく。

「三人の力は、元々備わっていたものじゃないわね」

「ああ。おとぎ話みたいなもんさ。砂漠の民に危機が訪れる時、三人の戦士の魂が現われる。火、水、風。大地で生きる者に与えられる力を宿し、災いを振り払う、ってな。けどな、いつ、どこの民にその力が来るのかわからない上、どんな奴に魂が宿るのかもわからないんだぜ。村を守る力が必要なのはわかるが、これはいくらなんでも行き過ぎだ。正直、貧乏くじだな」

「そう思うのも無理はないわ。自分が望まない、欲しいものと違う力を持つたら、戸惑いと違和感で板挟みになる。そうして生きていくのは楽じゃない」

ノルンには、ワルフの思いが理解できる。それは、かつての彼女もそうだったからだ。母のような慈愛と癒しの力に憧れていたのに、彼女が受け継いだのは、父の戦士としての力。もちろん、父の事は尊敬していた。だが、憧れていた母は幼い頃に死別したことで、憧れた力はいつの間にかノルンのコンプレックスへと変わっていた。望んだ力と相反する力の違和感を振り払うために戦い続け、やけくそになりかかっていた時に、母と同じ光を持つ存在と出会い、あえて無視していた彼女の中に眠っている力の存在を気がつかせてくれたことで、長いトンネルから抜け出したのが最近の事だったため、ワルフの戸惑いが手に取る様にわかった。

「ノルンさんもそうだったみたいなの口調だな」

「ええ。自分では実感していないけど、その頃は男みたいな口調で、

キれると口より先に手が先に出るって言われてた」

「今だってそうだろ。村の若い奴を締め上げたって聞いたぜ。ま、俺は今もそうだし、昔もそうだった。血の気が多くてな。無理やり、野良仕事を手伝わされているのに嫌気がさして、喧嘩ばかり起こしていた。生きる場所に納得いかなかったのと、発散できない力の持つて行き場がわからなくてな。で、自棄を起こして、仲間と一緒に砂漠を横断しちまった。今、思うとぞっとするようなバカげたことだ」

「よっぽど、この村の生活が嫌だったのね」

「うーん、少し違うな。考えてもみてくれ。200人足らずのオアシス周辺の村で生きていくとなったら、生きる道は限られている。大抵の奴は、それが当たり前と思って不満は持たないが、俺はひねくれていたのか、ガキの頃に聞いたおとぎ話をいい歳して信じていたのか、まだ自分の知らない世界や道があると真に受けていた。だから、それを探して砂漠を渡るなんて命知らずな事をしたんだ」

「あなた達の体なら、この日差しと高温と乾燥には耐えられないでしょうね」

「ま、そういうことさ。運よく砂漠を横断して街やかい都市にも行ったけど、やっぱり、ここの生活が性に合っている事にようやく気がついた。働いて、物を作って、食って、クソして、そして寝る。一番楽だと思うし、面倒だとも思うし、よくわからないが、そういう事だ」

「つまり、故郷が一番ってことね」

ノルンにとってもそれは同じ事だ。気持ちに余裕がなかった頃は、故郷に近づくのも避けていた。任務を終えれば次の任務を受け取って、さっさと赴任地に向かう事を繰り返して、故郷にいないことなど稀になっていく。だが、旅立つ度に無意識に故郷の景色を眺めて記憶に焼きつけ、貴重な体験をした後では、自分が体験した事を同胞に伝えるために、早く帰りたいとまで思うまでに変化していた。やはり、ノルンも故郷の事を愛していたのだろう。ワルフも、ノルン

の言葉に笑いながら相槌を打っている。

「本当に馬鹿だよ。砂漠の横断なんて命知らずな事をして得た答えが、『家が一番いい』なんだからな。まあ、その後は真面目に働いたよ。腕っ節もいいから、みんなに重宝されるが、それまた気分がいい。必要とされているんだなって。そして、さっきいた女ともいい関係になつて、さあ結婚だつていう時に、訳のわからない力を手に入れて、戦いに駆り出されて。昔のつけが回ったかな」

「何かしらの意味があると思う。もっとも、それは私にはわからない、あなただけの意味だけだね」

「意味がなきゃ困るよ。結婚したつて、こんな力を持った男の子どもなんて、怖いからな。向こうの家族にも悪いから、結婚は控えているんだ。しかし、この髪の色はやめて欲しい。褐色だった髪が、日射しみたいに金色になっている。目立って嫌なんだよな」

「私のもう一つの姿は、目立つなんてものないじゃないみたいよ」「そりやそうだろう。今の方がいい女に見えるぜ」

「今の言葉は、一応セーフね。アータルとアープにも、戦士になった理由や、色々な過去があるんでしようね……」

「まあな。俺から、ベラベラ喋る事じゃないから、黙っておくよ。ところで、そろそろ捕まえた男どもに話を聞くんたる」

「ええ。悪いけど、アータルとアープを呼んできてもらえる。家を知らないし」

「わかった。倉庫で待っていてくれ」

ワルフは、そういつて立ち上がり、村へと歩いていった。ノルンは、もうしばらく農作業の風景を眺めた後に、もう少し見ていたいという素振りを見せながら、村へ帰っていく。

歩いている内に日が暮れて、次第に辺りが薄暗くなっていく。ノルンは、約束していた倉庫の前に辿り着き、村人と軽き会釈しながら三人を待っていると、やがてアータル達は揃って倉庫に向かつてやってきた。兵士と顔を合わせるが気に入らないのか、アータルはかなり不機嫌だ。そんな彼女を、穏やかな性格のアープが何とかな

だめているが、ノルンはあまりそこには触れず、尋問を始めるべく倉庫に入ってしまった。

豊かな農産物を入れる場所だけに、数重員の兵士を入れておくには十分な広さだ。そこに縄で体を拘束された兵士がごろごろ転がっている。ノルンは彼らを見回すと、

「指揮官は誰だ」

と、強い口調で叫んだ。女のノルンに、きつい口調で叫ばれた男達は、戸惑いざわついていたが、うつすらとノルン一人にねじ伏せられた事がうつすらと脳裏に残っていたため、すぐに静まり返り、押し黙ってしまった。しばらくの間、静まり返った時が流れたが、やがて一人の兵士が、

「私が指揮官だ」

と、名乗りを上げた。彼は、自ら前に進み出ようとしたが、鎧によって体を無理やり動かされていた反動が残っていて、足元がふらつき倒れ込んでしまった。ノルンは彼の元に駆け寄り、穏やかな口調で、

「無理はしなくていい。ただ、話を聞きたいだけだから」

と、語りかけ、肩を貸してやり、前に移動させた。ノルンの言動に、指揮官を名乗る男はすっかり敬服し、その目には敬意が宿っている。

「あなたは、女性でありながら、とても気高い戦士の目をしている。よろしければ、お名前を聞かせていただきたい」

「私はノルン。戦士には変わりないけど、この村の人間ではない。」

ただの旅人よ。あなたの名前も聞かせてもらえるかしら」

「バーガルと申します。この師団を指揮する者です……。すみません、砂漠で喉をやられていまして」

バーガルは、激しくせき込みながら、その非礼を詫びている。乾燥し、高温の砂漠を移動し、激しい戦闘をしたのだから、生身の体には相当こたえているはずだ。喉も激しく乾いているだろうが、そんなつらさは表に出さないように努めている彼に、ノルンはすっかり感服してしまった。

「あなたのような人物の許についた彼らは、幸せよ。アータル、この人に水を運んできて」

ノルンは、尋問をする前に、喉の渇きに耐える目の前の男に、水は与える必要はあると考えてた。だが、アータルは、激しい気性をここでも見せ、ノルンの注文にも反抗する。

「何で、村を攻めてきた非道な連中に、施しをする必要なわけ。こいつらにやる水なんて、一滴もないわ」

「渇きに苦しむ人から水を取り上げるのが、人の道とも思えないけどね。あなた一人に水の価値を決める資格はないでしょ」

「あんた、敵を倒したからって、少し出しやばり過ぎよ」

ひたすら反抗し続けるアータルに、ノルンは正面から付き合う事はしないが、短気な所に昔の自分を重ね合わせ、苦笑いを浮かべている。だが、恩人であり客人であるノルンに対するアータルの態度にあわてたアープは二人の間に入り、必死に謝罪し、間を取り持とうとする。

「アータル、少し落ち着きなさい。……、すみません、ノルンさん。この子は一番歳下で、分別なく反抗してしまいましたが、悪気があったのことはないんです。水は、私が持つてきます」

「わかつてるわよ、アープ。あなたも大変ね……。それじゃあ、水はお願いなね」

「はい」

アープは、銀色の髪をなびかせながら、小走りで駆けだしていった。その後ろ姿を見送ると、ノルンは、バールガルに対する尋問を始めることにする。

「それじゃあ、バールガル。しばらくの間、私と話をしましょう」

「わかりました。協力いたしますので、部下達の命は保障していただきます」

「殺すつもりなら、ここに放り込んでおくように指示したりしないわ」

「それも、あなたの指示でしたか。恐れ入ります」

「私だって、戦士だからね。それじゃあ、訊くけど、あなた達はど
うしてこの村に攻め入ったの。ろくに武器もない場所に、鉄器で押
しいるなんて、心に余裕のない暴力よ」

「仰るとおりです。ただ、複雑な理由がありますが、目的は単純で
す。水が欲しかったのです」

ノルンはあまりにシンプルな答えに最初は戸惑ったが、あらゆる
星を巡って得た経験と豊かな知識によって、その事情を理解した。
このような高温で砂漠化が進む星で、水は生命体にとって命そのも
のであり、生死に直結する切実なものになる。広い宇宙には水のな
い環境で完全に適応し、場合によっては水そのものを拒絶する者す
らいるが、ほとんどの生物は水なしには生きていけない。バーガル
達の侵攻の理由が水だとすれば、それはそれで筋が通っている。

「水ね……。穏便に話をつける気はなかったの」

「まともであれば、そうしたでしょうが、あの鎧をつけてからの事
はよく覚えて居りませんし、戦いの事以外に頭が働いていませんで
した。ただ、水を奪えと言う声に従って行動していました」

「命令する者がいたと言う事ね」

「はい。我々の將軍です。我が国は、水が枯れ、不毛の土地となり、
渴きと飢えの中にあります。故に、水の確保は命懸けの問題でした」
「だからって、人の村に攻め込んで、無理やり奪っていい事にはな
らないだろ」

ワルフは反論するが、アータルに比べてゆとりがあるのは歳の巧
と言つか、色々な経験を積んでいる分、物を考えたり、人の話を聞
く余裕があるせいだろう。バーガルは、その意見を認め、反論する
ことなく、彼らの事情を打ち明けていく。

「ごもつともな意見です。ですが、我々の国の水の枯渇は深刻です。
元はと言えば、それは自らが招いた結果でもあります。我々の国に
は、鉄を生産する技術があり、それによって力をつけて参りました
が、他国には干渉しない立ち位置でした。しかし、鉄の生産には火
が入ります。火を起すには木が必要です。その結果、大量の木が

伐採され、砂漠が国に入り込む結果となり、水が枯れた不毛の土地になっていきました。結果として、水を求めて他国や周辺の集落と取引をせざるを得ません。このような状況になったのは、私が子供の頃のことです」

「なるほどね。水がなければ人は生きていけない生き物だから、そこは理解できる。それでも、あくまで、周りとは取引だったんですよ」

「はい。先王は決して力に任せて攻め入ってはならぬ。それをすれば怨恨の種をまき、種が芽ぶいて育った時、怨恨は自らに降りかかると言うお考えでした。そこで、特産となる鉄と引き換えに水を得ていたのです。ただ、最初の内はうまくいきますが、水と違い、鉄はすぐに飽和します。そして、製法も伝わってしまい、価値がなくなっていくます。そうなると足元を見られ、物々交換が成り立たなくなりますから、他の国や集落に向かう事になります。この村にも取引に訪れた事もあるとききました」

「へえ、それは意外ね。ワルフ、あなたは聞いたことあるの」

ワルフは、戸惑った表情を見せたが、記憶の糸を辿っていくうちに、何かを思い出したような表情を見せた。

「ああ、じい様やばあ様からガキの頃に聞いた事がある。昔、この国に鉄はなくて、百姓仕事にえらい苦労していたらしい。その時、鉄を売る一団が来て、この村に鉄を分け与えて、その代わりに水が欲しいと言う事で、それからしばらく交流があつたそうだ。ここは低地で緑もあるから、掘れば水は出てくる土地だ。それで、感謝の気持ちを込めて、食料も渡していたそうだ」

「その通りです。この土地の人々は、非常に心が広い方々で、水だけでなく、捕れた農産物まで分けていただき、そのおかげで国も立ち直りかけ得たのですが、事情により、その良き関係も終わってしまいました」

「それも聞いていますよ。確か、新しい井戸を掘っている時に、岩に

ぶつかってしまつて、しばらくこの村も水枯れの状態が続いたんだ。それで、食料も分けてやれなくなり、最後には、水の取引をやめてしまふ事になつたてな。だが、その後には、伝えられた鉄を使って、根気強く岩盤を削つて新しい水脈を見つけたんだとよ。じい様達は、伝えられた鉄で命を助けられながら、恩人に対して申し訳ない事をしたつて、悲しそうな目で話していた……」

「それで、ただの旅人の私に対して、昔の負い目もあるから、恩人を厚遇してくれるわけね。過去の事情はわかつたわ、バーガル。でも、そんな節度ある国だつたあなた達の国が、暴力に訴えて、あんな鎧を着て周りの集落を襲い始めたのはなぜなの」

ノルンの問いに、バーガルは視線を落とす。その目は、深い悲しみを帯び、彼の心の中に抱えきれない重しがある様に、ノルンは感じた。だが、バーガルは深く息を吸い込むと顔を上げ、ノルンの目をますぐに見て口を開いた。

「我らを呪縛から解き放ち、このように礼を持って接していただくあなたならわかつていただけると確信し、お話します」

「わかつたわ。話を聞きましょう」

「方針が変わつたのは、先王が亡くなつた時です。飢饉に加えて、流行り病が国を襲い、大勢の者が亡くなりました。体中にできものが噴き出て、高熱で死んでいくのです。ひどい有様でした。私の親もそれでなくしております。病により王が倒れた後、残されたのは王妃と幼い王子。王子に王位は継承されましたが、国を治めるには無理があり、側近が支えていく体制が取られました」

「色々な歴史を学んだけど、その状態が一番危うい。誰に権力があるのか、わからなくなる」

「その通りです。側近の間で意見がまとまらず、收拾がつかなくなつた時、台頭してきたのが、我ら軍人をまとめる將軍、エーシユマです。決断できない他の側近を押さえ、決断力を基に幼き王と王太后の信任を得た將軍の基に、一応は国はまとまりましたが、それと云つて飢餓と水不足が解決するわけではありません。結果として、

とうとう武力行使に……」

「でも、王の名のもとに信任されたわけでしょ。先王の意思とかけ離れたその政策に、王と王太后は反対しなかったの」

「お二人は、幽閉されました。後から知ったことです……」

予想以上のバーガルの国の惨状に、憎しみに凝り固まっていたアータルですら声を失い、静かに目を傾けるしかない。ノルンも学んではいるものの、その歴史の一瞬に立ち会ったことはないため、何とも言えない気持ちになっている。だが、まだ聞かねばならない事があるため、バーガルの告白に耳を傾け続ける。

「反逆行為に気がつかなかった我々に、例の鎧が支給されました。

最初は違和感を感じなかったのです。不思議と体が軽く、少し気分が高揚する程度でした。しかし、砂漠の行軍に平然と耐え、いざ戦闘になると、経験したことのない興奮に我を忘れていました。それから、ふと我に帰ると、そこにあるのは破壊された建物と、逃げ遅れ、我々の手で殺された人々の死体……。気が狂いそうでした。そして、自分達を狂わせたのが鎧だと知り、急いで脱ぎ捨てようとなりましたが、自分では脱げないのです。將軍の声がないと脱げないのです。その日から、我々は物言えぬ人形になり果てたのです」

「逆らう事も、逃げ出す事も出来なかったの」

「はい。互いに見張り合い、一区画ごとに一人でも脱走したら、その区画全員が皆殺しとなるのです。最近では、女子供は隔離され、人質に取られる有様」

「なるほどね。それにしても、その將軍もやってくれるわね。どんな脳みそからそんな悪意が湧きでてくるのか」

「昔は、あのような方ではなかった……。先王の信頼に応えるだけの器のある方でした。王の優しさと、將軍エーシュマの力と勇氣、それで成り立っている国でした。皆の尊敬を集め、そのたくましい腕で民を守ってくれる、そんなお方がなぜあのような事に……。ですが、このような事になっても、民は將軍を心のどこかで信じているのです。何か訳があるのだと信じ、見放せないのです」

「そう……。かつての姿がどんなものか、あなたの目と、その誇りある態度を見ればわかる。ところで、そのエーシュマも鎧を着ているの」

「はい。目にする時はいつも着用しています。……、まさか」

「この目で見ないと、断言できないわ」

ノルンは一旦話を切り上げ、アータルとワルフを呼び寄せ、バーガルに訊かれないように小さな声で話し合う。

「大体の事情はわかったわね」

「ああ。どうやら、親玉はその將軍らしいが、そいつも鉄の化け物に操られているみたいだな」

「アータル、わかったわね。あなたが本当に戦うべき者が誰なのか」

「わかったわよ、わかつているけど……。この村の人を少なからず殺したあいつらを許せない」

「おめえも頑固な奴だな。仕方ねえけど、俺たちだって、一歩間違えば、あいつらになっていたんだ。鉄の化け物か、伝説の戦士かの違いしかない」

まだ、わだかまりを沸騰させているアータルに、ノルンもワルフも呆れている所に、アープが水を瓶に入れて運んできた。ノルンが予想していたより多いのだが、そこがアープらしいと言える。

「ノルンさん、水を運んできました。これぐらいいいですか」

「十分よ。多すぎるくらいだけど。さあ、バーガル。喉が渴いている所、長話をさせて悪かったわね。水でも飲んで」

「いえ、私はいりません」

バーガルはきっぱりと断った。疑っているわけでもなく、意地を張っているわけでもないが、口を真一文字結んで、言葉通り、飲む気はないらしい。戸惑ったアープが、

「大丈夫ですよ、毒なんていれていませんから」

と、付け加えるが、それでもバーガルは首を横に振って、拒み続ける。ノルンも妙に思っ、バーガルに真意と問いかけてみた。

「何もそこまで意地持を張らなくてもいいんじゃないの。毒入りだ

と思わせるなんて、失礼だと思うけど」

「いや、決してそういうわけではありません。出来れば、その水は先に部下に吞ませてやって欲しいのです。いえ、そうでなければなりません」

「へえ、随分気がいいのね」

「彼らは一般兵。自分の意思より上官からの命令を優先します。私の指揮でここに攻め入り、捕虜となったのですから、彼らの責任はすべて私にあります。それにも関わらず、部下の苦しみをよそに私が先に水を口にする権利はありません。どうか、その水は彼らに先に与えてやって下さい」

「……、気にいった」

ノルンはにやりと笑うと、バーガルを縛っている縄に手をかけ、僅かに力を加えるだけで引きちぎってしまった。戸惑うバーガルに、ノルンは微笑みながら話しかける。

「自分の命より、部下の身を案じ、全責任を負う。敵地で捕らわれて、超人に囲まれながら、決して臆せず、己の意思を曲げない。その心意気、気に入ったわ。あなたを信じる」

ノルンは、水瓶をバーガルの部下に与えるべく手に取った。彼の意思を尊重するためだ。だが、ノルンが手にした瓶にアータルが飛び付き、床にたたき落とした。割れた亀から水が飛び散り、乾いた床にあつという間に吸い込まれていく。アタルの目は、悲しみとも怒りともつかない感情で覆われ、目から涙がこぼれている。

「私はあなた達を許さない。私の両親は、あなた達に殺されたのよ。仕方なかったですむわけないでしょ」

「済むわけがないのは、彼らもわかっていているわよ」

「ノルン、あんたは黙っていなさいよ。ただの旅人の分際で、この村の事にしゃしゃり出ないで」

「そうね、あなたの言う通り。……、わかった。じゃあ、好きなだけ暴れなさい。彼らを殺したいなら、殺しなさい。気の済むまでね。あなたにはその力がある」

ノルンはあっさり身を引いた。アータルは躊躇せず、その手に炎を起こし、バーガル達に向けて発射しようとする。その目には、本気で殺意がこもっている様にしか見えない。炎が手から放たれようとした瞬間、アープは、床に吸い込まれた水を引き戻し、アータルの手の炎を消した。そして、ワープはアータルに掴みかかり、彼女の顔を本気で殴り飛ばした。そして、彼女に馬乗りになって、もう一度殴り、怒鳴り声を上げる。

「てめえ、ガキだと思って放っておいたが、これ以上黙って見ている訳にはいかねえ。あいつらの話を聞いて、まだわからないのか。あいつらだって、好き好んでやった事じゃないんだ」

「そんな理由で、父さんも母さんも殺された事を許せって言つの。そんなの絶対できない」

「あいつらだって、家族を人質に取られているんだ。逆らえば殺されるんだぞ。少しは理解してやれ」

「絶対に嫌。じゃあ、私の両親は死んで当然だって言つの」
「そういう事を言っているんじゃない。今、この場でこいつらをお前が殺してみる。お前の気はいくらかは晴れるだろうさ。だが、こいつらの女房や子供はどう思う。お前の事を魔女、火の悪魔、そう言うんだぞ。つまりこついうことだ。お前があいつらになるんだ。

あいつらの家族がお前になって、魔女を殺すために追い続けることになる。もう、ガキと言えない歳になるんだ。それぐらいはわかれとは言わないが、少しはその頭で自分で考える」

「私が、魔女……」

ワルフがアータルの体の上からどくと、彼女は茫然とした表情で立ち上がり、外へ駆けだしていった。ワルフは、ばつが悪そうに頭を掻きながら、

「あんだ達に、みつともねえところ見せてしまったなあ。水は、俺がまた持つてくるよ、全員分な。……、バーガルさん。俺も完全に許せねえが、あんだのことは理解できそうだ」

と、照れ臭そうに言うと、足早に井戸へ走っていった。その姿を笑

いながら見ているノルンのそばにアープが歩み寄り、彼女も少し笑っていた。

「ワルフって、いい人なのに、照れ臭くて外に出さないでいるんですけど、今は珍しく私がいる前であんな事を言うなんて」

「いい奴だっけ言うのは、わかりやす過ぎるくらいよ。さっきはアータルを止めてくれてありがとう。私が入ってもよかつたんだけどね、その後が大喧嘩になるのがわかってるから……」

「ノルンさんも止めてくれるのはわかっています。アータルに大事な事を気がついて欲しかったんですね。彼女の気持ちもわかるけど、バーガルさんやその国の人の事情もわかると、何も言えなくて。この村も、あの人たちが望まない戦いに駆り出されている原因の一つだっけ聞いてしまっけ」

「世の中、善悪二つに分かれるわけじゃないからね。白黒はつきりつけばいいんだけど、そうじゃないから生きやすいのかもしれない」

「私にはまだ、そういう事はわかりません。でも、世の中がそんな風にできているって言うのが、見えた気がしました。私も、水を汲んできます。ワルフ一人じゃ運びきれないから」

「お願いね」

アープも足早に倉庫から出ていくと、倉庫の中には静寂が漂った。ノルンがふうつとため息をつくとき、バーガルが重苦しい声で話しかけてきた。

「ノルン殿。私は、あの少女に殺される事を覚悟しました」

「武人のあなたなら、いつもその覚悟はできているでしょ」

「そうではありませんが……。先王の言葉が思い返されます。怨恨の種をまけば、それが芽吹き、いずれ自分達を襲う。これは、我々が撒いた怨恨の結果なのでしょう」

「そうでしょうね。そして、この村の人も、無意識に怨恨の種をまいていた……。誰かがその事に気がつき、芽を摘み取っていかなければ、悲劇は終わらない」

鋼鉄の騎馬

砂漠は灼熱のエリアと言うイメージがあるが、それは一部に過ぎない。地表を覆う草がないため、熱を遮り、またとらえておくもの存在しないため、昼夜の温度差が激しいのだ。太陽に照らされ、砂はどんどん熱せられていく昼間は、強烈な照り返しと相まって、50度近くまで温度が上昇する。しかし、夜間は、地熱を貯め込む事が出来ない砂から放射冷却が起こり、一気に気温が低下し、10度以下にまで温度が低下する。そこで生きる人間は、高温と低音の温度差に対応する生活が要求される。

その点で、ライブブレスレットから召喚されたノルンの衣装は、その土地の気候や文化に合わせてその都度衣服を作るため、現在着ている物も理想的と言えるものとなっていた。

青い色は、ノルンのイメージに反応したためだが、それが強い太陽の日差しを和らげ、適度にゆったりとしたつくりのため、空気の層が体温調整の役割を果たす。頭から首にかけてに巻く長い布のタワーバンも、頭や首と言った部分を隠し、熱射病を防いでくれる。肉体は常人を超えているとはいえ、人間の体の構造に変異させている以上、同じような健康管理をした方がいいのは、当然である。

それでも、少し頑丈な分だけ、他の人間とはノルンは違う。礼をしないとと言う村長に対し、酒を要求し、酵母の臭いがきつくやや粉っぽい原始的なビールを次から次へとカップに空けては口に運び、一つも酔っぱらう素振りを見せず、実にうまそうな表情を浮かべている。そんなノルンの周りには、自然と子供が集まってくる。強く優しく、ざつくばらんに酒を飲みながら子供の話に耳を貸し、自分からも色々な話を聞かせてやる彼女の姿は、とても圧倒的な強さを持つ戦士にも、その素顔が人間とはかけ離れた宇宙人にも見えなない。そこにいるのは、誰の目から見ても、一人の優しい小柄な女性だ。

ノルンは、子供に囲まれ、一番年下の子供を自分の膝の上に載せながら、自分の星の記録を、子供達用にうまい具合に変え、おとぎ話にして話している。

「赤い戦士と青い剣士の前に立ちはだかった暗黒の王に、二人は為す術もありません。二人は、体を消されてしまい、星は黒い雲に覆われ、空から太陽は消え去りました」

「二人とも死んじゃったの。みんなどうなっちゃうの。お姉ちゃん、次を聞かせてよ」

「わかったから、少し一杯だけ飲ませてよ。……、それにしても、随分と個性的な味の酒ね。じゃあ、続きね。でも、その星は滅びませんでした。その星で戦士と共に戦った勇者達がいました。彼らは、遠い星からやってきた赤い戦士を友達として大切にし、その気持ちはどんな時があってもそれは変わりません。その思いを、遠い星にいる赤い戦士の仲間が応援します。そして勇者たちの思いが一つになり、彼らと赤い戦士と青い剣士は一つになり、炎の中からよみかえる不死鳥になり、暗黒の王を討ち倒し、世界に太陽と青い空を取り戻しました。勇者たちが自分を助けてくれるまで強くなってくれた事に感動し、安心して自分の故郷に帰る事が出来ました。そして、今も遠い星から、青く美しい星をずっと見守り続けています。はい、めでたしめでたし」

子供たちの目は、今まで聞いた事のない話に目をキラキラと輝かせ、顔には驚きの表情が浮かび、興奮して部屋一杯に子供達の声が溢れかえる。ノルんに貸し与えられた寝室は、もはや寝室とは呼べない状況だ。

「はいはい、お話はこれまでよ。子供は早く寝なさい。寝ないと、赤い戦士の様に強くなれないわよ」

もつとノルンの話を聞きたい子供達は残念がるが、だいぶ夜も更けてきている上、子供たちの親の都合もあるので、ノルンは何とか子供をなだめすかして、ようやく家に帰らせる事が出来た。そして、一人になると、瓶に入っているビールをカップに入れるが、もう半

カップしか残っていないのがわかり、ちえつ、と舌打ちしたノルンは、布を敷いただけの簡易の寝床に横になった。自分が希望した礼の品に舌打ちするのも随分な態度だが、今いち礼儀などを覚えきっていない上、すっかり酒が好物になってしまったため、決して悪気があるわけではない。簡単に言えば失礼、弁護的に言えば無知なだけだ。

ほとんど寝る必要もないノルンは手持無沙汰になり、カップに残ったビールを指ですくってなめるなど、がさつな真似をしている。する事もなく、床で寝転がっているノルンだったが、少しずつ近寄ってくるかすかな足音に反応し、いつもの表情に戻り、警戒しながらプレスレットに手を添える。敵ではないのだろうが、戦場で生き延びてきた彼女にとっては当たり前前の反応だ。床に寝ながら足後の主が地づいてくると、それが誰のものかノルンにはすぐわかった。「夜更けにどうしたの、アープ」

訪問者はアープだった。足音や息遣いからも、彼女があわてている様子が、ノルンには手に取る様にわかった。息を切らせながらノルンの目の前に座ったアープは、息を整え、自身の話したい事を冷静に話せう様に努めて、口にし始める。

「ノルンさん、休んでいる所にすみません」

「いいわよ。退屈していた所だし、あなたもいっぱおやる、と言いたいところだけど、お酒もきれているし、それどころじゃあなさそうね」

「そうなんです。実は、アータルが村を飛び出して、バールさん達の国に向かったみたいで」

「あの馬鹿、何かやらかす様な気がしていたけど、ここまでやるなんて……」　ノルンの反応は、怒るといよりは、呆れてもの言えないといった様子だ。アータルの気性や過去のいきさつを知っているため、見境のない行動を起こすのは予期していたが、敵の本陣に奇襲をかけるのは想定外だった。深いため息をつくノルンに、意外に落ち着いているという印象を持ったアープは、拍子抜けし、

慌てていた彼女自身の動揺もどこかに消えてしまっている。

「ノルンさん、冷静なんですわね」

「まあ、あいつの性格を考えれば、多少の予測はつくけど、私の予想を超えてるわ。ワルフは知っているの」

「はい。アータルの足跡を見つけて、血相を変えて追いかけていきました。捕まえられるかどうか」

「次にあなたの言いたい事を当ててみようか。私も後を追うので、村の守りをお願いできますか、でしょ」

「やっぱり、わかりますか……」

「あなたは、三人の中で一番素直だから」

ノルンの言う素直と言うのは、アープの真面目さからくるもので、書く仕事や詭弁を使う事ができず、考えている事が顔にすぐに出してしまう彼女の性分を端的に表した言葉だ。居ても立っても居られずにそわそわしているのに、村が心配で目がきよきよして、口調と裏腹に落ち着きがないため、ノルンにはアープの心情を容易に察する事ができる。

「ワルフがアータルに追いつくまで、時間がかかるでしょうし、下手をしたら、向こうの国に着く頃かもしれません。そうになったら、戦いになるのは火を見るより明らかです」

「炎使いのアータルだけにね。冗談はさておき、あなたの予想通りになるわよ。あなた達は三人で一人、三位一体の戦士。バラバラでは力を満足に生かせない。いいわよ、村の事は私が引き受けたから、二人を追いなさい」

「ありがとうございます」

心配事が一つ減ったことで、アープの表情は幾分明るくなった。仲間の事も、村の事も本気で心配し、それをたった一人で胸の奥にしまいこんで、ノルン以外には誰にも相談できなかったのだから。ノルンは、他の二人とは違う彼女の性分に好感を持っているため、意識するしないに関わらず、親身な姿勢で接している。

「あなたは、他の二人と違って、落ち着いていて自然体ね。そこが

好きなんだけどね」

「そんな……。私は、いつも鈍くて、二人においていかれてばかりで。どうして、私が伝説の戦士になったのか、理解できていないんです」

「あなただからこそよ」

「どういうことですか……」

「アータルは、戦士向きの性格と能力を持っているけれど、激情と憎しみで暴走しやすい。ワルフは、歳も経験を重ねているけれど、達観するが故に悩む事を卒業している。あなたは自然体で周りを見て、考え、悩む。悩む故に思考は深くなり、二人が通りすぎるものを見失わない。あなたがいるから、三人は三位一体に成り得る。そういう私の『屁理屈』だけどね」

アープ自身も、自分の存在意義について悩んでいたのだろう。圧倒的な強さも、人生経験もなく、能力も砂漠では圧倒的に不利な水の属性。何のために戦士になり、何のためにそこに言えるのか、大きな迷いを抱えていた彼女にとって、ノルンの言葉は、ずっと抱えていた心の重しを、僅かでも軽減させらには十分だった。少しだけ、顔から影が消えたアープは、自分が今、何をすべきかがわかった様で、迷いのない表情をノルンに見せた。

「ノルンさん、話体、二人を追いかけます。今からなら、それほど遅れを取らずに追いつけるはずですよ」

「そう言うと思った。行くなら、水は豊富に持って行きなさい。あなたの武器は、ここでは補充がほとんどできない。急いだ方がいいわ。超人のあなたの脚力があっても、条件はあの二人も一緒。走っている間は差が縮まらないから」

「はい。村の事はよろしくお願いします」

「それと、ノルンさん、アータルのことですよ……。本当はあんな子じゃないんです。明るくて、活発で、優しく。苛められている事見ると、いつもその子の味方をして、苛めた相手が年上の男の子でも殴りかかる、そんな少し荒っぽいけど、優しい子だったんで

す」

「わかつてる。バーガル達を撃とうとした時だって、私は手を出さうとしなかったでしょ。あれは、アータルの目に躊躇があったから躊躇がなければ、私がアータルを撃ったわ。でも、仇を撃てない戸惑いが彼女の本当の姿だと思ったから、よそ者の私は手を出さずに友達であるあなた達に任せたの」

「何でもお見通しなんですね。私なんて、全然敵わない」

「寿命が長いからね。でも、こんな風になったのも最近のこと。みんな学ばなきゃいけないし、誰でも学べるはず。でも、アータルは自分の優しさと憎しみの間で苦しんでいる。足を踏み外さないように、支えてあげて」

「はい。後の事はよろしくお願いします」

「わかったわ。気をつけてね。無理な戦闘は避けるのよ」

ノルンの注意をしっかりと心で刻むと、アープは足早に家を出ていった。すぐに準備を整え、二人の後を追うのだろう。ノルンは、ほとんど癖になってしまっている左手のブレスレットをさすりながら、一人で思案を巡らし、思いを定めて立ち上がり、村の入口へ向かうこそにした。昼間の失敗もあるため、裏手でも火を焚いて、視界を確保している。これなら、暗闇にまぎれて不意打ちを仕掛けられる事もない。不安を一つ潰し、ノルンは正門に向かった。見張りを交代しながら絶えず砂漠に注意を払っている。だが、彼らは、アータル達が村を抜けて、相手の本丸を落とすに行つた事を知らないのだろう。だが、不用意にそれを伝えようと、混乱を招く恐れがある。まず、村長にだけはこの事を伝えようと、彼を探していると、昼間首を締めあげた男の姿が目に入った。人に聞くのが手っ取り早いと思つたノルンは彼に声をかけてみる。

「ねえ、村長はいる」

「えっ。あつ、ノ、ノルンさん。ど、どうかしましたか」

余りにびくびくした彼の反応にノルンは首をかしげながらも、彼の怯えにお構いなしに話を続ける。

「だから、村長を探しているの。何、びくびくしているのよ。別に私はもう怒っていないんだけど」

「そ、それはわかっていきます……」

自分が首を締めあげた事を謝るより、怒っていないと言う事を強調するあたりが、彼女らしくもあり、誰もその事を不思議と疑問に思わないので、周りからは笑い声上がるほどだ。

「私はああいう発言が嫌いなだけ。気をつけてくれればいい。それで、村長はどこにいるの」

「門の辺りにいると思います」

「そう、ありがとう」

萎縮している男を尻目に、ノルンは門の辺りを見渡し、やっと村長を見つけてた。向こうでも、ノルンの姿をすぐに見つけ、駆け寄ってきた。

「ノルンさん、こんな夜更けに如何しましたか」

「ちょっと……。あ、そう言えば、村長の名前を聞いていませんでした。いきなり戦いで、その後もぶらぶらしていたもので、すっかり忘れていました」

「ノルンさんにもそのような所があるのですな。私の名は、アディブと言います」

「そう、覚えておきます。それで、アディブ村長、伝えておきたい話が……」

ノルンは、アディブの耳に口を当て、誰にも聞かれないようにした。他言できないと言う雰囲気を感じたアディブもなるべく表情を浮かべないように努め、わずかに眉が動いただけに感情を押しさえこんだのはさすがである。

「なんですと、あの三人が村を出たと」

「はい、敵国にアータルが殴り込みをかけて、残り二人がそれを止め……」

「まったく、あの馬鹿者どもが。いくら、戦士の力を得たと言っても、そう易々とあのパチルア王国を落とせるわけがあるまいに」

「その、パチルア王国とこの村の歴史を、教えていただきますか」
「うーむ。旅人であるノルンさんを巻き込むのは、本来であれば論外なのだが、ここまで巻き込んでしまった以上、隠す事の方が失礼でしょう。年寄りの取り柄と言えば、長年生きて生きたことで、頭に刻み込んできた記憶ぐらいです。すべてお教えします」

ノルンとアディーブは、近くにあつた岩場に腰掛け、なるべく他の人間に利かれないように小さな声で話を始める。

「我々、シワシス村の先祖は元々遊牧民でしたが、騎馬系遊牧民に押され、この砂漠に追い込まれたのです。牧畜に適した土地を失った我々は、不毛の地を彷徨い、その間に過酷な環境に耐えきれず、次々と仲間を失っていきました。強い者が生き残り、弱い者は切り捨てられる。このような過酷な環境では、それは致し方のない摂理です」

「過酷なほど、人は自分の命を守ることで精いっぱいになる。文明のレベルによるけれど、それは逆らえないことですよね」

「はい。その事に恨みつらみは一切ございません。我々の世はそうできているのですから。砂漠を彷徨い、死を覚悟した先祖の前に奇跡が起こったのはその時です。砂漠に伝わる火、水、風の戦士の魂と云うか、精霊の様な物が現われ、このオアシスに導いたのです。水の精霊は渴きを癒し、風は砂嵐を吹き飛ばし、火は暗い砂漠の道を照らし、オアシスまでまっすぐに案内したということです。それ以前にも、戦士の魂や三つの精霊の話は伝わっていました。昔話のひとつだと思いいていたそうです。ですが、それが実在したと言うのは、今三人の若者がその力を得るまで、私の代になると、また伝説の類いになっていました。ノルンさん、あなたも不思議な旅人で、人を超える力を持っています。あなたに訊いてみたいのだが、人を超える力と言うものは何のために存在するのでしょうか」

アディーブの問いは、ノルン自身の存在意義を問うものでもあった。何のために自分は存在するのか。自分の力は何のためにあるのか。自分の一族の存在する意味とは何なのか。ずっとその答えを求

め、彼女は戦い、旅をし、人と出会ってきた。すべてはわかっているが、学んだことはたくさんあるし、伝えられる事はもちろんある。ノルンは少しだけ沈黙を置きながら、ゆっくり口を開いた。

「必要のない物、意味のない物は存在しません。善と悪、光と闇、人にとつて過酷な物も、この世界が必要だと思っから存在する。光がなければ闇が何なのか定義できない。悪がなければ人が目指すべき善がわからない。闇や悪と戦っている私が、そんな思想を持っているのはおかしいのかもしれませんが……」

「いえ、すべての者に意味がる。そう考えるからこそ、敵を保護する余裕と考えを持ち、あの鉄の化け物の存在を察知し、その正体を見極められるでしょう。あなたも、その考えに至るまで、様々な経験や葛藤があったではありませんか」

「……、私には憧れた力がありました。でも、望んだ力や才能は授けられなかった。周囲から浮き上がり、誰にも馴染めない。噛みついて、尖がって、孤立して、好奇の目で見られて……。何のために生まれてきたのか、生きていく意味や目的が何なのか、ずっと問い続けてきました。戦い続けてきました。でも、それでは見つかることはありません。でも、今は少しだけ光が見えます」

「どうやって、闇夜に光を見出したのですか」

「闇夜の光、ですか。素敵な表現ですね。でも、その通りでした。暗い闇の中を戦いに明け暮れていた私に光を示してくれたのは、出会いました。ある星、いえ、国で私はとても貴重な体験をしました。友人を作り、そこで生きる人々の姿を見つめ、自分の心と向き合う大切な時を過ごす機会があったんです。何のために戦い、何のために存在するのか、答えはまだ得ていませんが、その国で過ごした時の中で、私が目指す光を見つけました。それは、運命を守ること」

「運命とは、生きる定めという、あれですか」

「いいえ、少し違います」

ノルンは、にっこりとほほ笑みながら否定した。彼女が暗闇を抜けて見つけた仄かな光を何なのか、それをゆっくりと語り出す。

「運命は点ではありません。糸です。何本にもわかれた、無数の糸です」

「あの織物に使う、糸ですか」

「そうですね、そう考えていただければ。運命は点ではない。運命は自ら進むべき道、手にすべき糸を選ぶ行為を意味すると私は考えます。選んだ糸に、生きてきた過去が加わり、今を生きる証を刻みつけ、その糸は太く強く紡がれ、やがて未来へとつながっていく。

それが私が考える運命です。これは、私の名をつけてくれた母の意思だと、最近気がつきました」

「ノルン様のお母さまの意思ですか。そう言えば、あまり聞かない名前と言うか、言葉ですな。異国の名前ですか」

「異国、でしょうね。遠い国の神話に出てくる女神の名だそうです。運命の糸を紡ぐ女神たちの総称で、その中でもある泉に住む三人の女神は、それぞれが過去と現在と未来を示し、その一人は戦士なのだそうです。母は、私に人々の運命の糸を守る女神の名と、その名に込められた強さを私にくれました。その事を、旅と出会い出来がつく事が出来ました。そして、私が存在し、戦う意味を見つけないとも」

「なるほど、そのような事があったのですか。ノルン様にも生きる意味、存在する意味がある。そして、その力の意味がある様に、あの三人にも同じく意味があると思うのですね」

「はい。恐らく精霊は、人を拒絶し生きることが許さない環境に生きる人々への希望なのでしょう。生きることが拒絶する物を想像しながら、希望を与える。矛盾しているのが世界です。だから、この砂漠に生きる人たちに精霊は等しく訪れ、希望を与える。そして、三人が精霊の力を得た事にも意味がある。この村を守るだけではない、もつと大きな意味が……」

「……、三人は見つけられますかな、その意味を。我々は、その希望の意味を見失ったために、争いを招き、怨嗟の種をこの地に巻いてしまった」

「水と鉄の交換のことですね」

「はい。遊牧の民は、それ相応の共存を基礎にします。食料を作る物、土地を拓く者、織物を織る者、そして鉄を打つ者。その結びつきで成り立ってきました。パチルア王国の水の枯渇は致し方のないことです。鉄こそが彼らに血肉です。そのために水に困ったのなら、我々が分け与えることが不文律です。だが、それが成り立たなくなった時、我々は彼らを拒絶してしまった。皮肉にも、その後には彼らもたらした鉄によってこの村は救われた。結びつきが立たれば、この村のあり方も変貌する。結果として今の戦いがあるのです」

「未来を選ぶのは、必ずしも幸福だけではありません。哀しいことですが、不幸と幸福が存在する矛盾もまた、世界のあり様です。先王はそれでも分別のある人間だったようですが」

「ラーシド王ですな。彼の善政は伝え聞いております。彼の治める国は騎馬民族でして、圧倒的な軍事力を持っていきますが、遊牧民の気質を色濃く持っており、周辺との共存を決して崩さない王でした。ある意味、鉄を我々にもたらしてくれたのも彼の方針でしょうし、水がでなくなった我々の村に不可侵を暗に約束したのもラーシド王の気質でしょう。しかし、病で亡くなっていたとは。それが悔やまれます」

アーディブ村長の言葉に嘘はなかった。彼は顔に深い後悔の念を浮かべながら頭を抱えている。それは、彼の先代の指導者が犯した間違いを悔み、今は敵対関係にある国の先王の死に深い禍根の思いを持つなど、演じてできることではない。その姿からでも、ラーシド王と言う人物の人間性や治世がどのようなものであったか、ノルンにも十分推察できた。だが、どんなに悔やんでもその人物はいないのだ。今を生きる者は、過去に学び、今できることをするしかない。

「ともかくにも、パチルア王国がどんな経緯で崩壊していったのか、おおよその話は聞いていますが、真実は自分の目で見る必要があるでしょう。それを知った時、昔の過ちを乗り越えられるはず」

「できますでしょうか」

「私は信じています。そうして、この地で皆が生きてきた。希望の象徴である精霊の力を受け継いだ三人に課せられた役目、存在の意味はそこなのかもしれない。砂漠の民に等しく与えられる希望の意味。それを見つけられなければ、希望は消える。彼ら自身が自らに与えられた力と存在の意味を理解し、すべきことを見つめる時、怨嗟の種は摘み取られるはず。そんな運命の糸を選ぶ事がきつとできます」

「そうですね……。あなたの言葉を信じたいものです」

「信じるべきは私ではありません。あの三人です」

二人は、真剣な表情を浮かべながら見つめ合うと、口元から笑みをこぼし、笑い声を上げた。二人とも思いは一つ、アータル達を選ぶ道を信じることに違いはない。

その時、門番達が騒ぎ出す声が起こった。ノルンとアーディブは立ち上がって、門の所に戻って見ると、見張りの男が駆け寄ってくる。二人は、見張りの男から、何が起こったのかを詳しく聞く。

「何があったのだ」

「敵襲です。丘の上に二十人弱ほど並んでいます」

「随分と少ないではないか。数は確かか」

「丘の向こうは見えませんが、火を起こしている要素もありません」
ノルンとアーディブは顔を見合わせた。夜襲にしても数が少な過ぎるのだ。昼間捕らえた兵の数もそれなりだが、かといって、わざわざ夜に攻め込んでくるには中途半端すぎる敵の天海の死阿多に、ノルンもその意図を見いだせないでいる。

「村長、彼らの武器は」

「剣と弓、槍。後は盾です」

「なるほどね。鉄が枯渇して武装できないか、兵士の頭数が揃わないか。どちらにしても、探ってみないとね」

「戦われるのですか」

アーディブ村長は、ノルンを心配する様子で見つめている。恩人

であり、理解者であり、その上、自分の孫のような年齢に見える彼女を戦場に出す事に後ろが見引かれる思いなのだ。しかし、そんな彼を安心させるように、ノルンはいつも通りの顔で語りかける。

「安心して下さい。私は死にませんし、今までもそうやって生き延びてきました。それに、アープとの約束がありますから」

「アープと一体、何を約束したのですか」

「自分達が留守の間、ここを守って欲しいと。私、彼女の事が気に入っていますから、約束は破れません」

そう言いながら笑みを浮かべたノルンは、門を開けて、一人砂漠へと足を踏み出していった。ノルンは加の上に他てやだかる兵士たちに向かつて一歩ずつ歩み寄る。腕からブレスレットを外し、二本のレイピアに変え、それらを器用に手首を使ってくるくるとまわしながら、相手を牽制している。青いレイピアの輝きは、まるで彼女が手に青い炎を宿している様に村人には見え、息をのんで見つめているが、兵士達は微動だにせず、表情も読めない。だが、その理由が一つの回答をノルンに与える。

それは、隠しの一手があるということ。ノルンは確信した。無防備を装って接近しているのにも関わらず、まるで動きを見せないのは、死角に何かを隠しているためだ。問題は、肉薄する距離まで接近しているにも関わらず、未だに手の内を見せないことだ。武器を隠すにしても、引きつけすぎる。長髪の意味もあるのかもしれないが、たとえそうであっても、ノルンには己を自制させる精神力がある。問題は、そこまで自信を抱かせる何が後ろにあるかだ。手の内がわからないなら、出させるしかない。出すタイミングをノルンが決めれば、五分五分の条件になる。そう決意し、彼女はは一気に走り出す。

それと同時に、へ死の後方の丘の向こう側から、砂煙が激しく上がった。何か出てくるのは予測した上で誘ったノルンだったが、目の前に現われた者は、完全に彼女の予想の範疇の外にいるものだった。

現われたのは、巨大な鉄の塊、一瞬ノルンの目にはそう映った。だが、その鉄の塊には長い首と頭があり、四本の足も備えている。異形のものに、接近はこれ以上危険だと判断したノルンは、足を止め、距離を取ろうとするが、巨大な鉄の固まりは、彼女に避ける間を与えずに肉薄し、胸元に飛び込んで、ノルンの体をかち上げて十数メートルも吹き飛ばした。自らの敵を吹き飛ばした鉄の塊は、そこで天高く咆哮を上げる。

その正体は馬だった。馬と言っても、背の低いロバやスリムな軽種のような体系でもない。暑い砂漠には不似合いな長いたてがみと巨大な体躯を持つ、重種の巨馬だった。しかも、その体には、兵士の鎧と同じ作りの装甲を全身に施され、頭部には甲冑をつけ、背には物々しい鞍、胴体部分にも至る所に鎧を装着されているのだが、元々が強い馬が、金属生命体で強化されているため、全くスピードが落ちることなく、怪力と高速の動きを兼ね備えた、ノルンにとっても厄介な敵だ。

不意打ちを食らい、予想以上のパワーの攻撃を受けたノルンは、砂まみれになりながら倒れている。常人以上とはいえ、生身の体にレベルを合わせている今の彼女には、少し許容範囲を超えるダメージが体に残っている。口から砂を吐きだし、ようやく体を引きずり起こしたノルンの背中に、鋼鉄の鎧で装甲した馬が再び突撃し、彼女を突き飛ばす。その様子を見ていた村人たちは、恐怖と衝撃の余り、体を動かすどころか、声を上げることしかできない。だが、彼らをさらに驚かせるように、ノルンはむくりと起き上がり、鋼鉄の鉄騎の方に向き直った。常人であれば、体がバラバラになって死んでいる様な激突を受けながら、生きていただけでなく立ち上がる不死身の彼女に、村人は戦慄すら覚えている。その一方でノルンは、口の中を切ったため、中にたまった血を吐きだすと、何とも言えない笑みを浮かべながら、馬を見据える。口から出てくる言葉には、

「やるじゃない。と、言いたいところだけど、今のは本気でヤバか

ったわ。砂の上じゃなきゃ、立ち上がれなくてとどめを刺されていたわ。でも、私はこうして生きている……。その意味、教えてあげるわね。ついでに、その鎧も脱がしてあげる。可哀想だからね。少し荒っぽいけど、それはお返しよ」

ノルンは指輪をかざして光の魔法人を形成し、光の戦士へと姿を変える。馬は、その変化に全く動じることなく、角などが装飾された兜をつけた頭から突っ込んでいく。ノルンは、両手を添えた掌底で、それを受け止める。二人の力は互角となり、馬の首を尾は縮み、ノルンの足は砂に沈む。だが、カ一辺倒の馬では、知性と経験と技術があるノルンには到底かなわない。ふっと力を抜き、相手のバランスを崩すと、ノルンは相手の力を利用して自分の体をはね上げさせ、宙に舞う。そして、ひねりを加えながら体を馬の背中 of 鞍に着地させる。

自身の背に飛び乗られたことに誇りを傷つけられた馬は、何とかノルンを振り落とそうとするが、その間にも彼女は相手の鎧を叩き壊していく。

「暴れんじゃないわよ。せつかく、このうっかしい鎧から逃がして上げているんだから、感謝しなさい。……、さてと、この鞍も外しましょうねっ」

ノルンは鞍の上に立ち上がると、手で強引に引き剥がしてしまった。鎧の大半を失った馬は、次第に体が抜け始めているが、未だ凶暴性は衰える事を知らない。唯一残った装甲の兜を突きだし、ノルンに猛烈な突進を仕掛けてきた。ノルンはそれに対し正対し、じつと距離を測る。そして自分の間合いに入った瞬間、垂直に飛び上がり、相手の兜に向かって力を針の穴の小さな点に集中させて蹴りを放った。足が当たった瞬間、体の馬根だけで即天使、馬の突進をやり過ぎす。そして、すれ違いざまに、馬の最後に鎧は砕け散った。

ノルンが後ろに目をやると、馬から鎧は外れたものの、その影響で精神が恐慌状態に陥って暴れているが見える。目は血走り、息は粗く、ひどく汗をかいている。暴れていると言っより、悪夢にう

なされているのかもしれない。ノルンは、その姿を哀れに思い、馬に近づきながら、

「もう終わったわよ。あなたにも罪はない。今、夢から覚めさせてあげる」

と語りかけた。その言葉と共に、彼女の指が印を結び始める。見た事もない形に指が結ばれ、その度に柔らかな光がそこから溢れ、暴れ回る馬を照らしていく。そして、光に照らされた馬の目から、怒りや脅えが言え、光に同調した穏やかなものになっていくと、そのまま砂の上に座りこみ、穏やかな表情で眠り出した。どうやら悪夢が終わったようだ。

ホツとした瞬間、ノルンの足から急に力が抜けてしまった。エネルギーが急激に危険域に達し、このままだと消滅の危険がある。それを悟った彼女はすぐに人間体の姿に戻ったが、体の自由がなかなか戻らない。いくら、エネルギーの消耗が激しいと言っても、ひどすぎる状態だ。首からも力が抜け、うなだれているノルンは、ふとある事に気がついた。

「砂が、光っている……」

彼女は、砂をすくい取り、目に近付けてじつと眺めている内に、その特別な目で一つの事実を発見した。

「太陽の光を反射、いえ、遮っているほとんど不可視の光線が放射されている……。これが、正体不明のエネルギー、ダークエネルギーの一種なの」

観測も難しく、性質も特定が難しいダークエネルギー。それ故に、どんな作用をもたらすのかも不明だと、着任前にレクチャーを受けてはいたが、まさかこんな形で出会うとは、ノルンも予想外の出来事だった。昼間の戦闘での急激な消耗、日没後の戦闘による致死に至るエネルギーの枯渇。ダークエネルギーがノルンの肉体へのエネルギー供給を阻んでいたと考えれば、エーテル不足のこの星での予想以上の消耗は納得はいく。だが、納得入っても予想できなかった以上、次の予想もできていないのだ。ノルンと言う、一番の障害を

押さえた兵士達は、丘を一気に駆け下りて、彼女の許に殺到してくる。ブレスレットを抜いて応戦しようとするが、腕も思うように動かず、立ち上がることもすままならない。それでも、ノルンは、必死に膝を立て、戦う意思を見せる。何故なら、彼女にはここで死ぬ気はない上、村を守る事がアープとの約束があるからだ。それに、彼女の中には、まだやるべき事もやりたい事も残っていると言う思いもある。

その意思が、体の限界を無視してノルンを立ち上がらせた。その時、彼女の後方から大声と足音が聞こえてきた。村人たちが、ノルンの姿に呼応して、村から打って出たのだ。彼らは、農具を武器に兵士に掴みかかり、押し倒して鎧を脱がしていく。戦うべき相手、方法、そして勇気を手に入れた今の彼らなら、操られて心もない操り人形など怖くはないのだろう。そして、命を奪わずに解決できる方法を手に入れた。ホツとして、その場に座り込んだノルンだったが、その隙について、敵が一人襲いかかってきた。至近距離だが、ノルンに焦りはなかった。面倒くさい、その程度にしか思わず、シヤインブラスターを抜こうとした瞬間、脇から飛び出してきた影がノルンの小さな体を脇に抱えて、その攻撃から庇ったのだ。さすがにこれには驚いたノルンだったが、その正体を知ってさらに驚いた。「……、バーガル。あなた、ここで何しているの」

ノルンを庇ったのはバーガルだった。確かに拘束していた縄をほどいたのは覚えているが、どうしてここにこられたのか、ノルンには、すぐには理解できなかった。

「アーディブ村長殿です。ノルン殿の危機を知らせて、何とか助けて欲しいが、村の男では、恐らく齒が立たないと。それで、あの方がすべて責任を持つと言ってここに来たのです。少々お待ちを」

バーガルはノルンを地面に下ろして立ち上がると、彼女を狙って再び向かってきた兵士の前に立ちはだかった。そして相手が向かって来る隙について、武器を取り上げ、体を抱えあげると頭から砂の上に叩き落とした。そして、手際よく、呪いの鎧をすべて脱がせて

事を済ませた。ノルンも、その手際の良さと強さには、舌を巻くより他ない。

「あなた、強いよね。今まで会った生身の人間では、あなたが一番強いわ」

「恐れ多いことです。ノルン殿、恐らく、パチルア国の兵士は、もう遠征不能でしょう。ここに居る者と昼に捕らわれた者を除けば、もう国を守る最低限の兵士だけです」

「そう。嬉しい話と言いたいところだけど、まだ、そうとも言えなくてね」

「どう言う事ですか」

「血の気の多い馬鹿が、敵の大將の居る本丸に飛び込んでいくつもりなのよ」

ノルンは手短かに、アータル達がパチルア王国に奇襲をかけに行つた事を伝えた。まだ、可能性の話だが、アータルの気象や根性を考えれば、先に突撃を始めてしまうのは目に見えている。そうなれば、後から行く二人も否応なしに戦闘に入る。問題はその後だとノルンは考えている。アータルはさすがに民間人に手を出すつもりはないだろうし、兵士の命を奪う気もないだろう、問題は、將軍と王だ。王に手を出すと、悲劇の泥沼化に陥る恐れが大きくなるし、ややこしい国際問題に発展する。そして、將軍に手を出した場合、勝てる保証がある様にはノルンは思えなかった。金属生命体に指令を出せるとなると、かなりの生命体と融合しているはずだし、能力もけた違いなのは、彼女でなくても想像がつく。あの三人がばらばらで戦う限り、殺される確率が高い。ノルンの考えにバーガルも同意した。「ノルン殿の言う通り、將軍の強さは、想像を絶します。そこが知れないのです。そして、何よりも王に手をかけてはなりません。確かに、あらゆることに責任を追う御方ではありますが、実権なき王であり、將軍にすべての実権を握られているだけです。万が一、王を失う事になれば、パチルアは強大な国家や遊牧民の侵入を受けて、街が砂漠に呑みこまれる前に滅びます。それは、この村にも関わる

こと。砂漠の民は、ばらばらに暮らしながら、一つの世界に生きるのです。我らは、まだ王を必要とするのです……」

「そこを彼らがわかつていっていくればいいけど、まだ厳しいかな……」

「一番危険なのは、將軍の強さ。もはや人ものではありません。あの力は魔物と違っていいでしょう。鎧は生き物のように形を変え、武器は蠢きます。あの化け物さえいなくなれば、我々同様、正気に戻るのですが、今のままであれば、あの三人はおるか、ノルン殿ももしかしたら……」

「でも、私の場合、それが仕事よ。あなたと一緒にだから。どちらにしても、私が行かなくちゃ」

ノルンは重い体を引きづり起こし、パチルア王国の方へ歩き出していった。当然、バーガルは止めようとするが、彼女はその手を振り払う。

「放してよ。言ったでしょ、これが私の仕事だって。私もあなたも戦士。戦士は殺戮のために戦うわけじゃない。少なくとも私は、助けを求める人を守るために戦いたい。今、助けを求めているのは、砂漠の民。声が聞こえているのに、黙っていられないの。それに、私はそう言う性分だから」

「性分、ですか。そう言えるノルン殿が羨ましい。ですが、砂漠を徒歩で越えるなど、無茶です」

「まあ、今のままならね。日の出がくれれば力は戻る。でも、日の出を待っていたら、まずい事態になる可能性がある。それなら、今から出発して距離を稼がないと」

ノルンは、バーガルを振り払い、歩きだしていった。すると、ノルンのそばで、ドスンと言う音が鳴り響き、何かと思った彼女は音のした方に目をやると、そこには、先程助けることに成功した、青光りする黒い毛色の巨大な馬が膝まづいていた。馬はじつとノルンの目を見つめている。

「何なの、あなた。さっきの仕返し、というわけじゃないみたいね。」

……、もしかして、乗れって言っているの」

ノルンがそう語りかけると、馬はいななき、さらに体を低くし、彼女が乗りやすいようにする。そこにバーガルが駆け寄ってきた。彼もまた、馬に乗る事を勧めてくる。

「ノルン殿、この馬でしたら、日の出までに砂漠を横断できます」
「本当なの」

「我が国は、騎馬系遊牧民の出。今でこそ定住し、馬を必要とする事はなくなっていますが、王家に献上する馬は、野生に放した馬の中で最も速く、強く、賢く、気高く、渴きに耐える馬が選ばれます。この馬は、そうあって選ばれた馬なのです。しかし、王家の馬まで持ち出すとは、何とも嘆かわしい……」

「そんな国を救うためにも、私は行くから。それに、パチルアで育った馬が、国を守るために一肌脱ぐなんて、すごく粹じゃないかしら」

ノルンは馬に飛び乗ると、馬は一気に立ち上がり、ギャロップで走り出し、砂丘を超えていった。ノルンが小柄な上、馬が巨漢すぎるため、ノルンが乗っているようには誰にも見えない。バーガルは、ノルンが見えなくなったとも、祈るような気持ちで呟いている。

「どうか、ノルン殿。わが国だけではなく、砂漠の民すべてのために、力をお貸しください。未来をお守りください……」

パチルア王国

ノルンは巨漢を誇る馬に乗り、砂漠の横断を敢行している。馬は、体型に似合わず、非常に速いスピードを維持し、全くばてる事を知らないスタミナを持っていた。その体力には、様々な生物に出会ってきたノルンですら、舌を巻くほどである。

「あなた、本当にすごいわね。協力してくれた事には感謝するわよ。それにしても、滅茶苦茶な体力……」

ノルンは呆れるような口調で、馬の身体能力を表現しているが、これは、彼女にとつては最大級の賛辞の言葉でもある。小さな砂嵐が途中で襲ってきたが、それでも前進は止まらない。ノルン一人であれば、立ち往生するか、下手すれば遭難した可能性もあったが、こうして横断を続けられるのは利点は、かなり大きい。これなら、夜明け前にパチルアに到着できる見通しが立つ。

だが、ノルン自身には一つ気がかりな事があった。指輪の輝きがほとんど失われ、エネルギーが枯渇しているのだ。少ないエネルギーチャージで変身が可能と説明は受けていたが、この星の環境ではその利点は十分に生かせないでいる。しかも、ダークエネルギーを発生させる砂が嵐で舞い上がってしまっているため、ただでさえ少ない宇宙線がさらに遮られ、ダークエネルギーの放射範囲を広げてしまっていた。このままでは、到着までにエネルギーの補充が間に合わない上、戦闘になったら変身する必要性がなくても、対応できない可能性が高い。シャインブラスターで対応できる範囲の問題ならいいのだが、そんな生易しいものではない予感が、ノルンの心の中にある。

それがたった一つの危惧であり、同時に最も大きな問題を抱えながらも、彼女はこの砂漠の横断をやめるわけにはいかないのだ。彼女とアータル達には、この砂漠の民の未来がかかっている。そして、ノルンの役目は、宇宙から飛来し、この地の運命を狂わせた金属生

命体を討つこと。そのためにも、前に進まなければならぬのだ。

「頼むわよ。あなたが背負っているのは私の体の重みじゃない。この砂漠に住む人の未来の重さなんだかね」

ノルンの叱咤に応えるかのように、馬はさらに蹄音を強めながら、暗い砂漠を疾走していく。

やがて、東の空が明るくなり、空全体が明るみを帯びて、目に見える星の数が少なくなってくる。夜明けが近くなり、砂漠全体が遠くまで見渡す事が容易になった。そして、ノルンが進む先に、黒く細い影が見え始める。

「あれが、パチルア王国……」

ギリギリ夜明け前に着く事ができ、少しだけノルンはホツとしたが、まだ安心することはできないでいる。今のアータル達なら、あの国の兵士を倒すことはたやすいだろう。だが、その奥に控える將軍はレベルが違うのは確かだろうし、幼い王への対応を間違えば、この砂漠の国の未来に取り返しのつかない事態を招きかねない。ノルンにとっては越権行為すれすれの介入ではあるが、この事態は金属生命体の侵入によって引き起こされた部分が大きいと彼女は認識し、これを最後の介入と思い定め、道を急ぐ。しかし、強靱な体力を持つ馬も、スタミナが尽きかけ、走りが乱れ始めている。

「あと少しよ。だから頑張つて。あなたもあの国が好きだから、協力してくれたんでしょ」

ノルンの言葉に応えるかのように、最後の力を振り絞って馬は加速し、国の入口まで近付いていく。すると、砂漠に数人の人影が見え始めた。ノルンは敵かと思い、視力を強めて正体を見極めようとした所、ほとんどが女性や子供、そしてぐったりしている男性達だった。ノルンは馬を減速させ、彼らの近くで飛び降りると、傍に駆け寄り、身元を確認する。

「あなた達は、パチルアの人なの」

「は、はい。あなたは一体……」

この地に暮らす人の民族衣装には当てはまらない衣服を着ている

上、裸馬に乗ってくる女など見た事がないであろうから、相手が戸惑うのも無理はないが、ノルンもあまり時間がないため、長く話すつもりはなく、矢継ぎ早に質問を浴びせていく。

「まあ、シオシス村とバーガルの使いとして、パチルアに来た者よ。話によると、あなた達は夫と隔離されて人質にされていた人ですか」
「はい。ですが、髪の赤い女の子が現われて、私達を解放してくれました。兵士の邪魔があつたようですが……」

「そう。あいつ、やればできるじゃない……」

髪の赤い女の子は、アータルのことであるのは、ノルンにすぐわかり、思わず笑みをこぼさずにはいらなかった。激情に任せて、捕虜を焼き殺そうとしていた彼女だが、その目にあつた悲しみは、押し殺している彼女の優しさが悲鳴を上げていたためなのだろう。ノルンはそう理解したからこそ、あえて手を出さなかった。勝手に飛び出した時も、暴走して関係ない人々を手にかけることはない。と信じていた。そして、ノルンの予想通り、アータルは弱いものを先に救うと言う事を優先してくれた事に、ノルンは嬉しさを感じずにはられない。

「そうですか。でも、無事に知られて良かった」

「はい。そして一緒にいた金髪の男の方が、砂嵐を消してしまつたんです。とても驚きました。銀色の髪の少女は、持っていた水を分けて下さって、ようやく街から離れたところまで来ることもできました」

「ワルフもアープの追いつたわけね。彼らはまだ戦っているかしら」
「恐らく。兵隊の鎧を脱がせて、正気に戻してくれていましたから。ですが、將軍が来たら、彼らだけではなく、私達も助かるかどうか……」

女性の危惧もまた、やはり將軍にある。その強さは、国民の中でも恐怖の対象として、心の中に空ライ影を落としているのだろう。ノルンは、完全な恐怖政治と思つたのだが、女性の口からは、意外な言葉が出てきた。

「あの方達なら、エーシユマ將軍を昔のような方に戻してくださるかもしれない……」

「どういう事。彼の無事を祈っているの」

「皆、同じ気持ちです。兵士も国民も、本当のエーシユマの姿を知っているからこそ、鎧を着て、脱走も企てずに、正気に戻ってくれる日を、そしてあの方を救ってくれる人が現われる事を待っていたのです。叶わない事と知りながら……」

ノルンは驚いた。暴君によって抑圧された暮らしを強いられながら、まだエーシユマ將軍の事を信じている彼らの心がすぐには理解できなかった。だが、バーガルから聞いた、先王の優しさとエーシユマの力と勇気が国を支えていたと言言葉が、彼女の頭の中で蘇ってくる。そして、彼もまた、金属生命体が食らいついた鎧を着ている事も。

「ねえ。エーシユマと言う人物は、それほどまでに偉大だったの」

「はい。武人でありながら、慈悲深く、他国に攻めていっても。寛大な措置を自らの判断ですること、この国が恨まれないようにしてくださいるお方でした。先王が亡くなった後の混乱も、誰よりも心を痛め、心ならずも政治の場に口を挟まざるを得なかったのです」

「イメージとだいぶ違うわね……。でも、妙な鎧を着てから、侵略を繰り返し、国民に無茶な事をするようになってしまった、そういう事かしら」

「はい。国王様も王太后様も軟禁されていると噂に聞いております。それでも、私達はエーシユマを見限る事は出来ないのです」

女性の言葉に、ノルンは少しずつ真相に近づきつつあった。金属生命体は、先王の死の後の混乱期にパチルアに侵入し、エーシユマにとりつき、この国の混乱と不幸に関与しているのは明白だ。だが、黒幕に近い存在だと考えていたエーシユマが、実はバーガルやこの女性の言う様に、元々高潔な人物でありながら、金属生命体によって狂わされたとしたら、彼を倒す事では事態は解決しないと、ノルンは確信した。彼を救う事では、この怨嗟の種は摘み取れないと

言う事も。

「わかった。エーシュマの事は任せて。王と王妃がどこにいるか走らないの」

「宮殿のどこかと言う事しか……」

「それだけわかれば、後は自分で探す。あなた達も、夜明けが近いから無理な移動はしないで。水は分けあってね」

ノルンはそう言うと、馬に乗り、街に向かおうとしたが、すっかり消耗しきった馬は、足元がぐくぐくして、これ以上はとても歩けそうにない。それでも、ノルンのそばにより、彼女が乗りやすいようにしゃがみ込むが、もう限界なのは、ノルンにもわかる。

「もういいわよ。十分に頑張ってくれた。後は私に任せて。あなたのおかげで体力も十分に戻ったから。ここで休んでいて。変な奴らが来たら、あなたがこの人達を守ってよ、強いんだから」

ノルンはそう言い聞かせて、自力で走り出した。体力もだいぶ回復し、普通の人間よりかなり速いスピードで走る事も可能になったのだ。指輪を確認すると、太陽の光が次第に強くなることに、ゆっくりではあるが、輝きが戻ってきている。

「諦めない。この人達の未来への糸を断ち切る奴を倒すのが私の役目。立ち止まれない……」

ノルンがパチルアに到着する少し前、アータル達は、この国の護衛の兵士をすべて沈黙させていた。

最初にここに到着したアータルは、激情に心を奪われる事を危惧してされていたが、自分が倒すべき相手を見定め、兵士達の鎧をひきはがす戦術をとり、決して命を奪うような真似はしていない。ただかまりはあるものの、自分の良心を奪った物が金属生命体だと知った今、彼女にとって兵士は憎しみの対象から外れつつあった。

たった一人で、兵士たちを蹴散らせいくアータルの元に、ワルフが追いついたのはしばらくしてからだった。彼は、戦っているアール

タルの背後に近寄ると、後頭部を拳で殴りつけ、周りに敵がいるのも構わずに説教を始める程、頭に血が上って感情的になっている。

「クソガキが。滅茶苦茶な事をしゃがって。ここまで来なきや追いつかねえなんてよ。それにしても、お前、よくキレなかつたな」

「後ろからいきなり殴んなよ。あの鎧を剥がせば、万事問題ないのはわかっている。でも、もう引き返せないから、そのつもりでいてよ」

「ったくよ。しょうがない、付き合っただけさ。さっさとしないと、アープも来そうだ」

「とつとと行くよ。あらかた、片付けたからさ」

アータルは、両腕に高熱の炎を纏わせ、兵士の鎧に拳を打ちこみ、金属生命体を熱で引き剥がす。ワルフは、アータルの攻撃された兵士を突風で巻き上げて自由を奪い、持ち前の腕力で高熱で脆くなった鎧を破壊していく。昨日ノルンに指摘された、連携の悪さはそこにはない。彼らが意識して行動しているのではない。彼らが為すべき事を理解し、その力が何のためなのかと言う存在意義に近づいているからこそ、単独の力に頼らず、精霊から得た能力を確実に引き出しているのだ。二人の連携に、金属製迷亭で強化されただけの操り人形は、手も足も出ず、もはや敵ではない。

アータルとワルフは、パチルアに残った兵を完全に沈黙させた。

アータルは、残る敵は將軍だけと息まいているが、ワルフは彼女をなだめ、落ち着いた口調で周りの状況を確認している。

「待て待て。バーガルの話だと、こいつらの女房、子供は人質になって、隔離されるんだ。それを助けなきゃ、この野郎どもを解放した事にはならねえぞ」

「確かに。家族を盾に取られちゃ、手出しも口出しもできないよね。何だか、気の毒な連中……」

「一晩経って、その所がわかる様になったか。二発も殴った甲斐があつたつてもんだ」

「そんなんじゃないわよ……。後で、昨夜のお返しはするからね。」

さっさと人質を探そう」

アータルは照れを隠そうと、手当たり次第に辺りの家の中を確認していく。ワルフはそれを、年長者の余裕で見守りながら、自分も周りの建物の中を確認するが、まるで人影が見えない。兵士の数を考えればそれなりの数の人質は居るはずなのだが、人っ子ひとりいないのだ。怪訝な表情を浮かべて顔を見合わせる二人の耳に、聞き慣れた声が飛び込んできた。

「アータル、ワルフ……。追いかけてきて、とうとうパチルアにいちゃった……」

声の主は、アープだった。ノルンに村の事を託して全力で二人を追いかけてきたのだが、すでに二人は手を出してしまった後だったのを見て、息を切らしながらがつくりと首をうなだれてしまっている。

「もう全部終わってしまったんですね……」

「ん、まあな。本当にお前まで来るとはな。もしかして、村の事はノルンさんに頼んだのか」

「他に頼める人がいません。アータルが勝手な事をするから」

「まあまあ、許してやれ。こいつもやつと分別がついたんだ。そうだ、お前もせっかく来たんだ。野郎どもの家族を探すのを手伝え」

そう言っつて、ワルフは、アータルと一緒に家々を再び探し回るが、アープは呆れた口調で、二人をたしなめる。

「家に閉じ込めておいたら、すぐに逃げられるはずだけど……。どこか、街の一角に固められているのでは」

「そ、そうだよな……」

「年長者がこれでは困ります」

アープは呆れた口調で、二人とは別に、街の外観をじっくりと見つめながら、不審な点を探して歩き回る。彼女は、鋭い視線を辺りに向け、落ち着いた様子で街の中を見渡す。やがて、街の奥まで歩いたところで、何か不審な場所を見つけ、立ち止まり、他の二人を呼んだ。

「ここだけ、土塁が高く設けられている。アータル、ワルフ、ここが怪しいかもしれない」

二人は、アープの元に駆け寄り、高く築き上げられた土塁と云うか、土壁を見上げた。家の間の細い路地を埋め、家一軒を塗り固めるその土塁は、人が住むエリアの中で極めて異質だ。しかも、一区画を囲むようにその土塁は続いている。

「じゃあ、とりあえずぶつ壊して、中に入ればいいね」

「馬鹿野郎。人質がいるんだぞ。慎重に行かなきゃ、けが人を出すぞ」

意見をぶつけ合う二人を尻目に、アープは腰につけた数個の革袋のうちの一つを取り出し、水を土塁に浴びせた。そして、そこに手を当てると、水を司る自らの能力をそこに注ぎ込む。水は土の中をじわじわと広がり、広範囲にわたって土を濡らす。アープは水の広がりを確認すると、今度は水の状態を氷に変えて壁を凍結させていく。水を含んだ土は固く締まっていくが、さらに低温におくことでその部分はやがてもろくなっていく。アープは、壁に触れている手に、ふんっ、と自分の気を送り込んだ。その瞬間、壁は粉末のようにふわわりと風に舞いながら崩れ去った。余りの手際の良さに、アータルもアープも、何も言えないでいる。

「落ちて着いて行動しましょう」

ただ一言だけ二人に言うと、アープは土塁の中に踏み込んでいき、残る二人も後を追う。

土塁の内側は、土づくりの家はそのままに、街の一区画が丸ごと覆われたものだった。壁が周りにある以外は、普通の街並みに見える。三人は周りを見渡しながら、広い通りに出ると、壁が崩れたり、兵士と戦うものを音を聞きつけたのか、女性や子供、老人などが家から出て、通りに溢れていた。

「私たちの村と一緒……」

その光景を見て、アータルは絶句してしまった。なぜなら、その光景は、彼女が守ってきたシオシス村と同じような光景だからだ。

戦う男達、村で片隅で恐怖に帯びれる女性や子供や老人、何一つ変わらない光景がそこにある。そして、彼女は自分の間違いをはつきりと認識した。彼女の力は兵士だけでなく、その後ろにいる弱者にも向けられていたこと。そして、彼らの目に移る彼女の姿は、憎むべき悪魔に見えるかもしれないと言う事を。

絶句し、人質にされていた兵士の家族に目を向けられないアータルの心情を察したワルフは、そつと彼女の肩に手を置き、

「わかればいいんだ。手を汚す前にわかったんだから、それでいい」と、優しく語りかけた。ワルフは、年長者の余裕と、豊富な人生経験で、アータルの心の内を察したのだろう。彼女の受けた衝撃と彼女自身の行為による罪悪感は、言葉に頼らずともワルフにはわかる事だった。シヨックのあまり、目から涙がこぼれ落ちそうなアータルの頭に手を置き、髪が乱れるくらいに強く頭を撫で、ワルフは彼女を励ます。

「お前は、一歩前で踏みとどまった。よく自分を見てみる。お前は、ノルンと一緒にじゃねえか。お前もノルンみたいになれるんだ」

「私がノルンに……」

「そうよ、アータル。ノルンさんが私達の村のためにしてくれた事、わかるでしょ。あなたは今からでも、あの人の様になれる」

アープは、アータルの方に振り向きながら、ワルフと共に崩れ落ちそうな彼女を精一杯支える。戦う事だけでなく、精神もまた、彼らは、共に苦楽を分かち合い、ここに一つになる時を迎えつつあった。

二人の励ましを受け、顔を上げたアータルは、こぼれ落ちそうな涙を拭きとり、笑顔を無理に浮かべ、彼女自身がこれからすべき事をはつきりと見つけた。

「この人達を助けよう。兵士もこの人達の家族だもの。みんな一緒に助けたい」

アータルの言葉を聞いた二人は、にっこりと笑いながら顔を見合うつと、アータルの意見に賛同し、囚われの身となっていた人々を解

放し始める。アータルが女性や子供を先導していき、ワルフは伸びている兵士の男を待ちの入口まで運び、風の力で吹き荒れていた嵐を打ち消した。アープは自分が運んだ水を住民に分け与える。国の政治の乱れに巻き込まれた人々を、一先ず解放することには成功したが、まだ本当の原因は解決していない。

「さて、後の問題は將軍と王様か。どちらを先に手をつけるべきか」「当然、將軍の方です。彼の暴走を止めない限りは、住民は救われないし、王を先に開放しても奪還されたら何も変わりません」

「そうだよな。その方が、気持ちよくぶん殴れる分、気楽だ。王様の方は、ノルンの方が得意だろう。よし、アータル。城に殴り込むぞ。ただし、キレルなよ」

ワルフとアープは、いよいよ決戦の時が来たといきり立つアータルを連れ、街の奥にある城へと向かった。周辺の家とは明らかに違う異様を誇る城は、土づくりではあるものの、様々な染料で壁に絵が施され、華やかな雰囲気を漂わせている。だが、所々色が剥がれ落ちたり、壁にひびが入り、パチルアの混迷や後輩を物が体いる様にも言える。シアス村から外に出た事がないアータルとアープは城の外観に、すっかり目を奪われてしまっているが、若い頃の放蕩の際に様々な街を訪れた経験があるワルフには、この城の細かな点から、パチルアの国力が衰えている事が見えてくる。

「おい、お前ら。あの壁の絵や壊れている部分を見る。王が住んでいる建物があんなになっているのに、直した気配がない。それが、パチルア王国の今の姿だ。ある意味、俺達の村よりひでえ有様かな」

彼の言葉に、彼女達はそう言った見方もできるのかと思い直し、周りを見渡しながら、そこに漂う気配に華やかさや権勢と言った物が感じられない事に気がついた。

「空っぽの街のせいじゃなく、この街って生きていない気がしない」「私も同じ気持ちなの、アータル。水が枯れたせいじゃなく、この街の精气そのものが枯れ果てているのよ。何て言うか、すっかり疲

れ果てていると言っか……」

「やっぱり、この街を助けないと。滅ぼしちやいけない。よし、將軍の鎧を溶かして、引っ剥がしてやる」

「フフ、手加減してね」

三人は、この街の惨状を知ったことでさらに奥に進んでいく。門をくぐり城の内部に入ると、中庭の様の所に出たが、水が枯れているため、草木が枯れてしまっている。まるで、この国を象徴しているようだ、三人は心の中で同じことを考えた。さらに城の内部に入って奥へ進むと、中庭よりも広大な広場に出た。周りを城壁で囲まれたそこは、王が兵士たちに目入りを下したりするための空間と思われる。このような作りの建物に出会った事のない三人は、異様に圧倒され、足を止めざるを得ない。小さな村で育った彼らにとっては致し方な反応である。外の世界を見た事のあるワルフですら、これほどの規模の建築物を見た事がなかった。彼らは走る事をやめ、無意識に建物を見渡しながらゆっくり歩くことにする。

「こんなにすごい国と、あたし達は戦っていたんだ……」

「アータル、それもそうだけど、これだけの国が小さな村を落とせないくらい弱っているなんて、普通じゃないわ」

「ガタガタなんだろう、何から何まで。早い所蹴りをつけてやらないと、大勢の人が死ぬ」

建物から漂う絶望的な空気に、三人は一層の決意を固める。そして、さらに奥に進もうとした時、彼らの進行方向から、禍々しい空気が流れだし、彼らの体を拘束した。戦士として日が浅い彼らであっても、その気の異様さは瞬時に把握できるほど、今まで出会った事のない恐ろしい気迫が三人を捉えて離さない。蛇に睨まれた蛙のように身動きできず、正体不明の気に絡め取られた三人の前に、その根源足る物が姿を現す。

規則的に、鉄がぶつかり合う音が近づき、さらに振動まで伝わってくる。その音が一つずつ近づく度に、三人の心に恐怖心と言うものが刻まれていく。そして、音だけでなく視界にも、恐ろしい気の

持ち主が姿を現す。それは、兵士たちが着ていたものとは全く違い、胴体だけでなく手足まで鋼鉄で装甲され、生身の部分が見えなくなるまで完全に武装された、恐ろしく大柄な人間だった。腰に、大剣を差し、手には巨大な斧を持ちそれを肩に担いでいる。人でありながら、この世のものと思えない気迫を放ちながら、超人でありながら空くまで人の心を持つ三人に近づいていくのは、まさに魔神と言えるものでった。

魔神は、三人に対して警戒心を全く抱く事もなく近づいていき、二メートルは超える体軀で彼らを見下ろしながら、地獄の底から響くような低い声を上げた。

「お前達か。俺の戦士達をことごとく食い止め、拳句に鎧をひきはがした者は」

人の言葉を話しながら、現実感を感じさせない声に、三人は臆しそうになったが、目の前にいる敵を乗り越えない限り、この砂漠にすむすべての人の未来がない事は、誰に教えられる事がなくとも理解した今、退く事は選択肢には絶対がない。

「そうだけど、文句あるかい」

アータルは全身に炎を纏わせ、敵に飛びかかっていく。アープは、相手の足もとに水を投げつけ凍結させて、動きを封じる。そして、ワルフは二人に力を与えるべく風の力を送り込み、彼女たちの能力を強化させていく。爆風と共に相手に接近したアータルは、その拳を兜で覆われた顔面に叩き込んだ。高熱で金属生命体を、衝撃で鎧を砕いた手ごたえがアータルにはあった。確信を持って、拳を打ちこんだ場所を見た彼女だったが、その個所を目にした瞬間、その光景に絶句させられる。鉄は確かに砕けていた。しかし、その部分に金属生命体が大量に密集し、破損した個所を覆い復元させたのだ。アータルは、炎を再び燃え上がらせ、高熱を送り込むが全く効果がない。焦りが生まれ、油断が生じたアータルの頭上から、敵の拳が打ち込まれて地面に叩きつけられ、さらにその頭を巨漢の体重を乗せた脚で踏みつけられる。必死に抵抗してもがくアータルだが、相

手はさらに足に力を超えて、彼女の頭と顔を大地にめり込ませていく。自分達の力を全く問題にしない相手にアープとワルフは、恐れ之余り、身動きをとれないでいる。三人の力を問題にしなかった敵は、感情のない言葉で、

「俺の名は、エーシユマ。行く手を阻むものは薙ぎ払うのみ」と、宣言し、巨大な斧を振りながら、三人に向かって攻撃を開始した。

三人が城の中に入り、戦闘を開始するかしないかになった頃、ノルンもまた城に到着していた。状況を確認しながらここまで着たノルンには、三人の行動がおおよそ見当がつき、彼らがするべき事を行い、その行為によって共存の未来を選びつつある事に、思わず笑みがこぼれ落ちる。

「ここまででは、私の出る幕はなかったわね。しちやいけないのかもしれないけど」

その星の選択に干渉してはならないという鉄則があるノルンは、三人がここまで解決できるようになったのなら、もうこれ以上は手出しはできないのかもしれない。だが、この先に居るエーシユマは、三人の手に余る可能性が高く、金属生命体の排除も残っているため、まだ見過ごすわけにはいかなかった。三人の後を追いつ、城に足を踏み入れたノルンは、その奥から禍々しいエーシユマが発する気を、鋭敏な感覚で捕らえる。ノルンの感覚では、城の外からでもその気を感じ取ってしまったためだ。

「ものすごい気配……。でも、人のものではない。これは金属生命体が発する声の様なもの。相当の量が潜んでいる」

さすがのノルンでも、不用意にその気配に向かって踏み込まず、ゆっくりと歩を進めざるを得ない。静まり返った城の奥からは、金属生命体のうごめく気配に交じり、三人が戦っている物音と気配が聞こえてくる。急がねばならないと言う思いに駆られたノルンは、重苦しい空気の中を突き抜ける気持ちで走り出す。

足を一歩ずつ踏み出していくその途中、ノルンの聴覚は、前方から聞こえるものとは違う別の音を捉え、彼女はすぐさま足を止め、周りに耳を澄ましてみる。彼女の聴力でなければ聞き取れない小さな音が、どこからか聞こえ、ノルンはその音の出所を気持ちよく落ち着け、穏やかに保ちながら、音の出所を絞り込んでいく。目を閉じ、精神を集中させたノルンは、音の出所を城壁の方向に見当をつけ、さらに場所を絞り込んでいく。やがて、その音は人の声に聞こえ始め、小さな場所からようやく外に漏れ出ている声だと、彼女は気がついた。目を開け、目星をつけた辺りを探っていくと、小さな窓と云うより穴にしか見えない個所がポツンと一カ所あるのを発見したノルンは、その穴までの距離と高さを目測で測る。そして、プレスレットの形状をレイピアに変えて両手に携えると、壁に向かって全力で駆けだしていく。そして、壁にぶつかる寸前跳躍し、最高点に到達する所で、今度は壁に足をかけて踏み切り、さらに高い位置までの助走の慣性が残っている限り、壁を垂直に走るように登っていく。

ノルンは、戦士としての資質は元から高かったが、体格や体力面では、訓練生の間でも、女性の同期生の中ですら見劣りするほどだった。そんな彼女が、勇士司令部と云うエリート戦士の部署に配属されたのは、クソがつくほど真面目に勉強や訓練に励んだ事や、人一倍の実戦経験を積んだ事が大きい。だが、それ以上に彼女の能力を高めたのは、努力する事を微塵たりとも苦にも思わず、意識する事もない精神面と、貪欲に新しいものを取り入れ、自らのスキルに加えていく姿勢の賜物でもある。

ノルンが今見せた動きは、地球のパルクールと言う運動技術だ。走る、跳ぶ、登ると言った移動のための技術であり、自分の精神面を高めるための運動方法を、地球を訪れた同胞から聞いた彼女が、それを自身の動きにとり入れたのは、彼女の慧眼である。小柄な彼女が敵と戦うには、空間を縦横無尽に動き回り、自分の間合いを自在に操る必要があるため、移動を主に置くパルクールはノルンにう

つてつけの運動技術でもあった。また、パルクールの精神における自分や他者を守ると言う目的は、戦士として以外のノルンの生まれ持ったの秘めた資質に偶然とはいえ、非常に相性が良く、故郷の仲間の間でもノルンの戦闘スタイルはやがて異質なものになっていき、彼女の存在自体に一層の特異性を与えるものとなっている。

そのパルクールの技術で、十メートル以上はある部分にある壁の穴の近くまで到達したノルンは、レイピアを壁に突き立て、そこを足場にして立ち上がり、穴の中を覗き込みながら声をかけた。

「私を呼んだのは誰」

乾いて冷たい土に壁にノルン声が響き渡る。しばらくして、彼女の声に応えて、返事が返ってきた。それは子供の声である。

「余の声を聞いてくれたのか。礼を言うぞ」

子供ながら、尊大な物の言い方に、ノルンはこの子供が幽閉された幼い王だとすぐに分かった。

「あなたが、国王陛下であられますか」

普段はざつくばらんなノルンであるが、目上に対する礼儀に関して非常にしっかりしているのは、決して権威主義ではなく、育ちの良さから来る自然体であると同時に、面倒なトラブルを避けたいという必要性からである。ノルンの礼儀正しい口調に、相手の子供も少し安心しきった様子だ。

「余が、パチルアの王、ナビーフだ。お主の名は」

「私はノルンと申します。陛下、私の足場はそれほど丈夫ではないので、そちらに入ってもよろしいでしょうか」

「構わんぞ」

「では、壁より離れ下さい」

ノルンは相手が壁から離れるのを確認すると、シャインブラスタ―を至近距離から発砲する。爆風のほとんどがノルンに跳ね返ってくるが、足を踏ん張ってやり過ごして穴をくぐって中に入ると、そこには幼い王と、その母である王太后がいた。壁に体をつけて身を守っている二人の無事を確認したノルンは、彼らに近づいて膝まづ

き、礼節を保つて対応する。

「大変騒々しいやり方で申し訳ございません。改めて、私の名はノルンと申します」

「ノルンか。その衣服といい、名前といい、そなたは異国の者だな」
「はい、王太后様。私は旅の者でございますが、パチルアやシオシスの惨状に縁を持ち、さしでまがしいことでございますが、介入しております」

「そなたは礼儀正しく、聡明で、目に清い輝きと力がある。そなたを信じよう。私はナビーフ王の母、ジヨフレフ。助けてくれたことを感謝する」

ジヨフレフは、息子に変わりノルンに対して、丁重な礼を述べた。ノルンは礼節を守りながら、その部屋を見渡し、そこが二人を監禁するために作られたろうである事を悟った。しかし、牢とは言っても、中は何部屋かに分かれ、家具なども揃えられており、窓が小さく小さ過ぎる以外は、普段通りの生活をするには問題はなく、軟禁に近い環境である様にノルンには見えた。それは、彼女から見れば、エーシユマの専制を実現させるための王族の排除のための扱いにしては、随分と緩すぎる環境に思えるもので、自債の所、奇妙な光景である。

「王太后様。このような仕打ちは、エーシユマの手で行われたのですか」

「……。うむ、それに間違いはない。そうではあるが……」

「一体、何でございましょうか。私は、この砂漠の民の未来を阻むものと戦うために、この地へ参りました。恐らくエーシユマは、未来を阻むものの力に呑みこまれております。それが本心か、それとも強要されているのかはわかりません。ですが、このまま彼を放っておいては、もはや誰にも幸福はやってきません」

真実を知りたいノルンではあったが、王太后は何かを知っているのは確実だ。だが、彼女はそれを明かすのを躊躇している、ノルンにはそう見えてならなかった。国には他人に明かしてはならぬ部分

があるのはノルンにも理解できる。だが、そこに砂漠の国の悲劇の根源がある予感がしてならないノルンは、辛抱強く答えを待つ。沈黙が空気を支配する中、ナビーフ王は、幼い子供のあどけなさが残るその顔に似合わぬ風格ある口調で、ノルンに向かって口を開いた。「ノルン、お前はこの国だけでなく、砂漠の民を救うと申したな。できるのか」

「できるかどうか以前に、救わなければなりません。いえ、救います。それが私が選ぶ運命の糸」

「運命の糸か。お前ともう少し話をしてみたいが、もう時がなさそうだ。すべてを話そう。そして、お前に頼みがある」

「それが、砂漠の国への救いの道に繋がるのなら」

ナビーフは母の顔を見つめた。ジヨフレフは、戸惑いを顔に浮かべていたが、幼いわが子の強い意志がこもった顔を見ている内に、彼女自身も覚悟を決めたように、力強い表情に変わっていった。小さな子どもでありながら、自分の意思を無言で主張し、母を納得させてしまうだけの気迫があるのは、やはり彼が受け継いだ王の資質の為せる技なのだろう。ナビーフは、ノルンに向かって、

「では、お前にすべてを話す。故に、余の頼みを聞いて欲しい」

と、前置きをしたうえで、心に冷えていたこの国のすべてをノルンに打ち明け始めた。すべての話を聞き終え、ナビーフの願いを聞いたノルンは立ち上がると、決意を込めた力強い口調で、二人を安心させるようにはっきりと断言した。

「すべての事情を察しました。お二人の思いは私がお預かりいたします。陛下、約束は必ず果たします。ですが、ここもまた戦場になるかもしれません。お二人は、ここから非難なさってください」

ノルンは牢の入口のドアを蹴り飛ばすと、そこから二人を脱出させた。そして、自身は先程は居てきた穴から中庭に飛び降り、城の内部に駆けだしていく。

「あの二人の重過ぎる程の思い、決して無にするわけにはいかない。これで、けりをつけてやる」

ノルンはいつにも増して、険しく、強い意志がこもった表情を浮かべながら、戦いに挑んでいく。

エーシユマによって頭を踏みつけられているアータルを援護すべく、アープは革袋に手を入れ、水に濡れた手を引き抜きながら氷の槍を作り出し、エーシユマの顔に向かって投げつける。エーシユマは、全く恐れることなく手で払いのけるが、その分だけ注意が上に行き、足元にかかる体重が軽くなった。その隙について、ワルフがエーシユマにタツクルをかけてアータルを開放し、突風で彼女の体を一旦引き離す。

「アータル、大丈夫なの」

アープが心配してアータルに声をかけるが、彼女は無言で頭を振りながら、額に流れる血を手で拭い、再び立ち上がって戦線に復帰する。

「女だからって手加減しない所、そこだけは気に入ったよ。きつちりとお返しはしてやるけどね。ワルフ、手を貸して」

「年長者を顎で使うんじゃないねえ」

ワルフは悪態をつきながらも、素早くアータルの後ろにつき、両手を彼女の背中に添える。風の力が嵐となって、アタールの体に流れ込み、炎と一体になってうねり出す。

「手加減する余裕なんかない。火傷は覚悟しな」

身を持ってエーシユマの力を知っているアータルは、彼が自分達の能力を加減して勝てる相手ではない事を悟っているため、攻撃に躊躇がない。下手な手加減をすれば殺されるとまで、考えている。彼女は、風に乗ってうねり出した炎をさらに強め、竜巻状になった炎をエーシユマに向けて発射した。エーシユマの体は、熱風と火炎の中に呑みこまれ、体に身につけている呪いの鎧が高熱であぶられていく。あれだけ、高温の炎にさらされれば、金属生命体も我慢できずに、鉄器から剥がれ落ちるはずである。

しかし、エーシユマ自身がそれを拒絶する。手にした斧を振りか

ざすと、渾身の力を込めて不利降ろし、衝撃で発生した真空の隙間に炎の竜巻が切り裂かれていく。かまいたちは、竜巻を切り裂いたで家では勢いが衰えず、アータルとワルフの二人に襲いかかっている。技を破られた衝撃と、襲いかかる脅威の前に死を覚悟した二人の前に、アープが身を呈して飛びこむ。そして、空气中に散った水蒸気や、地面にしみ込んだ水分を手元に凝縮し、氷の息吹で瞬間的に凝固させ、分厚い氷の盾を完成させた。

かまいたちは、氷の盾に衝突し、それを粉碎したが、同時に勢いが分散されたため、消滅させてしまふ。それでも、すべての衝撃波を消せたわけではなく、盾を突き抜けたかまいたちがアープの体を切り裂き、鮮血が飛び散る。

「アータル、しっかり」

「無茶しやがって」

アープの元に駆け寄り、声をかける二人であったが、アープはしっかりとした口調で返事をし、自力で立ち上がった。

「大丈夫です。かすり傷ですから。でも、氷の盾があと少し薄かったら、三人とも切り刻まれていました」

アープもまた、その体でエーシュマの底知れない強さを思い知ることになった。超人である三人を、エーシュマは完全に上回っているのだ。もう打つ手がない三人であったが、危険を感じても恐れは感じていない。自分達に与えられた力の意味を、今この戦いではつきりと見つけたかからだ。

「あたし達は、あいつと戦って、この国を含めた、様句の民の未来をつかむために、この力を得たんだ。その意味がやっとわかった」

「ええ。そのためにも、あの人を倒さなければならぬ。でも、命を奪ってはならない。それは、憎しみの種をばらまく事になってしまふ」

「味方とか敵とかじゃない。この砂の地で生きたいと思う連中のために戦うんだ。こいつだってその一人だと俺は考えているぜ。だが、打つ手がねえな。あるとすれば、三人同時に力を解放するくらいか」

それを聞いたアータルとアープは、にっこりと笑みをワルフに向けて。三人の意思が一つになった。前に並ぶ彼女た体は、肩をぴったり密着させる。そして、ワルフが二人の肩に手を添え、渾身の力を超え、二人に風の力を分け与える。

「あたしに与えられた力の意味は、勇気を持って前を向き、災いを焼き払う強さ。でも、あたしには、周りを見渡す心の広さが無い」

「私に与えられた力の意味は、立ち止まり、砂漠の命である水を操りながら、いきり立つ二つの魂を鎮めめること。でも、私は道に迷い、踏み出す事が出来ない」

「俺の力の意味は、風を操り、まだ小さな魂を後押しし、支えること。だが、俺には年とともに諦めの心が生まれ、可能性を見つ得られない。そんな三人だから、精霊は俺達の戦士の力を与えた。一人一人でも駄目なんだ。俺達三人で一つの魂であり、一人の戦士。そこに、俺達が戦い存在する意味がある」

三人は、戦士について存在する意味を悟り、精霊の力をすべて引き出していく。前に突き出したアータルの手には、太陽の様に真っ赤な炎が凝縮された火の玉が出来上がる。アープの周りには、水が空中を流れ、蛇のようにうねりながら次第に氷の剣に変わっていく。これまで発動した事のない力を、三人は見事に操り、エーシュマに対峙する。

「二人とも撃て」

ワルフは叫び声とともに、風の地からすべてを二人の体に送り込んだ。それによって増幅された歩のと水の力を完全に手の内に入れたアータルとアープは、エーシュマに向かって火炎弾と氷の剣を放った。氷の剣は、エーシュマの足を貫通し、地面に突き刺さることで彼の体を固定する。そして、回避できないエーシュマにアータルの火炎弾が胸元に炸裂し、その炎が上半身を覆っていく。

すべての力を出し切った三人は、エーシュマの姿を見つめながらその場に座り込んでしまった。さすがに疲労の色は隠せないが、相手から目を逸らす事だけはしていない。戦いはまだ終わっていない

と感じているからだ。

「まだ、戦えるわけ……」

アータルは目を見張った。氷の槍を折り、自由を取り戻したエーシユマは、胸に火炎弾をめり込ませながら、一歩ずつ三人に向かって近づいてくる。三人には、相手は人の形はしているが、もはや本当に人ではなく魔物としか思えない。動けない三人に一歩ずつ近づくとエーシユマは、手にした斧を振りかざした。それを見たアータルは必死に立ち上がり、最後の力を振り絞って炎を全身に纏い、自分の両腕で相手の斧を受け止める構えを見せる。

「やめなさい、アータル」

「馬鹿野郎。お前の両腕と引き換えに助かるぐらいなら、俺の命をくれてやる。どけ」

二人はアータルを止めようとするが、エーシユマは構わず斧を振り下ろした。アータルは次の瞬間に襲いかかる激痛、或は死を覚悟した。だが、彼女の身に起こったのは、どちらでもなかった。

閃光が頭上を通過し、エーシユマの斧に命中し、その衝撃で彼は後ろに大きくよろめく。そして、アータルの後ろから、聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「二人をかばうだけの馬力と覚悟があるなら、二人を連れて攻撃を回避するっていう発想ができないの」

「ノルン……」

アータルの目には、右手に槍を、左手にシャインブラスターを構えているノルンの姿が映った。ノルンは三人の元に駆け寄り、

「みんな、自分達の力の意味がわかったみたいね」

と、語りかけた。アータルは、あれだけノルンに噛みついていても拘らず、彼女の姿を見た瞬間、目に涙を浮かべている。自分のできた事の間違い、死の恐怖、そして自分も彼女の様になれるかもしれないというかすかな憧れが、心の中で複雑に絡み合い、不思議な感情が涙をあふれさせているのだ。ノルンも、アータルの様子に気がつき、変わらず優しい口調で語りかける。

「戦士が簡単に泣いちゃいけないわね。でも、よく頑張ったね、アータル。あなたの勇氣、しっかり見届けたから」

「うん……」

意地を張って嘔みつき、好戦的ないつものアータルからは想像もつかない素直な態度に、本当尾の氣質を知っているアープとワルフは、笑いながら彼女を抱きよせた。その様子を見届けたノルンは、彼らに変わってエーシュマと対峙する。

「さあ、次は私が相手になる。シャインブラスター一発で伸びる程、柔なあなたじゃないでしょ。もつとも、それだけでも十分に化け物じみた状態にんだけど」

不意打ちに我を失っていたエーシュマだが、再び戦意を取り戻すと、斧を肩に担ぎながらノルンに接近していく。

「次に殺されたいのはお前か。なかなか面白い真似をするようだな」
「まあね。とりあえず、あなたのその物騒な武器を破壊する。話はそれからよ」

ノルンは、ツインランサーを振り回し、遠心力を加えながら相手の出方を待つ。エーシュマも、ノルンに戦闘技術があるのを察したのか、間合いを必要以上に狭めず、慎重な姿勢を取る。そして、少しずつ接近する二人が互いの間合いに踏み込んだ瞬間、ノルンは飛び上がり、エーシュマは横から斧を繰り出し、二人の武器がぶつかり合った。

守り刀の力を発し、金属生命体が付着した斧を粉碎したノルンだったが、武器がぶつかり合った衝撃を受け止めきれず、小柄な体は弾き飛ばされ、外壁に叩きつけられ、倒れた彼女の上に、土壁の破片が降り注ぐ。エーシュマもまた、ノルンのツインランサーの力が体に流れ込み、予想以上の剣圧に転倒する。

アータル達は、少ない体力で何とか立ち上がり、ノルンの元に駆け寄った。ノルンはせき込みながら、口から少量の血を吐いている。宇宙人ではあっても、人間の様にタンパク質ベースの体に擬態しているため、ダメージの蓄積の仕方も負傷の仕方も、閾値が違うだけ

で生身の人間と同じ法則になるため、今の衝撃はノルンの体に相当な負荷がかかっていた。

「大丈夫、ノルン。血を吐いているけど……」

「心配しないで、アータル。一応、これでも頑丈にできているからでも、この状態じゃ話にならないかもね。変身したいところだけど……」

「できないの」

「あと少しよ。だけど、ヤバい状況なのに、コスモプレスがもう使えない」

ノルンは、手にしたツインランサーを持ち上げるが、先程の衝撃がまだそこに残っており、細かい振動をしている。やがて、ランサーは形状を保っていらなくなり、プレスレットとなってノルンの左腕に戻っていった。

「御覧の通り、今は手の打ちようがない。本当にあと少しなんだけど」

「どうするの」

「死ぬことを前提で戦った事がないから。こういう時は、一旦退くさあ、相手が起き上がったわ。みんな、走れるわね」

ノルンの問いに無言でうなずいた三人は、エーシュマとの距離を置くべく、城の中庭に向かって逃走を始める。それを見たエーシュマは、粉碎された斧から金属生命体呼び出し、己の鎧に生命体を加え、四人を追跡し始める。

一旦狭い廊下に入った四人だが、エーシュマは廊下の壁や天井の土や石を崩しながら執拗に追いかける。ノルンは、その姿に恐怖は覚えないが、呆れると言うか、うんざりする気持ちになる。

「別に逃げるわけじゃないのに。しつこい奴って面倒ね」

普段愚痴をこぼさない彼女がそのような台詞を言うのだから、どれだけ異常な事態かがわかると言うものだ。ノルンは、シイ安ブラスターを手にし、振り返らずに後ろへ発砲した。光弾は、エーシュマの足に命中したが、ノルンは当たればどこでもいいと思っ

ので、確認せずに走り続ける。

必死で走り続けた三人は、中庭に出た。だが、エーシュマもすぐに追いつき中庭に到着し、ノルンに狙いを定めて襲いかかる。ノルンは銃を構えるが、隣社ができないため発射できない。エーシュマの拳がかの地に迫るが、アータル達がノルンを助けるために必死にエーシュマにしがみついていくが、ほとんどの力を使い果たした彼らでは、もはやエーシュマを押さえつけることはできず、一人ずつなぎ倒されていく。邪魔を追い払ったエーシュマはノルンに蹴りを放つ。彼女は、いつもの流れるような構えで、エーシュマの攻撃を受け流そうとするが、軌道を少しだけ変えるのが精一杯で、打撃をまともに食らってしまう。彼女の小さな体は、叩きつけられ、地面の上を滑っていく。

エーシュマは、ノルンに対し、そこ知れない力を持っていると、理解している。そのため、相手が実力を発揮する前に仕留めようと考え、ノルンめがけて走り出す。そこに、アープが彼の足にしがみつき、最後の革袋の中の水を相手にかけると、力を振り絞って水を氷に変えて、少しでも進行を押さえようとする。だが、腰のあたりまで凍結が進んだところで、エーシュマは金属生命体が膨れ上がったことで氷を砕き、自由になった足でアープを蹴り飛ばした。そして、再びノルンにとどめを刺そうと走り出す。

しかし、ノルンは跳ね起きると、右腕をかざし指輪を正面に向け、自身の意思を伝える。

「お待たせ。今度はお互いにまともな戦いができるわよ」

不敵な言葉を放ちながらもシリアスな表情を浮かべるノルンの周りに光の魔法陣が現われ、彼女の姿を光の戦士に変える。そして、怒涛の勢いで突進するエーシュマの体を触れるか触れないかの間合いで体勢を入れ替え、彼の体を裏返しにして投げ飛ばした。変身と不思議な構えから繰り出された投げに、エーシュマも地面の上に横たわりながら、多少の戸惑いを感じているようだ。

ノルンは、構えを崩さずに、横たわったまま動かない敵に対して

警戒を崩さずにいる。相手を見下ろしながら、ノルンは意味深な言葉をついた。

「そんな金属生命体に蝕まれるほど、あなたの意思も覚悟も柔らかなもの。あなたなら、自分の意思でその鎧を脱げるはず」

ノルンは、あくまで穏やかに、静かな声でエーシュマに語りかける。彼女の優しさも加わり、言葉は祈りの様にさえ、アータル達三人の耳にも聞こえた。静寂が辺りを包んでいるが、肝心のエーシュマにその声が届いているかがわからない。ノルンはじっと、相手の出方を待っている。

だが、ノルンの言葉は彼に通じることはなかった。けだもののような声をあげながら起きあがると、全身の筋肉をより隆起させ、体躯が膨張し巨大になっていく。狂った様な唸り声を上げる彼の姿はもう人間のものではない。ノルンは、エーシュマが金属生命体によって脳にまで干渉され、人間らしい理性が吹き飛ばされたと認めざるを得なかった。

「やっぱり、戦うしかないわけね」

ノルンは、覚悟を決め、攻撃に備えて流れる構えをとる。逆にエーシュマは、野獣の如き猛々しさと、暴力的な力で拳を繰り出してきた。パワーだけでなく、スピードも増加もノルンの予想を超え、受け流す事ができず、正面から両手で受け止めることになってしまふ。すべての衝撃や重さが、ノルンの小柄な体に突き刺さり、腕は踏ん張りきれてものの、足が重さに耐えきれず地面にめり込んでいく。そして、エーシュマは片手で力比べの体勢に持ち込むと、両腕を塞がれ動く事ができないノルンに対し、空いている腕で腰に差していた剣を抜き、ノルンの体を薙ぎ払おうとしてくる。危険を察したノルンは、剣が背食する直前でブリッジを聞かせて回避する。そして、その勢いを利用して後方に身を翻して、体勢を立て直す。だが、エーシュマも武人であるため、ノルンの動きについていき、今度は剣を頭上から降りおろしてきた。ノルンは、決して相手から目を話していなかったので、相手の動きも剣の起動も完ぺきにとらえ、

頭上に迫る刃を、真剣白刃取りの様な形で受け止めた。

切り裂かれる事を逃れたノルンだったが、エーシュマはそれに構わず剣を押し込み、ノルンの頭に剣を叩き込むか、そのまま押し潰そうとしている。だが、ノルンも超人を超える力を持つ存在だ。エーシュマに負けじと押し返していき、両者は膠着状態になる。動けなくなり、ひたすら押し合う二人だったが、突然彼らの視界に火の玉が高速で飛びこんできた。全身を炎で包んだアータルだ。驚いたノルンが目をやると、ワルフがアータルの体を投げ飛ばし、その際に送り込んだ風をアータルの体の周りに纏わせ、アータルはその風に炎を乗せながら、エーシュマの剣に体当たりをかけた。熱と衝撃に剣が耐えきれず、ちょうど真ん中でたたき折られた格好になる。その隙にノルンは、側転して体勢を入れ替え、アータルの近くに着地する。

「ありがとう、アータル。でも、無理し過ぎよ」

「助けてもらったお礼だもの」

「過ぎるくらいのお礼よ。もう大丈夫だから」

ノルンは静かな口調でアータルにその場でじっとしているように指で示すと、ゆっくりとエーシュマに近づいていく。そこに漂う空気は先程までとは一変し、時が止まった様な張り詰めた空気になり、アータル達三人には、息苦しさを覚える程の緊張感が漂う。そしてノルンの声も、冷徹さが顔を表し、より戦士らしい口調と声色に変わっていく。

「できれば、平和に解決したかったけど、戦いでしかわかり合えない、もうそこまであなたは魔道に引き込まれた。なら、あなたを救うのは、戦士としての私」

ノルンは言葉と共に身構えていくが、先程までの流れる様な、柔の型ではない。キレがあり、力強さを感じさせる、闘志を体現するものに変化している。エーシュマもまた、その変化に気がつき、警戒心を抱き、足を止めた。そして、ノルンの構えを見た彼は、もう人の声とは言えないしわがれた声でノルンに問いかける。

「何だ、その構えは」

怪訝そうな響のある口調で質問するエーシュマに、ノルンは静かに力強く答えた。

「獅子座の戦士より伝えられし、宇宙拳法。これは、その流れを汲む私だけの傍流」

ノルンの答えに利いたエーシュマは、狂気に満ちた先程までの唸り声などがなりを潜め、整然とした態度が次第に色濃くなっていく。さらに、驚くべき事に、彼もまた格闘術で応戦する意思を見せ、ノルンと同じ土俵で戦う構えすら見せている。

「獅子座、宇宙拳法……。面白い。その強さ、神髄、そして、お前がいかほどのものか、味合わせて貰おう」

「それでいい。全力であなたに立ち向かう」

「がっかりさせるなよ。名を聞いていなかったな。貴様の名は、何と言いつ」

「ノルンか。さあ、お前の強さを見せてみる」

「いいわよ。その代わり、先手はそっちでいいわ」

ノルンは余裕と言うより、終始感情を全く出さず、落ち着いていく。エーシュマも、何故か先程までの野獣の様な様子はなりを潜め、挑発にも乗らず、少しずつ間合いを狭めていく慎重さを見せる。対して、ノルンは一步も動かず、ただ相手との距離だけを目と体で測るのみだ。ゆっくりと二人の間が狭くなり、やがて互いの射程距離に入る。

エーシュマは左足を軸足にして、逆足でノルンの体を根こそぎ薙ぎ払うかの様な蹴りを繰り出す。対してノルンは、微動だにせずギリギリまで引き付けると、開脚して体を沈め、頭上を足が通りすぎる瞬間右手を伸ばしてフックする。彼女の体に遠心力が加わり、子を描きながら宙を舞う。そして、狙いを定め、自分の力と体にかかる遠心力を利用して、エーシュマの即頭部を蹴り抜いた。一点に力を集中し、相手の力の運動も利用した蹴りは、金属生命体によって強化された鎧を、粉々に打ち砕く。驚きとノルンのけりの衝撃で体

がぐらついたエーシユマの方にノルンは倒立して着地し、バネを利かせて回転真ながら、背後に回り込み、気合の声と共に背中に肘を打ちこんだ。鎧に亀裂が入り、ばらばらになって崩れ落ち、エーシユマも前のめりになって、倒れ込む。

ノルンは確かに宇宙拳法を学んでいる。だが、そのまま受け継ぐには、体格も体力もノルンはあまりにも不足していた。それ故に、技もほとんど教えられておらず、教えられたのは基本技と型のみである。しかし、ノルンはそこに工夫を加えた。以前に習得したパルクールをそこに組み込むことにより、空間すべてを使って相手と戦い、彼女が持つセンスや経験を注ぎこみ、独自のスタイルを築き上げた。感所は傍流と謙遜するが、道は違えど、独自の方法で宇宙拳法の神髄に近づいたことは、誰もが認めており、今やその型は、誰も真似ができないノルンだけのものになっている。

一回りどころか二回りも小さいノルンに手玉に取られた事に戸惑いを見せていたエーシユマだが、立ち上がると再び闘志を前面に出し、今度は右腕で拳を繰り出してきた。ノルンは、その拳を両腕で受け止める。だが、ただ相手に抵抗して止めるのではなく、相手の力を利用して今度は腕に飛びつき、関節を極めていく。ノルンが腕をねじり上げることに、エーシユマの骨と鎧がきしんでいく。そして、さらに力を加えることで、力に耐えきれなくなった鎧が崩れ去り、肩の関節も外れてしまう。

ノルンは地面に飛び降り、一旦間合いを取る。エーシユマは痛みを顔をゆがめながらも、自力で関節を戻し、今度は左腕で殴りかかる。ノルンは、背中を反らしながらそれをギリギリでかわし、振り上げた足を相手の腕に当てる。ただ一点に最大の力を注ぎ、それ以外は流れる動作で力を浪費せずコントロールすると言う宇宙拳法の神髄そのままに、それを独創的な動きで繰り出すノルンの技をよけることは、砂漠の中でしか戦闘経験のないエーシユマには不可能なことだった。

両腕の鎧を失い、さすがにひるみだしたエーシユマだが、その心

が折れるのをノルンは見逃さない。腕を地面に突き立て、水面蹴りを繰り返しまずは左足を、腕を切り替え回転を逆にして、右足を攻撃し、両足の足当てを砕いた。

「さあ、残るは胴体だけよ。次はどう出るの」

その口調は、奢りではなく厳しいもので、ノルンはまだ相手が戦う意思を捨てていない事を見抜いている。事実、エーシュマは、姿勢を立て直し、じっとノルンを見据えており、まだ戦闘をやめる気配はない。じっと見つめ合う二人の間に沈黙が流れる。息苦しさを感じる程の沈黙に、そばで戦いを見つめていたアータル達も、顔に汗を浮かべていた。

「すごい。ノルンってあんなに強かったんだ……」

「違うわ、アータル。相手が強いからこそ、ノルンさんも力を出さざるを得ない。こんなに張り詰めた空気、どちらも余裕はそれ程ないはず」

「これだけ離れていても、緊張感が伝わってくる。俺達まで息をするのを躊躇ってしまうくらい、張りつめた空気だ。恐らく次で決まるな……」

三人の言う通り、ノルンの力は今初めて解放されたのだが、それはエーシュマの強さがあればこそである。そして、ノルンも相手の実体が人間であるが故に集中して戦わざるを得ないため、精神面ですりへっていく事を避けられず、お互いの消耗度はほぼ互角である。ノルンもエーシュマも、これ以上の戦闘の長期化は望んでいない。

構えを崩さず、微動だにしないノルンの足元を、何かがかすった。ノルンはそれを見ずとも正体の見当は付いている。それは、金属生命体が移動していくものだった。砕け散った鎧の破片から離れた彼らは、素早い動きで合流度移動を繰り返し、エーシュマに残された胴の部分の鎧に付着していく。それと共に、エーシュマの体はさらに筋肉が隆起し、肌の色も青黒くなり、人間からかけ離れていった。恐らく、人間として存在できる限界点だろうとノルンは、冷静に見

極めている。

「さあ、決着をつけるわよ、エーシュマ」

ノルンは地を蹴って、高速でエーシュマに接近する。彼もまた、腕を前に突き出してノルンの攻撃を阻みに行く。ノルンは、拳を突き出し、渾身の力で最後の鎧を粉碎しようとする。だが、狙いが一点しか存在しないために、エーシュマもノルンの攻撃の狙いを定めやすい。ノルンの腕をがちりと捕らえ、そのまま体を持ち上げる。そして、小柄な彼女の体を放り投げると、究極まで強化された脚で蹴りあげた。ノルンの体はものすごい勢いで打ち上げられ、回転も加わっている。その高家を目にしたアータル達の脳裏に、ノルンの敗北と言う状況が頭をよぎった。

だが、当のノルンは冷静だった。拳を体力面で完全に止められたのは驚きだったが、それで仕留められるかどうかは五分五分と予測していたからだ。その後のエーシュマの攻撃も、ある程度は前もって頭の中で想像できたため、下手に抵抗せず体の力を抜くことで衝撃を受け流した。そして、体に加えられた回転をノルンは自分のものにした。

回転しながら上昇していくノルンの体は、やがて最高到達点に達する。すると、そこで宙返りをして、力の向かう方向を下方に修正し、エーシュマに狙いを定める。そして、ノルンは低く小さな声で、「宇宙拳法奥義、破邪蹴撃」

と、はつきりした口調で呟いた。ノルン自身の力とエーシュマに加えられた力が合わさり、彼女の体は矢のようにエーシュマに向かって飛来する。彼は、そのスピードにノルンの攻撃を避け切れないと判断し、両腕で防御体制に入る。それと同時に、ノルンの蹴り足が到達する。エーシュマの体に衝撃が走り、足が後方に滑っていくが、完全にノルンの蹴りは防御され、受けきった。エーシュマ自身はそう確信したが、ノルンの攻撃は終わっていない。インパクトの瞬間、ノルンの足は速射砲尾のように蹴りを連打していく。その連続蹴りは目には見えない速さで繰り返され、次第にエーシュマの両腕の防

御を崩し、こじ開けていく。

ノルンが独自に、そして宇宙拳法の神髄に触れて、己の肉体と精神で到達し、会得した技がこの「破邪蹴撃」である。体が小さく、体力でも見劣りするノルンが自分にしかできない型として選んだのが、スピードを生かして一点に連することで、攻撃の威力を上げるこの技だった。攻撃の精度と、本当に田尾差なければならない邪悪なものを見抜く目を得たノルンだからこそなし得る、傍流の奥義と言える。

破邪蹴撃を正面から受けたことで、その速射砲から逃れられないエーシュマは、次第に防御の両腕が開かれていき、胴体の鎧がさらけ出されていく。体を避けることもできず、防御を立て直すことのできないエーシュマに、もはやなす術がない。彼が断末魔の絶叫を上げるとともに、両腕が弾かれ、ノルンの体は相手の懐に飛び込んだ。そして、目に見えない連続の蹴りが鎧に連打され、エーシュマの肉体は後方に吹き飛ばされ、呪いの鎧は、その場にバラバラになって崩れ落ちた。実を翻した着地したノルンは、その鎧に向けて腕をし字に組み、タキオンストリームを放射し、金属生命体を焼き払っていく。熱線により、ボコボコと泡立ち始め、やがて蒸発していった。

終わった……

ノルンはそう確信したが、やがて足から力が抜け、光線が消滅した。いつの間にかカラータイマーの点滅が危険域に達している。戦闘と、エネルギーの消費、ダークエネルギーの干渉、そして激しいタキオンストリームの発射のため、激しい消耗にさらされたためだ。熱線を中断したため、金属生命体の一部が生き残ってしまう。それらは一つの集合すると浮遊し、敵から逃れるべく猛スピードで上昇し、空に消えてしまった。ノルンは変身を解き、生命体が消えた空を見つめている。

「逃がしたか……。でも、やっぱり宇宙へ。自分で偶然ここに来たのならいいけど、意図的に送り込まれたのなら、この旅は生半可な

ものじゃなくなりそうね」

この後の旅に不穏なものを感じながらも、砂漠の民の災いの種を取り払えただけでも良しとしようと考え、ノルンは立ち上がると、倒れているエーシュマの許に歩み寄った。彼の体は普通の人間の大きさに戻っており、日に焼けた筋骨隆々とした、たくましい武人の体を持つ人間エーシュマがそこにいる。ノルンは、駆け寄ってくるアータル達と合流し、彼らと勝利を喜び合う。

「ノルン、すごいよ。あんな技、初めて見た」

「それはそうよ。あれは私だけの技だから」

「アータルの言う通りすごいですよ。鎧だけを砕いて、このエーシュマと言う人の体は一切傷つけないなんて」

「まったく。俺達は戦士なんて、今後名乗れないな。未熟さが身に染みて良くわかった」

「みんなが、私が戦う前に、頑張ってくれたからよ。それに、私は、王から託された願いがあるから」

ノルンは、エーシュマのそばに膝をつき、まだ朦朧としている彼に、静かに呼びかける。

「起きなさい、エーシュマ。あなたには訊きたい事があるし、王からの伝言がある」

ノルンの言葉に、エーシュマは再世は苦悶の声を上げていたが、やがて眼を開き、顔色も戻ってきた。そして、目を動かしながらノルン達を見渡すと、口を開き、はっきりした口調で、

「情けなき姿をさらし、面目ない。礼を言います。そして、陛下からの言葉を聞かずには、死ぬ事ができません」

と、口にした。これだけ消耗した体で、礼節も失わず、しっかりした口調で喋るエーシュマの姿勢に、ノルンはもちろん、アータル達も彼に対する敬意がすぐに芽生えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5190z/>

女神と戦士と旅人と journey of norn

2011年12月28日00時54分発行